



094505-000-3

特10-393

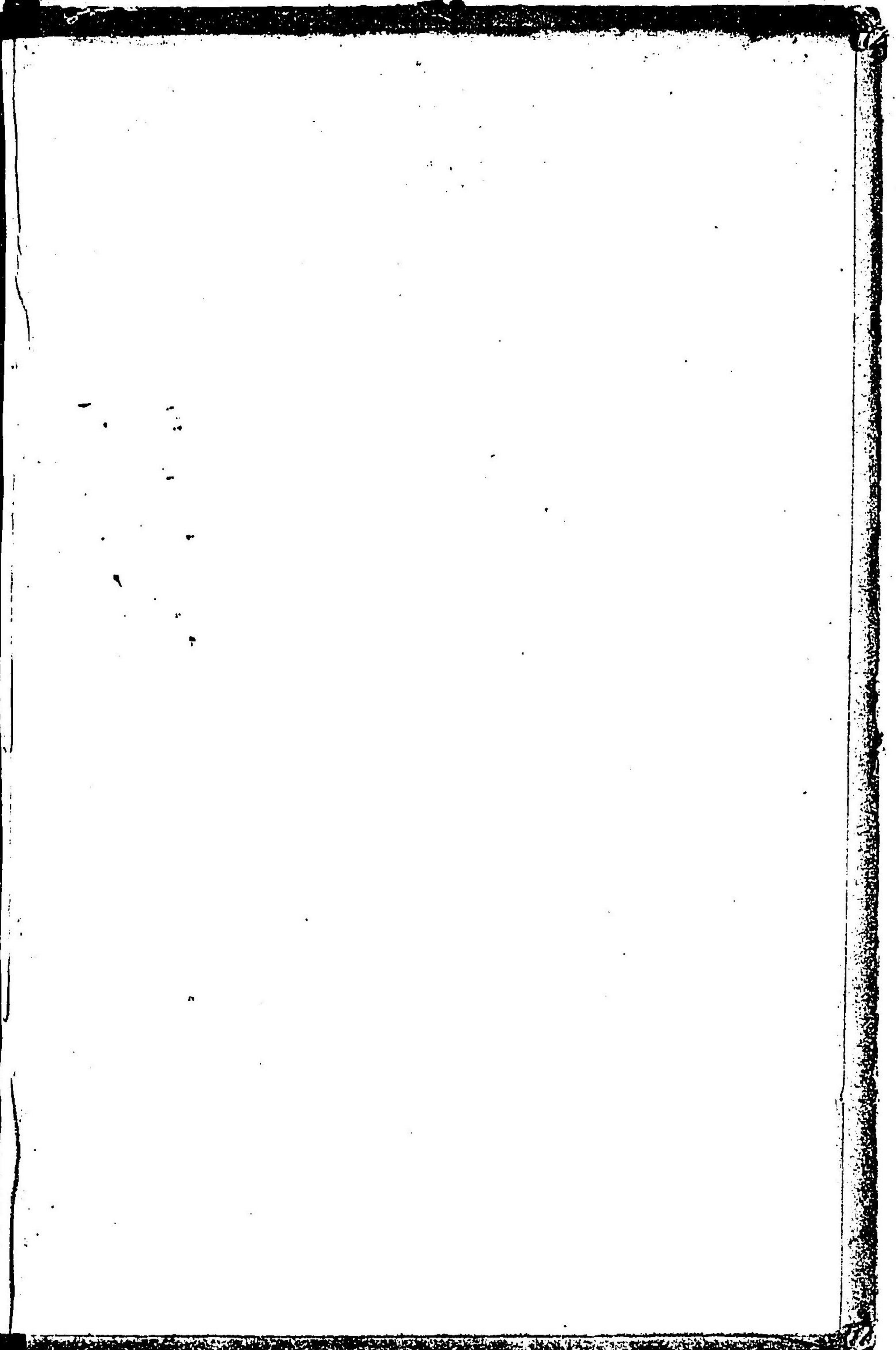
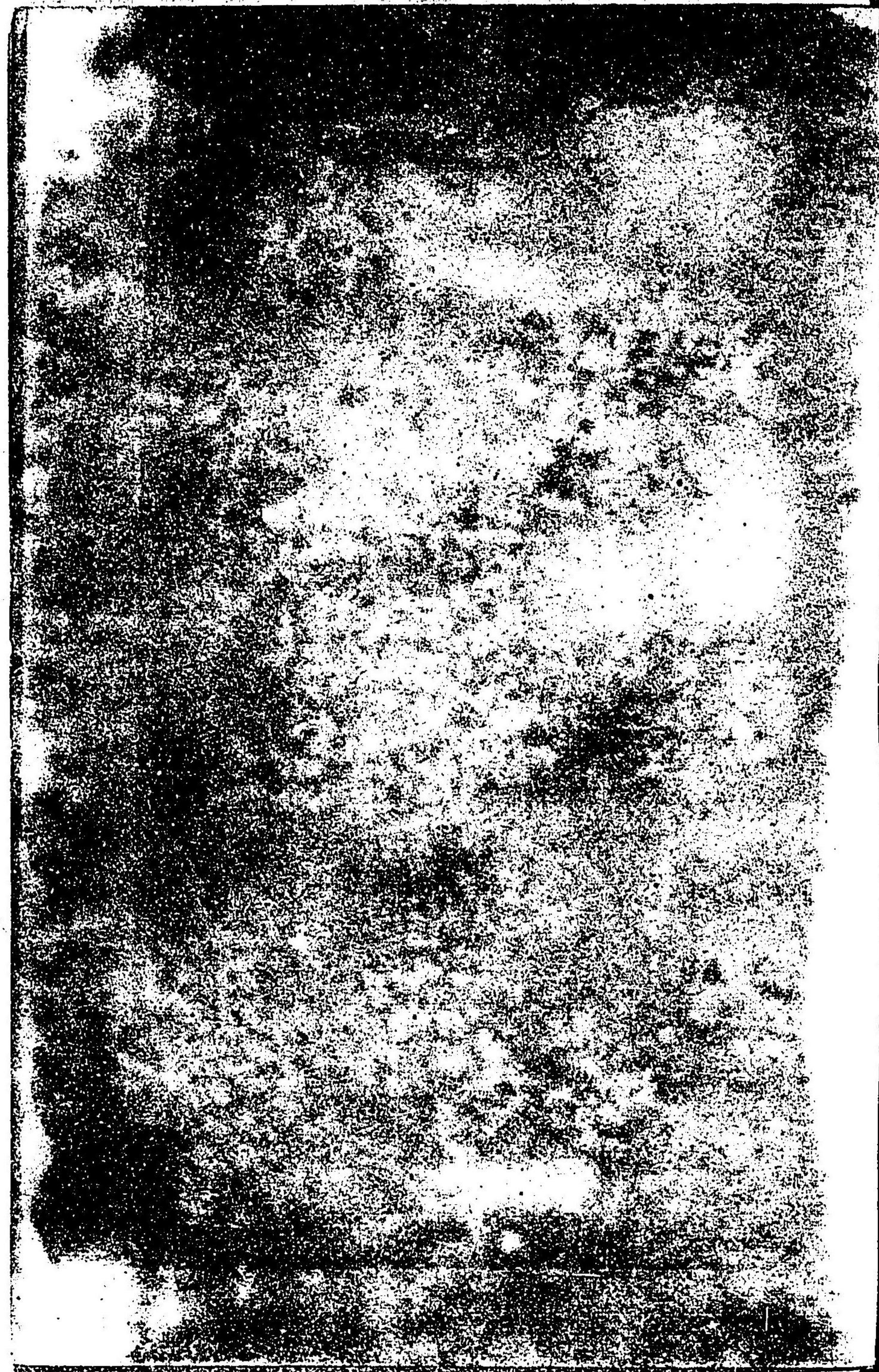
晝夜帶 (十人十種)

花廼舎 静枝 / 著

M22

DBQ-2017





花廼舎静枝著

十人 おゆじん
十種 とほろ

晝夜帯 や 完 おび

東京

共和書店

版權所
有之印

we 20187/22

十人種 晝夜帶叙

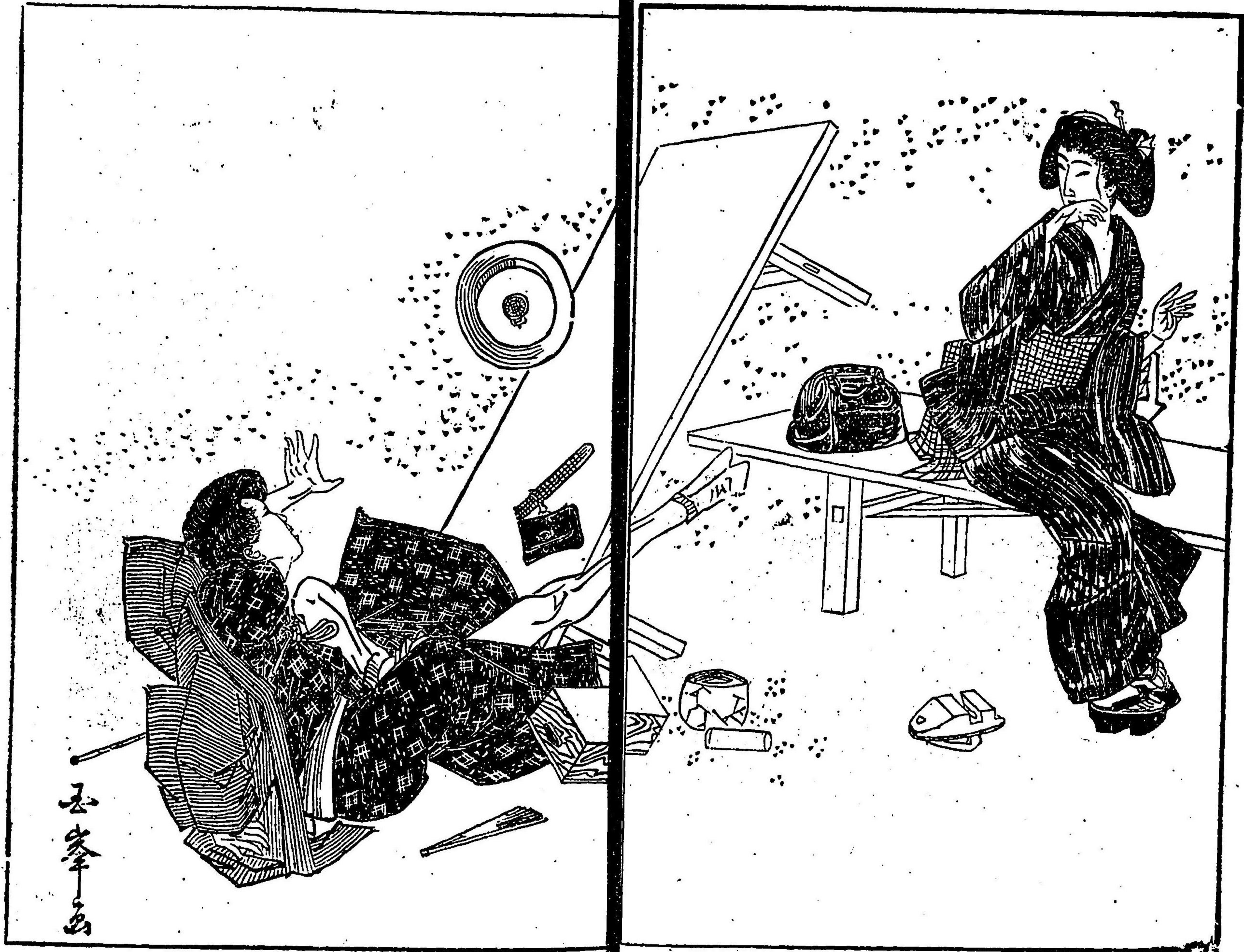
染縮緬の華美を好む佳人あれば結城紬の質素を貫
 む才子あり其他八丈糸織南部とおのが隨意ある品好
 十人十種の人心千態萬狀さまざまある世の人情も
 約る處ハ善と惡との晝夜帶曳懸結ひの世話女房お玉
 の貞操ふ引替て藝妓小民の不信實色事仕掛も其原
 因ハあ金田屋の三人兄弟れのく異なる心根も盛衰
 浮沈も一樣あらぬ模様をその儘裁縫上げたる作者ハ
 素より人情の極微を穿り天眼通に趣向ハ當時ハ流行





又
涉

西峰寫



玉峯画





明日となつたゆゑ改ためて子供等一同へ言ひ渡す事があるから皆我前へ集めたものが改ためいふといふも外ではない。自身も六十一といふものだから人間に定まりの壽命を通り過ぎて是から先の利息で生て居る様なものだから娑婆の慾張の今日も廢止として此財産を子供中へ譲り渡す事に仕様と思つて斯うマア顔を描へさせたが就ては是迄子供等の所爲に付て随分やかましい事をいふたが今日財産を譲り渡すから自身財産でなきゆゑ決してやかましい事にはぬ其代りに今日だけ少し計りやかましくいはねばならぬ故は丈けは耳を浚ふて啼……………子供達……………聞てくれねばありませぬ……………其處でお前等も時々自身が説教で耳痛ふ聞ても居やうか此財産の前等の祖父様自身が親の一代で仕揚げた財産だ。祖父様の江州の極邊鄙な處からボテふりて此京都へ出た人だ。何が昔時の事ではあり外飾も風俗もいらぬ時分だ。唯々金さへまうければ宜いといふので夫へく働らかれたのであつた。朝は星を戴たき暮に月を踏で断るといふのだ。人が一日に蓄七時牌も働らけへ自分の一日に九時十時も擲了ればならぬと……………聖人の仰しやつた子に臥し寘に起て擲了れた其時分の商買は何だ

いふに飽賣だ……………ナニ耻かしい事のない正直な事だ。朝から晩まで京都の町々を縦横十文字にグルグル廻つて鐘を敲いて飽や〜と外鳴つてゐるかれた。時に此中京を通る時が毎日同じ時刻であつて一日も刻限を違はした事のない妙な者だ。人の出世する時といふの妙な處から手藝にあり付者だ。毎日飽を售て廻り。其比の今の様に時計などはないが。アノ飽賣が来たら何時だといふ事が確乎になつてお炊婢が電元を焚付る様よなつた。處で今の母屋の先代が目と付られアノ飽屋の妙な奴だ。アノ者の見處があるとして自分の店へ引上げて手代にせられた者である大勢の人を使ふ主人の鑒定の違はぬもので。ナニ……………ま、幸吉といふた。客受のよし商買の上手なりでズンズン出世したるが舊の飽賣を決して忘れなかつた。奉公も出入十年何ひとつ落度なく勤め上げて隣儼を分て貰ひ小しの資本から西陣もの、仲買を初め夫から段々仕揚げて來て此屋敷も取るアノ屋敷も取る様になる番頭も手代も入る様になつて此店にチャンと今での中京でも先の耻かしくもなく人に肩を并べる財産となつた尋常大抵の創業てはないと思やれ……………其艱難の今より見れば馬鹿げた馬鹿だが逆も今時の人の及ぶ處てい

ない然るに老年になられて死病に罹られた時自身を枕元へ呼で。其方人の金を取る働らきのない代りに金を捨てる働らきもない故世の中をわせらすにこの財産を増とも減さぬ様に心がけよと只一言の遺言で往生しめされたが……南無く「モシお茶をめし上りませ」アイくサア一同も心よく茶など飲ってくれ跡で酒にするゾ……

ふ た 筋

「昔時の人が云た。創業の易く守成の難しと。なんの事もない東照宮の三百年の創業は漸々起して行のだから一向易いものだが。二代の台徳公の最早出来上つた將軍家を守る故難いと云事だ然し難い事の難いが親御の艱難を見做つて居らるゝからまた樂だ。三代目の大猷公に至つては合戦なんぞの艱難をサツパリ知らぬ生れた儘の將軍家で餘程むつかしい時だ。世上のまだ血膽いワ。イザといつたら徳川の天下を覆顛さんとする大名が幾千もある此所が洵に失策時だが父公祖父公にも増つた家光公なればころ十五代も繼續いた是が尋常の人物であつたら賣家と唐様にかく三代目とならねばならぬ。然から昔時から俚諺にも親が苦勞する其子樂する其孫乞食すると是の此京都の様に總

体が質素な所での左程適當とも思はねども東京や大坂の忙劇しい土地では實に爾だと思ふ事が幾等もあるサテ又三代目に伶俐い人が出ると其家は大きに永續する事日本唐土の軍書や又老人達の話説で町方の永續方も聞て居る三代めの大切なものだ……然し昔時と今との時節もガラリと變つて居る自身が子供等は皆學問もある書もかく算盤も達者だ。自身よりの皆伶俐いから一向心配せずに財産も分配しやうと思ふのだ。昔時の兄たるもの親の名蹟を相續する故七分とる弟の三分で分家するなどいふ分配法もあつたさうだ。今でもあるが。然し自身の夫の不承知だ。同じ腹で同じ腹を痛めたものなら皆自身が子で彼が可愛いはが憎いの差別はない。兄だとして別段餘計分配ねばならぬといふ事はない年が上だといふなら兄の兄ほど親の厄介した年月が長い弟の生れた後の年月が寡ない夫だから五分くといふものだ。其處で今度分配するに。財産を十分に兄弟が三分づゝ取て呉れ。残つた一分の腹の異れど自身が子だお仙が腹のお象に遺つてくれ宜いかどうぢやナ……承知と見えて御辭義したな。ヨシく夫で自身も安心した喃老妻どの。是でマアく究つたといふものだ。其處でマアッ望んで

置たい事が有。そりや何故將來兄弟中の折合だ。左右ハヤ兄弟他人の初まりといふ合咬が出来てノウ。然し自身が子供ノ爾を馬鹿の一人もないと安心のして居るが一個の財産を三ツに分てといふから既に早其根ハ弱つて居るが三人が心を一ツにして居れば分配も分配ぬて同じ事だ唯和合といふ事を忘居ての成ませぬア此自身の舊弊親爺で唐人を好でないが昔時支那で田氏と……………ナニ田中とか田邊とか云んだらう兄弟三人で親の死んだ後も……………夫々嗜好お前等の様に兄弟三人が渾妻も有て一家に居た。洵に和合して兄ノ弟を憐れみ弟ノ兄を敬まふて居たが三男の渾妻が氣障者で一處に居るを窮屈だ。本夫をすゝめる三男も其氣になつて財産分配を言出した長男も二男も爭らそのぬ金でも屋敷でも器財でも悉皆三分配にしたか庭の中に二千年も経たといふ大きなく椋の樹があるこれも明日の伐倒して三分配に仕様とその晩ハ寝た翌朝見ると昨日迄常盤の色の蒼々したのが忽ち赤色に成て枯れて罷了た。長男が一目見るより泣出した。ア、心ない草木でも三分配にされるぞ聞て枯て罷了た情ない事だ我々兄弟三人も同親同母に生れて此樹の枝葉と根を運ねて分れざるに似るものだ根の幹となり

幹から枝が出枝から葉が出て繁昌する之を伐倒したら繁昌せまい兄弟三人今迄繁昌したも是から分離れたら枯れのせまいかと樹に抱付いて泣た。二男三男も大きに心が動かれて財産分配の事ハ見合せにしたら其樹も舊の如活返つたぞ……………こりや虚誕だらう道理ハ適ぬ話説だから……………マ然し兄弟中といふものハ其位だと比喩にした事であらうが今時の若い者に兄弟一家に居て拵了……………そりや贅語な話した然から財産を三分配にして兄弟にやるから勝手次第に拵了がよい自身の此後ぞんな事が起やうども産財の事などに少しも口ハ容れぬ其處ハ兄弟だから兄弟同士相談するが宜い又今の時節柄で親の雪隠でいつまでも糞を垂れよといはぬ各自の氣の向た方ハ東京でも大坂でも但しハ西洋へても勝手次第に飛出すがよい。長男ても其通りだ古風に親の商買をしろといひぬ。氣に向さア何商買ても仕替るが宜いアノ。自身の今日から隠居だ十分一の分配貰つて夫婦とお仙でお衆が成長を見てやる計りだ。ノウく夫て一同承知がいたかノ……………ヨシく番頭どのやく。ア、大義ながら店のもの總がりて自身が財産をスツカリ調べあげ。今聞く通りに分配てやつて下され。ナニ屋敷地と

……夫の地券面で……公債か……夫の現在價格でよからう。サ、是て究まつた。明日の還暦の祝ひで又香ばなるまいが。今日の財産分配の大切な日だ一同祝ふて杯を致しませうン〜お仙。お前差圖して何か下物を……マア〜

銚子を早く出させやれよサ

三二 筋

三分一の分配を受け巨額の資本と屋敷地面を我有とし同じ中京に店を開きし幸右衛門の二男庄二郎の家號も同じ金田屋を呼び西陣もの、賣買に本家に劣らず繁昌しければ金庄〜と音に響き出入る人も多かりしが庄二郎の其臆略人に勝れければ店頭にて瑣細の利益を迂遠しとし争でか一攫千金の利益もなからずやと千思萬考枕を碎きても太平の世の穩やかさの彈丸雨射の地に臨み性命を賭する如き難中至樂のまうけ口なく到底どころの例の一事と心をさだめて一戰場へ向いんとし彈藥兵糧を充分に準備なし軍勢をも召連れず唯一騎にて練出せしが戰場への不馴なり兼て派出の折からに本陣と相定まる先斗町の呼月樓に登り數名の妓隊に前後を圍ませ喇叭に替る笛鼓み吶喊に替

るに絃歌を以てし鏡氣を養成なし居る事茲に數月の日を送れど懐中の糧食乏しからねバ乃公〜と尊敬され無氣の中にも誰ぞ来よかし戰場の斥候に派出させんと心まぢなる其處へ階子をトン〜上り来るの仲買兼幫間を職務とする一騎當千の英傑戸籍のいづれにゐるか知らねど東京大坂の熱鬧場を喰ひつめ三府の一なる京都をして喰ひつめずんバ在べからずと一昨年比より入來り少しの資本を投じて株式か米商の仲買となり濟し貧爪を研ぎ慾嘴を揃るげる明治新製の一動物の名の甲田利作といふ(甲)ヤ是の……と言ながら座中の美人をグット見廻しながら故意と見ぬ振にてトンと膝を突ながら徐かに羽織の衿をズイとしごきて(甲)自今……實にどうも申し譯なき御無沙汰……ナント酷暑ぢや御座りやせんか實に流汗瀑布の如きの恐らく此時節をさしたのでゲーセウどうですか暑氣のお障りもなくなります〜熾盛に御愉快どの實に……ヲホンどうも欽羨の至りに堪ずでゲスナ。ハイ〜。エ承給ひりやした然も矢野からヘイ的が傳言を致しやした。いよ〜御別家。御新造様と番頭手代小僧下女合計十餘名の御移轉。ハイ左様どうも豪氣です。ある處にのどうして左様あるんでせう金が……

……土藏二戸前附の角屋敷に抱地面が三ヶ所。實にふうら山吹の……ハイ、公
 價……株券……結構で御座りますな安養浄土へ往生するごの實にどうも乃公
 方の御身上を申したのでせう……何だつてどうも御新造様の鐵の草鞋で三年三月
 上京中京を捜し歩行て漸々捜しわてたといふ大勳位御前上等といふ別嬪を内に詠め
 外へ出りや斯の如く一相手に珍膳佳肴坐を埋め二相手に嬋麗珠をわさむき艶妍雪に比
 しく明眸皓齒閉月羞花狎が落尸を喰らつて隠れをして逃出すといふ……ウ、ウ。
 ナニ、何だぞ。此中店が何を奏上致すか……種でないぞ……ハ、ハ、ハ、然ら
 バ猫か……ウハ、ハ、ハ、どうでもよい何にしろ此妓團に擁せられても熱中の熱なく雪
 の肌を見て暑氣を忘るといふ……實にどうも欽羨々々へ、ハイ、オット合點香
 込ましたそりや五分でも透すもんぢや御座りやせん……何でも大口口と取引をし
 なくちや。チイモシウンとした大金のなんとしてと懐中へ這入るもんぢや御座りや
 せん。ハイ、何ぞそりや十萬圓の財産で二十萬圓の投奇を張る。こいつ能く御座りや
 せん。乃公なんぞア、五……ナニ、二三萬圓の取引で……チャ大丈夫です

拙に仰せられちや夫こそ寸志の……ハイ、委細承知マ左右チヨット鼻を當つて
 こりやどうもお酌で恐れ……ヒエー冷たい、ハ、ア井戸の中へ投身させて三日
 三夜土左衛門にしたといふヒ一的。イヤモウ結構。暑中の何だつてヒールでなくちや適
 ひません子時、御舎兄の幸太郎様のハイ、ナール御本家御相續で……御樂し
 みハ俳諧と茶の湯。ム、ナールどうもモシ乃公の前ですが時節柄爾舊弊ぢやどうも……
 ……ハ、御舎弟の三郎様の……ハ、ハ、ハンフー東京へ……御新造も俱に……
 ……移動。ハア、こりや危険、どうももし乃公の前ですが乃公の様に活潑でなくと
 うも三府の中の京都人なりや毫の他地方へも響ける様な活潑な運動がなくちやねへ……
 ……ハイ、大きにいづれチヨット當つて來ませうハイ、ナニサ造作の御座りやせ
 ん。日々の相場書が……われにや虚誕の出來やせんから仲買なんぞア實にどうも
 利益が出來やせんデハイ、長まりやした。ジャ一走り……チヨット眞平イヤ貴
 嬢諸君乃公の慰勞をよろしくハイ、
 パタ、二階を下りつゝ見送る仲居に捨せり直す駒下駄足先にツ、かけ乍ら、

クサと出かくる門の戸明る機会に入来る男と額上額アイタ〜アツ、〜、「誰だ〜」

四 筋

誰だ〜誰だ〜(甲)誰だ〜目から火が出た(矢)ろりや此炎熱に照りつけられての
發火するのも道理だらう(甲)ヤ誰かと思へば矢野君か(矢)ム、甲田君。金庄の居るか
(甲)居る〜今まで逢て居たがコウ君一寸照會して置く事があるコチへ〜(矢)エ、
サ袖がもげらア。行サ〜。サア来たが何の用だの(甲)時に極々秘密の事件だがかい抓
めば斯うだカノ金庄がいよ〜分家して我財産となつたに就ての一件へ手を出す積り
(矢)ヤそいつの占た(甲)其處で奴さんいまだお小兒さんで米株どもに一向無茶だ。無
茶だから下拙どもを迎へに來たのだが。コンナ花主の逃しちや大變だシ外の奴等の手
に落しても大變だぜ何でも二人で押へつけて(矢)チット合點呑込んだまづ最初に何
かなしに七八本を正金でつかます事だテ(甲)夫だ〜夫でなくて玉のあがらね〜夫
から二三千五六千も手形で掴ましたらどんな奴でも財産を湊へ込リ(矢)それまでやり

通すに餘程工合もんだぜ(甲)マアそろ〜や〜と姪み婦の腰を抱く様。一時よ
グットやつたら遣り損なふの知れてあるぜ(矢)そりや知れて居るが然し乍ら痲痺やみ
の小便で〜ン〜ダラリ目的が注意を惹起す基だ何でも緩中に急を與へ陽中から陰を
引く兵家の所謂虚々實々七擒八縱生み殺しみ苦しめね〜(甲)〜(甲)〜(甲)〜面
の皮ダそんなら萬事其調子で………どりや七條までいてこふか(矢)いろげ(甲)ハッ
(矢)アハ、(甲)アハ、漢の高祖七十二度の戰爭に一の勝利なく烏江の一戦に漢家
四百年の創業を起す徳川家康大戦二七度小戦五十餘度逃廻て十五代の盛業を興す取る
の則ち勝の裏なりと其敗績も肅何の如き經濟家ありて兵糧をドン〜輸送し士卒をズ
ン〜繰出し又三河の沃野千里國富々兵足りまけても〜尻カラドシドシ兵糧士卒
を送り出して之に糧々が故なり斯の如く應援鞏固ならざれば一敗たちまち地に塗れて
後勝の決して期すべからざるなりと講談師先生張扇にて高座を轟ろかせり金田屋庄治
郎の家富たりと雖ども我刻苦辛酸せし財産にあらず品物店頭に充滿せりと雖ども一時
の融通に同商の陳列べるものあり其兵糧未だ全からず焉んぞ長陣の策を講せん然れど

も庄治郎へ全体の馬鹿にあらす那もしたら本家よりの財産に富やうか斯うもしたら兄
 庄太郎の上にも出んかと苦慮焦思の果より西陣物の如き昇降昂低常に多分の變動なき
 物品を賣買しての連も一蹴千里の勝利を得がたしと心を定めて甲田利作矢野俊三の如
 きものを麾下となして米商會所及び株式取引所に向つて兵端を開きたるが烏合の集
 まり勢なれば其勝算覺束なき筈なるに大いに目的の達する處ありて賣れば下落り買ば
 上昇るといふトーン／＼拍子の間のよきに正金二千餘圓を着眼し手形に於てハ四五萬圓
 の貸付となりたるに不是みな甲田矢野が戦場の驅引其圖に當るによるものとて庄治郎
 の信認大方ならず兩人を股股耳目の臣となし戦場の總務ハ兩臣に命じ抛擲し白拍子に
 舞せ傀儡女に酌さすといふ昔時の驕將の如く呼月樓の本陣にハ藝妓舞子を多人數あつ
 めて晝夜の歡樂にハ剛敵の襲はん事を思はず色と酒とにうつ／＼なかりしかば偽忠臣の
 甲田矢野の時至れりとして乍まら反忠をなしシリ、／＼と詰來りて追々其本陣を攻崩し
 にかゝりたるにぞ售れば上騰り買べ下低るといふ反對の位置に向ひ來りて四五萬の貸
 附もいつしか敵に奪はれて二三萬の支拂ひとなり此二三萬を取返さん爲め大手筋と最

期の一戦も終りに大敗亡となりて財産残らず振ひ渡すも引足らず是に加ふるに是迄の
 歡樂に費やす處ハ一時に其支拂を督促し來り飲食の代價藝妓の揚代舞妓の水揚料約束
 の帶代など種々雑多の名目にて店先へ促りに來れば遊將の下に忠卒なく番頭手代ハ帳
 尻を曲げ品物を負て逃亡し丁稚ハ賣金先を集めて親許へ逃げゆく下婢と下男ハ密通し
 て漬物部屋から道行を初めるといふ内外一時に混乱して防禦の糧食盡果ければ脆く
 も落城も及びける嗚呼是れ誰が罪ぞ悔て返らぬものハ人の手に渡りし貨幣にて今更本
 家へ泣ついても行かれず父幸右衛門ハ財産の事に付て一言も可否をいはぬと斷言せし
 事ゆゑ是と相談する事もならず屋敷地面も人の物に流れ行き儘かに残りし衣類も一枚
 售り二枚ハ質置きて果ハ女房お玉がもの迄賣拂ひ夫婦ハ其日もくらし兼るいと淺間し
 き境界も立至りてハ世人に逢ふも面ぶせなく大佛前の裏屋に引移り杳かに其日を暮し
 居るハ僅か三五年の間にて飛鳥川の淵瀬よりもかはり易きハ人の世のたいすまるなり
 けり

大坂の名護町を西の方へ通ずる一の路次あり之より千日前の金比羅へ参るべし此路次の家主家屋の塀を塗るに丹売を以てしたる故俚俗の之を赤裏とも唱へたり路次の中間に五尺ばかりの稻荷の祠あり名護町裏の貧民どもが祀る處もや祠の屋根の半は朽ちて草や苔の蒸生れど人の掃除するてもなく扉やぶれて内の淺間に見え渡り赤き紙も幣きりがけたるの神体もやあらんずらん供物どてい更になく僅かに口の缺たる神酒徳利の其傍りに轉けてあり見るさへ最も淺間しきに其祠によりかゝり兩腕伍つゝ突然たるは何人ぞ彼れ金田屋庄次郎がなれる果にて有たりけり(庄)ア、腹が空つたア今日て二日喰ぬがナア……………ア……………盛んに遊興に耽る時分の酒に正氣を失なふて飯の一粒も咽喉へ通らず水雑炊でなければ喰ぬなど、飯一分に水九分も一椀二椀ですゝり止めたが今から見れば馬鹿であつたナ……………儲と己が身体を此後どうすりやいゝのだしらんテ親爺から分配で貰つた財産の一時の間は無茶苦茶にして罷了たが今から考がへりや我作ら随分手荒であつたな四五萬といふ財産に地面が三ヶ所手紙一本で千や二千の品物のズン／＼店へ持込だものだが今ちや手紙の書手を持ても天保一枚貸人も

ないど斯亦俄に落魄るとい自分乍ら餘程豪傑で有たわい。自分の物の勝手だが渾妻の所有品まで残らぬ質に入込で大佛前へ移轉とい有爲轉變の世の中飛鳥の川の淵瀬より猫の目よりも早い盛衰。其大佛前にも居られなくなり遺書して渾妻に預け此大坂まで夜脱したも渾妻のお玉とて未だ若い身の上の子の出来ぬのが彼が幸福。イヤ然し腹も太くなつた様だが身持になつたのかしらん何にしろ意氣地なしの自分に連添ひ居るより早く誰かへ再縁たら身の立行きもあらうかと自分と自分の身を引たが跡ぢや定めて吃驚して居やう然し婦人の水臭いものゆゑ自分に捨られたを幸はひと實家へ飯り濟して居るか知らん彼のお玉とて標致の十人并に勝れて居るゆゑ定めて貰ひ人も澤山つくだらうどんな奴が二度の本夫になりやがるか知らん標致望みて貰つたお玉どうも未練が残るワイ。未練といへば自分が業にてア程にも落魄たを少しも厭ふ心もなく大佛前迄一處に移轉たを見ればお玉も自分よの餘ほど貞女を立て居たのかしらん程貞女を立てるものなら捨てて來ねばよかつた……………ア、氣が迷ふワイ／＼。是から自分いどうすりやよい知ん少しの知己が有ても此爲体で尋ねても行かれ歩行たくつ

ても二日間乾腔故腹が減て動かれず。寧ろ積鼻揮を外して此樹で首でも縊らうか。夫で
 の餘り意氣地がなさ過るナ……ア、ア、立草臥れて眠くなつたがコンナ處へ寝た
 ら巡査が見附て愚嗽々々言ふだらう寝るも寝られず死ぬに死なれず宙宇にブラリと迷
 つて居る生た幽霊と自分の事だらう是といふも甲田矢野を信認した己が過失だ人を
 恨むに及ばぬハテどうしたらと見返る福に(庄)ハ、ア稻荷さんだな何か供物でも。ト
 サ斯人間も落魂て神さんの供物まで盗まうといふ氣になつての婆の用ひ盡て罷了た
 ナ。オウ此祠に似合ぬ額が掛つて居るワイ。ア、綺麗だ。形の少さいが椽の樺の如輪
 木質で桐板の繼目なし繪の墨繪だが何だしらん四足がある尻尾があるム、猫と鼠と見
 えるが首をかゝぬのこりや不思議だ。ハテナどういふ謎語だしらん胴から手足尻尾ま
 て具足して頭がない。可笑しいなア。さうく自分はどうせ此分て世界にお暇の早い
 身分だ頭と胴体ころ離しおせぬ今日か明日か死んで罷了にやあらぬ身体で取も直さず
 アノ猫と鼠の様に五体かなはぬ死人となるのだ。切ても此世の餘波此世の思ひ出に
 アノ猫と鼠を満足お身体にしてやつてはどうだろう。トハ言へ墨筆のなすとハテ。オツ

トくゝわるく鉛筆の残りが積鼻揮お狭まつてあつたこれで頭をつけてやろ。自分も
 最期に臨んで商人を離れ畫工となれば本望だ。ヘン美術の奧秘を蓄つてやらふかしら
 んど死ぬ氣になれば無頓着にて腰の邊より鉛筆の折をひねり出し空ッ腹を伸ばしながら
 彼の額面に立向ひてゴシく描き畢る(庄)ハ、ア出来たく狩野古法眼も三舍を避
 るといふ出来だ。拙工畫手の虎を描と猫になるといふから自分が猫を描たら人が虎か
 と怪しむも知れぬへゼアハ、と獨り笑ひの聲を疾より立聞しけん祠の後邊路次の
 隅々よりむらくと出来るの金比羅参り千箇寺参り祭文語りチヨンガレ節抖擻の行脚
 門附坊主物真似假聲遣ひ手品師師賣異類異形の人間が乍まち其場へより集まり異口同
 音にイザ「親方御案内を致しませう……」

六 筋

間口八尺に奥行二間の棟割長屋を二軒合せし此裏にての大廈にして膝を並べ肩を登
 やかし誘なひ來る庄治郎を上座に直して尊敬なし恭々しく持運ぶを見れば缺たる膳缺
 たる椀皿全たきもの更になければ飯の珠の如き精米なり下物の大道賣の物よわらず

庄治郎の見るよりも津液走り咽鳴るをイザと勧められ夢路をたどる心地にて前後の辨まへ更に出ず箆取上てさらりと二三膳喰済し漸やく心地の我に飯れど茲の何所か知り難く夢中に夢を見る如く茫然として前に集まる人々の顔を見てわれの中より千箇寺参りの僧形なるもの鹿爪らしく座を進め(千)首領心を痛め給ふな茲へ伴なひ参らせしに茲に集へる十餘人の外尙數十人の首領と仰ぎ中さん爲なり一回此地に足踏するもの再回娑婆へ歸りし經驗なければ心を放ちて茲に止まり我社會の首領となり給へ斯計ての會得も行ますまい先此社會の景況より説き聽せ申すべし愚僧が常業と表を飾る千箇寺参りの口癖説法じみし事も交らん諸君暫らく耳を貸せムフン此地の地獄でも極樂でもなし矢張人間の管轄する大坂南區日本橋筋四丁目五丁目の間にして八陣裏と稱し我々如き柔和忍辱善良の人物の住居する處で御座る表屋の二町にて二百五六十戸裏屋の二千餘戸ありて裏屋を以て無産無職我々の住居として凡ろ六千八九百人。其職業の一定せぬ故無職無産といふものにて辻講釋。門付。俄師。金比羅參千箇寺参。辻俳優。賣。手品師。紙屑拾ひ。釘拾ひ。物真似。假聲其日くの出來次第にて市中の戸に立手の

内を乞ひ是我々が常職なりイナク手の内を乞ひ表向の家業にして其本業とする處のイツモ。アカシ。河太郎。浮洲。サシ。バクダツニ。ガイ。ポツラト。仁盜。バツタリ。雪覗きの紙屑拾ひとなりて人家の物を掠るもの。アカシとの男女牒し合せて同じ働きするもの河太郎との川中の木竹拾ひと見せて他の物品を掠める者。浮洲との船中の物品を盗むもの。サシとの剃刀にて往來人の提物を剪取るもの。バクダツミとの煙管を抜くもの。ガイとの懷中物を浸ふもの。ポツラトの小童にして往來の袂を狙ふもの。仁盜の土藏破り。バツタリの追刺。雪覗きの夜中の窃盜紛れ當の荷車を引浸ふもの。大抵斯の如くなるが尙此外にあるもの首領漸次に覺え給へ大凡軒裏屋も多き中此八陣裏といふ處の六十餘の貸店ありて其結構の皆一様なり六尺を居間とし三尺を土間とす一人一人に付て一日に一錢五厘づゝ出すを租税とし一匹の子を擧る時八厘を増す一日此税を納めざれば早速借宅放逐を命ずる此裏店の嚴法にして我々善良なる社會に於て未だ一日も怠納したる例をきかず是れ別界の人間に遙かに勝る處で御座る唯樂しみとする處の



国峯一画

博奕にしてある時の勝負を争うひなき時の出て貰ふ洵に氣樂千萬の社會で御座る家に
 の竈を置くもなく餓る時の表店で焚立を買ひ腹充れば六尺四方親子三四人チャコマ
 ヲツて臥すナント氣樂で御座らぬか上がなければ下もなく怖い事も恐ろしい事もなし年
 齡が八十でも壯夫と呼ぶあり三尺足らぬ子娘でも祖母と呼ぶ者がある是の戸籍を
 瞞着した處からの出來事であり又此裏店を八陣裏と名號けたの首領も先刻御通行
 にて御存じでもありませう表の方から這入るやいな右に折れ左に屈り突當るかどすれ
 ば横に抜け。通り抜る様にて行止るの千日前で興行した迷圖か八重襟の如くにして一
 回此裏店へ入れ再び抜出る事かなはず然れども案内を知る時のかの探偵吏が来る
 時でも脱道の八方にありて電山石火の如くに身をすりぬける是ころ孔明の陣にも劣ら
 せどて八陣裏との名號たて御座るが六十餘戸の人々の恰だかも一致共同にて彼の亞米
 利加に行なへる、共和政治と旨を一ツになし敢て争うふものなけれど第一愉快とす
 る處の博奕の勝敗に付て或ひの五厘又の三厘の争擾に三日五日職業を休む事あれど是
 が爲めに理非曲直を分ちられる裁判官なし是れ我々の社會に於て常に憂ふる處なり

しが先比より議會を起しおはれ一人の首領を得て其裁判に隨がふ時の休業するのむだ
 事なしと一決したれど六十餘戸の社會の皆これ同一の人にして誰を首領誰を頭と撰み
 擧る事能はざれば彼の盜賊の首領を招く法に循ひ稻荷の祠と額を掲げて鼠の頭猫の首
 領となられん人を待たりしに幸なる哉天皇様此人体を我々社會より下し給りしに實に
 我々善良社會に慈五を與ふる處よして我々の今二錢五厘の酬金をなして大いに我首
 領の新任を祝賀せんと欲する處で御坐るなんといづれも慶すべく賀へき事での御座ら
 ぬか酒肴の準備が整のひわれ早く出たらどうで御座ると漢語に普通語下司の語迄も
 聞とり法問口から出任せ其來歴を演たてられ庄治郎の聞たびく、臆先ひやりと躍上り
 座たる膝さへ震振れぬ

七 筋

祭文語りの出馴れたドス聲(祭)御首領くサア酒盃を上げて下さい社會がよつての祝
 盃だといへば傍へに胡座を掻居る金比羅參が膝つき出し(金)御首領のブルくど蒔蒔
 の様に震へてだせ(祭)うりや其筈だ初めて此裏に來た人に震はぬものが有るのか。モ

御首領。斯いや何ですが此土地ア娑婆と懺獄の中間子で極樂國といふんてす何故と云て御覽なせへ商人の様に人にハイ膝を折らずに職人の様も骨も折らず人の軒へ立て哀ッポイ聲を出すか……夫も呉なけりや悪体をついてやる。透が有たら何でも構いん引浚へて送るといふ是程氣樂な國の有もんぢやゲーせんテ巡查や探偵が願付て來た時の乍まら社會が相圖をして知らせる。假令縛られた處が長い事の有やせん。マア氣を落付て社會の首領。になつて下せへといふ尾に付て居合す者辻講釋を初め異類異形の人物が異口同音に首領〜と叫き立られ庄治郎の魂魄中天へ飛び精神我に添せ這い又情けなき者共に魅入れたるものかな彼等が口へも出す如く表の種々に姿を替れ皆強盜盜盜拘摸騙詐法律範圍の人物にて人間外の人間なるに夫等の者が首領どの何たる因果の身の果かど左右の返辭も胸に支へ首をうな垂れ言辭なし(千)御首領のわら娑婆だから覽へて返辭もないさうだ。一体娑婆にある人の。モシ御首領お聞なせへヨ。人の物でも無代とつて來りや盗人だの泥盜だのと別な名目を付やすがわりやモシ大きな間違ひですせ。其譯をあら〜申しやせうと儼然と構ゆる有さまに列居る者の膝を

崩し或ハ匍匐の横になりヒヤ〜謹聽イヨ辨士など、聲々に晉しりて皆謹しみて聞居るさま是も此社會の禮式なるか去にても奇怪の言辭を吐が何事を辨せるならん僅かに首を擡げて聽んど欲する庄治郎(金)そりや御首領の天窓が持ちやがつたア千個寺さんしつかり頼むせ(千)ムフン日本ハ素より天子様の所有であつて決して盗む事も犯す事も出來ないものだに頼朝といふ和郎が出て來て大天窓をふりちらし鎌倉に居て日本を押領したこりや取も直さず我々社會の親分なるが之に引續て北條だの足利の日本を篡奪して天子様をないもの同様にしたの濟む譯か濟ぬ譯か此人達を盜賊と呼ぶる限りの我々善良なる社會に盜賊の名を附せらるゝハ不當かと思ふ文王武王ハ殷の世を盜めども後世之を聖人といふ我々善良なる社會が人の物を空手借て來て盜賊と言ふから文王武王と肩を并べて聖人の仲間入を致すに比しけれハ實ハ結構なる幸福といふべきもので御座る其外例を引時の智識なくして公然金錢を貪ぼる道徳なくして神佛の牖をかぢる是も月給どか報酬どか名目が在から濟んだもの、濟ぬ時に我々善良なる社會の者で御座る既に聖人君子智識者道徳者を我社會かと思へば是より尊とい事ハな

いと存ずる。モシ御首領そらぢや御座りやせんかと横から持込む蟹演説に庄治郎も呆れ返り成程泥坊にも三ツの理があるといふが倫理道徳を踏外すからの勝手な理屈も付らるゝものかなど心中鬼胎を抱き尙も言葉を出さざれば入變つて祭文語りが(祭)實に千箇寺大哥のいはるゝ通り盜賊といふ名目、我々の善良なる社會に不適當で娑婆ではたらく人間の中に十八の内五六人までみな盜賊の尊稱を奉まつらねばあらぬ人があります唯我々との大と小又の多いと少ないと又の潜れて盗むと公然で盗むの差別がある計りてあります。よし又人間の人間の勝手次第に盜賊とも拘摸騙詐ともいひたきまで愚人どもにいはせて置いて我々善良なる社會の人物の決して人間の愚人共が行なふ處でない智恵あるものゝ所業である則ち智者の業であるといふ事を委しく申したら御首領も人間の愚人をはかれて我々善良なる智者の仲間入をしたいと望まるゝて御座りませう(千)ヨ、くえらいゝゝ道頓堀で時々演説の盗み聽をするから。うまいもんだせ(金)其跡から已れも出かけらア。何でも御首領が眞から底から再等らの御首領になつて貰ひにや頼もしくねへ「爾だく」と一同が競ひ立る有様の此身にいかなる

怨のありて斯まで大勢協同なし我をくるしめるものならんと案じ乍らも逃出門様なくツクチンとして祭文語りがいふ事いかにと聽居たり

八 筋

祭文語りの舌なめずりして右に錫杖 左りに柘木甲聲の過たる三絃のなけれど得たる處の胴滿盛にて(祭)サーテ我々が。ト何も上甲聲を擧ても御座らんが我々善良なる社會が行なふ處の智者の業だといふのの前に法律といふ大敵がある後に巡査や探偵の責具がある尙し失策たら兩腕が脊部へ廻り懲役徒刑の苦勞をせねばならぬ斯る大敵や責具を引受けヒクともせず東西南北に奔走し巡査探偵が血大眼をキヨロ付せアハレ倫兒出會かし賞典昇進の基になさんと巡視中を事どもせず北に南みに右に左りに人の耳目家の放慮を親がひ濟して愚人どもが貴重がる金や品物をチヨロ付かす事仁者善人慈悲者など瓦斯華尼を粧ほひ鍍金を飾る輩の争でか及ぶ處ならん彼等の實に智囊なき者なり彼等の争で企だて及ぶ處ならん智者も亦智者才子もまた才子にならねば此の敏捷くして大膽なる業を争でかなし得ん聖人死せざれば大盜愼ますとの古人の格言よて

又た王覇の業の大盗の志を得たるものなりといひ西洋人も今の世に即ち最悪動物の世界なりといふ非常の才と智を備へて我々社會の業をなし得ぬもの、實に愚鈍の極度にして智者にあらねば出來ざる證據なり我々善良なる社會才智ある社會にても其才智に貧富ある爲め或ひ人を殺し婦人を犯し放火をなし兇器を持ち土藏を破り追刺をなすものなどあり是の洵に才智の薄きものにて法律と普通の禮節を知らざるに因る我々が社會にては自分一己の才智を資本とし腕力などの少しも頼まずはじめの脱兎の如く終りの處女の如くし機を見て敏捷み透を得て天狗の如くなるを尊しとす殺人罪強姦放火持兇器強盜の如き重罪に問はるゝもの、才智の及ばざるものが行なふ處にて積愚人に近き處のものたり斯く論じ來れば我々社會も頗るむづかしき營業に従事するものにて彼愚人輩の内に古人の和歌を盗み古人の俳句を竊み又馬琴三馬が涎を竊みて作者顔をしながら半分の翻譯にて原書の本旨を失ひながら學士大家を氣取る奴輩或ひの能もなく藝もなくして高給の俸祿を貪る輩と同日の論にあらざるなり故に我々善良なる社會の營業の智者の業と誇りたるなれ御首領へ必らず愚人の業を慕はずし

て我々が才智ある社會に首領となり百年を燃しみ給へど法螺祭文を吹立る其大法螺にの膽を消して扱もく世の中の理といふもの何ても彼でも附會すれば自由に附會せらるゝものなり彼等とて腹からの竊盜でもあるまじ一朝本業を踏外して今かゝる域に沈むさへあるに理を非に托て人の本善を邪道に導びかんとすること薄情けれど悵然として聽居れば祭文語りを終るを待かね口なめずらせし金比羅參りが(金)大哥くい、加減に喋喃たら己にもちつと喋喃らしてくんねへ己ころ大哥の様に演説の假聲を遣ふた事がねへから己が持前の。それ四國の讚州那賀郡象頭山金比羅大權現御前に月の尊体南無愛染明王御脇に大天狗小天狗と。それ此調子だが……………調子の悪くつても理屈よや二つねへのだ大哥の滅多無性に法律くといつて怖がつて居るが法律といふものが愚人どもにも大切のものなりや己が仲間でも是より大切のものねへ……………なんだといつて見なせへ(祭)なんだ(金)ソ一正直よいれちや困るが國に法律といふものがなく愚人輩が汝が勝手に汝が財産や汝が命を守るとして見ねへ何程才智ある我々でも其透間を見付る譯にやいかねへ假令千日前や京極通りをボカ

ン〜と歩行て看板と白眼くらして居るもあつて法律があつて巡査といふものがあれ
 ばこそ安心して歩行るのだあれが巡査が居ぬ法律も何でもない世と來たら十千萬兩を
 積む愚人でも犬の糞に蹴つまづいたり向ふから來る人に衝當つて血を出す様な臍
 のしねへキツト其身を守るべき防禦を備へて通行するよの違ひねへ爾する時にいか
 に才智を逞ましくしても向ふの用心厳しければ手出しする事なるめへぢやねへか夫
 をも構の老ビヨコと手出して尙し萬が一トツつかまつたら其時にやどんなものだらう
 大哥達考がへて見ねへ身の毛も慄然とする様だぜといひつゝ傍への缺土瓶をとりあげ
 茶碗入らずに口をつつけつゝゴック〜ドック〜

九 筋

(金)ア、滅法うめへ水だ………みちつと喋喃らして呉ねへヨ。さア捕つかまられた
 曉に罪人所分の法律がなかつたらマアどんなもんぢや籠卷にして川中へポカン……
 ……棒千切木の滅多打。拳固の霧に瘤だらけ。捕獲つたら一命がねへに究つて居るなん
 ど大哥方怖いぢやねへか。夫だから法律の有難へ………我々を守つて下さるのダ。己

がやらかす處の法律の範圍内離れねへが其箇條によつて所分さるゝ故安心して營業
 よ精を出さるゝのだ。己ア去る代言人の受付て書生の話を聞たら英吉利の治罪法は
 人民の權利を重んずる爲め被告人といふ罪のある方を保護してくれる事ハ至極丁寧だ
 いつた。夫だから英吉利ぢや罪人仲間て己が營業が一番幅をきかせて居るといふ事だ。
 日本でも追々法律が改良ると己が仲間います〜安心する様になるといつた。どうも
 實に有難いぢや御んせんかッ(祭)ナイ〜金州そりや道理だが夫ほど我々社會を守つ
 て下さるなら捕縛だの懲役だの棒太行きなぞいどうだありや厳しいせ(金)いやさ夫だ
 から尙々在がたいんだ。ろの嚴しいことがあればこそ智慧のねへ。善人めらこの營
 業の眞似することが出来ねへ。眞似する奴がねへから安賣競争も起らずさ。手も濡さ
 ずに專賣特許を貰つたといふもんだ。又時々チヨイ〜引張られて暗い所へ行のりこ
 りや税金といふものだ。營業をしながら税金を納めなくちや日本人の義務が缺らア
 智慧のねへ善人めらがいや税が高いのこれぢや喰れぬ商賈が出来ねへなんど、熱を噴
 がありや大間違ひぢや此方さ〜此様に保護つて下さる法律を。どうして無智の善人め

らに非道な事をなさうか。夫程大切にしてお下さるに愚痴を溢しやがるの賃ば抱かろ
 の附上りといふもんだ。左様ぢやないか大哥達……(大勢)ヒヤ／＼(金)ダカラお首領。
 怖い事アゲーセン。放心してやりなせへ。夫からお首領此土地へ來なすつちや第一に覺
 えて置なくちやならぬの郷黨の暗號です。こりや一時にや覺えられねへがちよい／＼
 とやり付ると自然と覺えやすが大變ありやすぜ。マアどつといつて聞せやせう。汝
 の窃盗ぢやないかと云ふをモサヒキてないかと言やす。仲間間の暗號を知つて居るかど
 聞をガミの知つたかど聞ひ。巡查をバツサリと言ひ。探偵をトツサンも言ひやす。士族
 がサブで。藝者や娼妓をセイロクと言やす。坊主がユルで。子供がガリさね。刀をドクと
 言やすが中々適當つて居やすぜ。夫から金錢をビン。衣服をビラ。飯がヤキで。酒がキ
 ス。犬がケンギウで。私窩子が十錢さね總体警察に居る人のヤクニンといつて。通亡事
 をフケルと言やす何所かへ潜伏事をカマルと言やす東京の方角ぢや捕縛る事をカマル
 と言やすから仲間同士でも間違ふ事がありやすぜ。夫から人の居ぬを見てのセランと
 言ひもし人が居たらセルと言ひなせへ宜しい事と承知したらハリイと言ひ。怖ろしい

と思つたらヤバイと言ひなせへ。人が死んだらフリと言ひ。人を殺すのバラスと言
 すが是ヤ昔時からの隠號で今ぢや何と改良せんならんと郷黨中で相談がありやす。
 二人同士で挿了をリヤンキと言ひ密通するをサンビンバラスと言ひやすぜ。まだ此外
 にも澤山ありやすが一時にや腹にも入やすめへ交際して居りや自然とわかりやすノサ。
 仲間うちで此隠語を間違ふとソノ例のトツサンだなど間違はれて苛酷めに逢やすぜ(祭)
 祭)そりや金州のいふ通りだ。モシ首領。一座此土地へ足を踏込んぢやフケル事なり
 やせんせ(千)假令フケルとした處が八陣裏の用心きびしくて茲から娼婆へ抜道があり
 やせんから(金)氣をゆる／＼と落ちつけて一旦お首領となつた土の差詰り營業の稽古
 してリヤンキの二三度もやつたらへ一人挿了がハリイ……(祭)娼婆の内ぢや是は
 どのカマリ處のありやせん一人挿了が出来る様になつたら八陣裏の案内も委しふ教へ
 て上ませう(千)マア夫までの落ついて(金)サア是からが酒だ／＼と十七八人のわら武
 者ども庄治郎の前後を取り巻きワヤ／＼ガヤ／＼舞すく首領と乾兒の誓約の盃ドン
 賞ふドン頂戴と迫り立られ餘義なくもソレ／＼盃の交換なしても心の此處あらず

して針の庭に座す心地も外に遁れん方もなく狩場の雉子の勢子に追れて進退ほどく
追るが如く人の顔のみ(庄)フーム

十 筋

吹けよ川かせあがれやすだれのチャンチャラ調子も古めけと昔もいまに變らぬ涼風
納と水の面シユースボン……たまやア……鍵屋ア……「オウイどり樺／＼氣をつけや
頓痴氣めへ「ソラ／＼みよしが危険へしつかりせい茸棒め「イヘサ／＼混合中だお互
がひに氣を附ッこサ「西瓜／＼ナイ切立の西瓜／＼襟垢のつかねへ西瓜ッ「素麵ひや
素麵「桃やイ梨子やイ一錢十の大林檎だもし旦那買てお呉んなせへエ、茸棒に船が出
たぞ其割みや賣れぬへぞ虎列拉もないのに氣の弱い奴等だイヤ旦那方だ桃イ梨子イ
……スボン……イヨ玉屋ア……(藤)ア、賑やかな事だな。夏向の水に限るが此又繁昌の
京の四條や大坂の築地と變つて人氣も場處も浮たもんだ。自己も去年迄の屋根の二三
艘も出して陽氣にくらして面白かつたが今年の船宿も借が溜つて行よくし。行たら舟
の一艘位出しても呉やうが不味顔を見るも嫌なり。納涼もならせと思ふ矢先へ呼出て

呉れたの生稻の河岸端。呼れた儘に乗込んで見れば相も變らず信切な取あつかひ。か
うして二人が對座で楽しい事の楽しいが跡が苦勞で……いつも／＼自己が爲に身の上り
しての阿卿の眞實嬉しい事の嬉しいがあのやかましい繼母だから……内証で度々出遭
ふ事が知れたら何程やかましい事をいふだらうと……ム、左様……左様だらうヨ……
ナニ聞してと……ム、ヨ話なくてサ。何迄の阿卿の前迄外飾を造る氣もなかつたが正
可も馬鹿げた身の所爲をなんぼなんでも話とするの……ナニ繼母ばかり悪いんぢやね
へヨ自己が頼馬の事をするからこんな目にも遭ふたが……ウン爾さ京都に居て見れば
金幸の分家といはれ親の隠居だが立派な兄も二人ある五百や七百の金杯に手支ふ事
ない筈だが仲間の者にすゝめられ横濱へいつて直仕込に舶來物を送つて呉たら牙保人
の口錢なして原價のズンと廉からう此商賣の誰も氣があるが薄資本でい出かけられぬ
へ少なくとも四五萬の資本がなけりや洋人と直取引の出来ないから……幸はひ分家し
た計りて是といふ目的が立ぬなら横濱へいつて洋館から直お買取つて京都へ上せて呉
る其代金の爲替又の電信で送るといふのでうりや面白からうと直お横濱へ出て手を出

した處が随分面白く行かける。京都の方から一二割の大丈夫廉いからドン／＼送つて呉るといふ。迎も一人での廻り切れず東京やら横濱から人を雇ひて商買に追遣ふとズン／＼忙しさが増て来る此調子なら仔細のないと女房お友を呼よせイヤサ……爾惡く取れていならぬサ……なんの阿卿戀女房のものか……マアひやかさずと聞ねへナ。夫から芝の宇田川町へ店を開て大陽氣にやつた處があれがトン／＼拍子といふのだから洵に眞拍子がよふて此分なら十萬二十萬の時に手の物と放慮なふ働らいて居た内去々年の然も此比納涼の舟で阿卿に逢ふて……サウサ最う出入て三年九二年になるが……變らぬ此兩國の賑やかさと阿卿の色香阿卿の信實……變り果た己が身のうへ……イヤ／＼變らぬ何でかゝるものか去々年見ても又今年見ても變らぬハッ、其艶やかな顔……ほんとう……これ口を塞いぢや呼吸がとまるワナ……マア山戯ないで……ナニ自分が巫山戯て居ると。ヨシ／＼眞面目に話すよ。モウ是なら大丈夫と店の事、女房や手代に預けてセッセと遊び出したが。ナニサ遊んだ金などの一向掛ない阿卿の繼母がやかましくして是迄せふり取つたと言つても七百や千の事サ……ウン……夫

ていさかぬと……ろれや少しの違があつたにしろ二千とも纏るまいサ其外新橋とか芳町とか。オウサ。芳原や根津へも往たヨ。往つた事、往つたがホンノ交際遊びでナニ幾何遣ふものかノ遊興も遣つたに儘かてあつたが其比横濱から引取つた金巾と羅紗と外に京都からの別注文で瑞西の上等時計が十ダスといふもの一時に水揚になつて藏から店から庭口まで荷物で詰込んだ其晩の火事……ア、東京もあれがあるので……九やけ同様……人手の掛なし……切て時計の荷でもと思つたが……其晩の折あしく烏森の賣茶亭で洋人と晚餐をやつて居る比……火事を聞て狼狽して出たが奥の間へすつかり火が廻つてアノ中への時計がと思つてもタツタ一ツの命どの替られ……見す／＼焼た残りをし……十や二十の荷物を出して……とて……ム、荷のちいさいが四千圓から……外の荷物を合せたら。ザット積つても二萬以上其外家藏諸道具からア、思ひ出してもザットする……といふ時すれ合ふ船の中にて牙た撥音歌澤の「たしか覺えの三ツ柏よんで遠はらどうせうと跡と先とに心が迷ふ」「ヨ／＼うまいツ」「イヤ身上潰し」「其盛でなくちや身代限の貼札の貰れねへツ

十一筋

(藤) 自己の夫ほど馬鹿ではない積りて……ナニサ京都の親爺が財産配をする時にも子供は皆親増りだ父親よりの惻怛だといつたが人間も左前になると立直しの出来ぬものヨ。丸焼同様に焼つけられては荷主の方へ申し譯なく種々に泣いて半金済で帳消やら年賦で済す約定で一時的防禦は附て見たが俄かに出来た借金が氣になつて……どうか一時に取返したいと。止むよいのよ其比横濱へ生糸と蠶卵紙の嗜好物が出たと聞き買たくつても金もなく悪い工夫で京都の取引先へ宜かげんに金の入る旨言送つて銀行やら電信やらで七八千も取よせて其蠶卵紙と生糸を買ふたが直に洋館へ賣込つてもりて海岸の三ツ井藏へ荷爲換を組で置たが……ふ、なにさ利足なんぞア知れたものサ。一月二月経つうちに段々景氣はついて來るこれぢや必らず一箱位は物いはせにも藏入だと喜んで居た矢先へ亞米利加から電信よ日本生糸は評判よろしから追々下落とピンと來たのでグワラ〜毎日々〜氣の減る様な下低かたでどう〜原價はきれて罷了……まう堪らぬから投賣だと思ひ切り五十三番へ拜見済みとなりヤレ嬉しやと本條

約も濟んだ後品物を引渡しにかゝると生糸の中から蕨屑やら鉄の棒やらが出るといふ不思議の騒ぎに五十三番の其まへへケ……元の荷主を尋ねても固々巧んだ不正の荷物破れかゝつた尻を聞つけ乍ま横濱を隨德寺。何所へいつたか行方しれせ。残つた蠶卵紙も怪しからうと調査て見れば夏蠶に春蠶よドンチャン混淆の不正品ゆゑ會所へ行けハ賣買の時にナせ届けぬと逆捻にやかましくいはれる何所へかゝらう島もなく七八千の金子ハ土溝へ捨たより不立派な損毛。是も馴ぬ商法へ手を出した過まらと。サ今更後悔したとて死んだ子の年齢仕方なし。トいつて外に商賣もする事なら老店の者へハ眼を出し店も罷了て夫婦とも裏店ぐらしの申柿世帯當分の喰つめ計りて……ッヒ……無沙汰ふも……サ遠ざかつたら両方の爲めと思はぬでもなければ……何分……阿卿の……イヤ申戯ハ決して言はぬ。これまで長い月日の間だ并々ならぬやかましい繼母の目を忍びいろ〜心ろづかひをして……其心遣ひも重なりての髪のものやら身の衣装剥ぎ身あがりしての逢引の目下の藝者に珍らしいと心に憂ぬ日とてもなくア、金さへあつたらあれ程に深い苦勞のさせぬものを……エ、ナニ偽はりをいふものか是

程世話をして呉る阿卿に虚誕をついたなら罰が當るか目が潰れるか……エ、……自己
 が言葉が信實なら身を引いて宅へ行き女房のお友ど一所になり俱縁を以て自己を助け
 たいと……ろりや本心か……夫について外方から……ム、ハ、ヤ、ハ、落籍のして
 が出て来たので繼母のろちらへやる心もちだど……ア、残念だア……コウ、阿卿
 サウ泣出されての尙々自己が……氣も……魂ひもこれ小民……エ、身につかぬワイ。
 是迄ならば落籍も出来たに。出来る時に勤めするのが面白くお客で花にいつたのを
 無理に此方へ取かへし。コ、見ろ己の此位の大盡株だといはぬ計り世間を飾つた其
 果がつまり、今この難義……エ、エ、エ、ナニ連て逃げて……ナニエ古河の水の絶
 えぬ京都の本家へいふてやつたら少しの融通も出来やうと……夫がなけれバナニエ身
 を……投て……エ、滅想な。ろんな事をさせられるのかそりや爾思ふも道理だが過
 刻もいふ通り九焼した失策の穴を埋やうと京都の得意や知己から本家を初め親類まで
 みな借出した其跡ゆる確乎した品物でも送つてやらさア一文たりとも送つて呉まいと
 ……然が又阿卿のいふ様に連れて逃るも易けれど……イ、ヤ女房には未練はないが世

上に往々ある道行ぶり。ツヒにの廻手に取まかれ以前に増た苦勞もせねばならぬ……
 夫を思へば氣の毒なり。ア、ない縁と……わきらめ……エ、爾ならよい妾が勝手にす
 ると……勝手にするとい……さう泣て計り居てくれば相談する事も出来ないが……
 何をいふにも金が先お立つ世の中。其金に見放された藤三郎のよくの罰あたり
 ……ム、チウサ夫程阿卿がしつかりして居て呉る氣なら死身になつても金の算段を
 ……マ二三日の中に必らず沙汰を。ム、いつもの舟宿まで……阿卿も夫まで繼母に飯
 令殿しく折檻されても。ム、堪へて呉るといふのか。ア、憐然さうに……チウ辛抱し
 て繼母の機嫌を……「とり楯エ」

十 二 筋

昔時八百八町今の一千三百餘街の簞下大店小店面裏屋朝たに大八車を數十輛の移
 轉あれば夕べに風呂敷一荷の引越あり榮枯盛衰の裏店社會に尤ども多く笑ふて暮らせ
 る後生樂あれば泣て日を送る甲斐性なしあり千差萬別様々に浮世のさまを一束によせ
 築めたる路次の内中比あたりの九尺二間夫婦かけ向ひの氣儘ぐらし表の方よりブラリ

と入来る亭主の顔を見るよりも女房の怒まぢ吉相かはり眼尻のキリ／＼と釣りあがり前髪バラリと横に流れて鼻いきわらく口よりの火焰を噴くべき如夜刃の形相一へんお歸りッ。コレ此處の宅のお前の宅か他人の宅か知つて居るかイ。よふも／＼小札一枚充がはずに三日も四日もイケしやア／＼と内を外にかけつり歩行て女房の餓死でも構はねへ積りかヨ。コレ保珍丹のお單珍のあんけらかんめ。一日働かなきや皆既の日他同様宅の内眞暗がりどの御氣がつかれやせんかッ。手前の口へ喰ひ込ヤ女房の腮を釣しても宜のカイ。御店からの迎ひが来る。ハイハイ御店へ出ました筈と言ヤ小僧どんが不思議がつてナニ此宅の吉どんは二三日さきにお店へ来て番頭の善兵衛さんをせぶつて金を三圓持て歸つたはづだが明日から必ら来るッて今日まで影も形も見せぬ善兵衛さんの額上に蕪菜を出して帳箱叩いて大憤怒。タとコレ其れ金のどうしたノ。どうしたヨ。内を出る時なんと言たい。御店からの五六圓借るが其外に寅公と政公へ取替たやつが二三圓あるから催促したら苦しがりでも一圓位の出来るだらう。爾したら三月溜つた店賃も半分いやられる隣家のお時老婆さんから時借をした夏衣も受

けて返すし米も拾銭づゝの停て圓助も買て置う手前の帷子と糸織の帯も身受をしてやらムソレ樂しみに待て居ろ今の小遣ひが一文なと米が一粒ない迎も少時の間だ辛防しる晝飯の代りにや隣家から貰つた麥麵があるからアんで腹を塞いで居ろと眞面目くさつて言から。又先途の手で欺しやせぬかと思つたが正可女房でも人間一人ぢや米櫃へ蜘蛛の子が網渡りを見たなら番毎の様に嘘のつくめへと安心して出してやつたら……エ、コレ人をつけに。出た限り雀のお宿を忘れて今が今まで二日も三日も何所にどうまごつて居たんだヨ。ツゝ体の大きな形で狐や狸にも化さりやしめへし。イヤ屁智ひくりのたり割れめドい何處に……オイお松さん聞てお呉れ何處のか人が漸々只今お歸りサ女房の口を二日も三日も喰さず自分一人が榮耀遊びタ呆れて／＼立た腹も横よなりさうだヨ。是だから親分に話して三行半を取て呉といふのに。妙なもんだヨ。男の男の最良をすると見えていつても／＼マア／＼サ其内心が直るだらうッサ。雀百まで踊りを忘れぬ三歳兒の魂百までぢや焼直さなきや直りやしねへ。亭主も冷じい靈芝が聞て呆れ歸らア……ナニ大きな聲を出すなどエ。イヤサ赤ッ耻をかゝせなきや二日

三日も空腹い腹が直るもんぢやねへワナ。なんと良人だ。納豆が聞て呆れる。亭主か
 良人なら人並らしく女房の腹を減さぬが宜いサ。一所に行かう……知れた事サ親分の
 處へヨ。なにさお留さんか虎さん止てね呉んなさんなよ。妾もモウ……今度とい
 ふ今度の愛想も盡果たよどうでも離縁にして貰はにやならねへノサ。ハイッ御信切の
 かたじけだが。妾もサ。好て持った人なら一生の不運だと締念て往生もするけれど。
 聞てお呉れ。妾が根津の蓬萊長屋よ勤めた比セッセと通つて来るが東京ッ子の様でも
 なくサ。二十五座の汝吹を寫真でとつた正札附の御面像に景物にや白癩風に揚梅瘡の
 跡がチャンボンになつて其上お痘瘡が手傳つて居るから赤飯で拵らつた人形へ味噌の
 雑炊を打まけたアイタ、其上口中の掃除が悪くて話しをする時糞壺を覗く様な匂
 ひがする腋臭と耳だれの始終御持参で様子が頓問でしみつたれで拵丁の嫌なりなまけ
 る事なら人一倍もなまけると来て居るから夫婦になんか成らうとい。シチリけつばい曲
 鶴龜まん歳樂に桑原だけれと長屋年季の明て見ても早速に行く當がないのでアイタ、
 、宜い行處の出来るまでホンの足がりに夫婦となつたがアイタ、此野郎過刻

十 三 筋

から黙止ッて居りや頭痛のする程打やがつたナ。どうでも斯でもまかねへぞ……命も
 いらぬへ勝手にしやがれサア殺せ……寧ろの事に殺されりや餓餓にして苦しませるよ
 り功德になるからアイタ……痛いぞ……。ウヌ榎木で殴やしたなエ、悔しい……此榎
 盆を受けて見やがれ此も膳も此鉢も土瓶も茶釜も入らねへア。ウヌ……ドタン。
 バタン。ガタピン。ミチリ。グワラ……。ツデンドウ。カラ……

「焼接屋夫婦喧嘩の門に立ち」榎木舞ひ榎盆踊り茶碗宙天に飛て翼を生せしかど疑がひ
 土瓶地上に墮ちて絛を失ひて悲しむ亭主が尖らす口笛に死神樂の宅中を舞あるき女房
 が振あぐる腕先に荒神松の水瓶の中へ身を投げるといふ大騒動に隣家のかみさん地尻
 の老婆さん糊賣老婆に鎖棒引ずりか茶ヒイなど、絆號を保てる女連中が絆がな起り
 ぬと詰かけて仲裁口のベチャクチャに四隣を動かす計りなれば壁一重なる隣り路次で
 の産婦が魂消けて血あがりする盲目が魂消て犬の尾を踏み思はぬ怪我もする次第にて
 一つ長屋の裏にては見ても居られせ一同より来て亭主を宥め女房を騙し彼方に喋べ

り此方に説きマア〜私がいふ事を夫より私が申すとアレサマア〜コレサ聞ねへ
 何やら彼やら一向滅茶苦茶本人同士に非があるやら仲裁同士の理があるやら果は譯ら
 ず入我々入で喧嘩のいつか外へ移ると又一華を咲せ来り衆口寫々多舌喋々なか〜鎮
 静す可き様なく漸々大屋さんと差配人が派出となりて即席裁判廳を開き原被参考人保
 證人を押さろめて審理の末一場の長談義に原被平和の局を結びサア是からが中直りだ
 と大屋仲裁人長屋一同持寄り醜合の一大宴會門に球燈は釣さねども酔ふて鼻から提灯
 をいだし國旗の交叉に掲げざれども湯巻をひきあげカッポン踊りに井鉢ばちやういた
 く血鳴り膳着へてまたもや天地を轟かし來る歌舞の騒ぎも初めより少しも其場へ顔
 を出さぬ二三軒輿の夫婦ぐらし(友)モシ旦那様。お聞遊ばしたかアノ騒ぎを……マア
 どうも洵に〜怖ろしいおかみさんもあればあるもの……良人に向ひて悪口雑言今に
 はじめぬ事ながら……モシ旦那様藤三郎様御寢て、御座りまするかモシ〜オウ能
 ぶ御寢て、昔時のもあれ此長屋に移りて見れば長屋並の交際もせねばなるまいが。
 どうしたものであらう知らんテお隣家でも輿の方でも仲裁の爲に御出かけと見ゆるが

……アレサす〜聲高になつて……オウあれでは毆合でも初まつた様子血鉢の毀れる
 音がする……アレでは騒ぎも思ひやられるがヤレ〜人は驅て行く。モシ旦那様〜
 チョット〜……アレサ目をわけて知らぬ顔では済ますまいが……大きに左様で御座
 りますハイ〜貴郎がお出遊ばしたとて到底仲裁口をお利きなさる譯にも……ア、ど
 うか静まつた様子で御座ります。御安心なされませ……跡は和睦の酒だとして又賑やか
 に成ました……夫婦喧嘩といふ事は長屋杯には往々ありうちと聞きますれど是はお互
 ひに謙しみのなき處から我儘の言張り合で……夫はマア〜宜として貴郎に少し折入
 つてお話し申す事がありますお聞なされて下さりますか……イエ〜飯令落魄て角屋
 敷から此様な裏屋住居となりますとも如何して〜貴郎の事を怨み申してよいもの
 か決して〜お恨みとは存じませぬ其事ならば御心に必らず障ては下さりますな……
 アノお向ひで起つた夫婦の爭論から思ひついた事でもありません二ヶ月ほど以前か
 ら心に染々思ひつき一度は御相談申してと存じついでには居ますれど氣まづいものだと
 思し召さん歎良人を馬鹿にしたものだとお腹立ても在てはならず一日〜ひかへて居

ましたが……此一日も冗贅に過ては年老つた上では一月にも一年にも向ふとやら……
 チホ、マア高慢くさい事を申しまして腹裡には訝しなものと笑ふてお出遊バすか
 知らぬと……斯申し出しましたも妾に取ては一生懸命……イエ、愛想が盡たの飽き
 たの申す事なら今までの年月に何と申し出します等……東京へお呼びになる時に親
 共や親族どもが申しました。西も東も分らぬ土地へ行く事ゆゑよく心に勘辨し
 ると……其時妾が種々と考がへまして何故勘辨しろといふのであらう……生涯を送ら
 うと思ふ良人から迎ひによせば女房の役目。行ねばならぬが當然と思ひました。夫
 故親共にも親類どもにも。別に勘辨も入りませぬ。良人の方へ参ります。良人と樂し
 みを致します。其代りには身代が悪くあつたら又苦しみも一所も仕ます。樂しきも苦
 しきも良人に任せられた身体ゆゑ。今更餘義の御座りませぬ……と申したら親や親類は。
 夫なら此後何様な難澁になる時が来ても無心合力の聞受ぬと……其時には何のまア今
 の身代で難澁などは思ひもよらぬ事と先杖ついたものだなと何の心も付まさんでし
 たが……合の……この身のありさまは……

十四 筋

(友)神様でも佛様でも御存じの有ますまいと……思ふ程な火事の災難。一命だけでも
 助かつたがマア幸福といはねばならぬ那んな災禍といふが有ませうか。あれはどうし
 て貴郎の所爲で御座りませぬ天災とやら申す事ゆゑ遣れぬ事と申しながら俄かの
 事で途方に暮れ……あれも御道理で御座ります。商法とやあの駈引の他處へ出ぬ時
 しれかねませう。女の知つた事でもなし。回復しをしようとして……マ夫の悪いにも致
 せ。サア京都の人達から偽はり言ふて借込みなされた金子の事、悪いよしとどうかど
 思ふ思召から人に難義をかけぬ様家内に安心さす様と生糸に蠶種紙を御買なされた
 ものと思へ。皆な夫婦の爲でもあり。偽造品を送つたの向ふの罪で此方での罪との
 さらく成ますまい損をするも徳するも商法の事なら過去の事に少しも未練の残
 りませぬ……残りませぬが此体で朝夕居喰といふ体裁で。何處から一錢利益を得や
 うと……無商買なら一日く滅つて行く小遣ひに追ひ廻された身の衣裳。裸體になつ
 ても一生涯貴郎に此身を任せて置たら妾の身軀の安樂でも……貴郎の意中の御苦勞を

察しやられて……ハア……サア御相談といふて外ても御座りませぬ。アノ……
 ノ……オウそれうれ彼をお聞なされませアノ争論のあつた和睦とやらで奥の糊賣老婆
 やのれ娘が此比義太夫を習ひ初めて居ると慥か其子で在ませう。目見えぬが能ふ諷
 ひます。ソレアレの誰も知つてる三勝の酒屋……アノ義太夫を小楯にして申すので
 御座りませぬが。お園の心が想像られて……エ、……泣くまいと思ひまするが。ど
 うも……大事な相談に不吉の涙。モウ泣く……エ、……ハイ、今更かへらぬこ
 とではあります。二度の災難でこの御難義。イ、三勝殿の様に子迄なしたる人の
 あると存じもよらぬ事て在ますが……御交際もある事ゆゑ御嗜好の出来るの知れた
 事。此節のまた昔時と變り會席や待合の商法萬事の集會所でも聞て居ます。左すれ
 ば是非とも一人や二人お情けかけておやりなさる人も無くての御交際もなりません
 。假令其人があつたとして……いつそ死して仕まふたら斯した難義の出来まいものどあの
 お園の様に愚痴の溢しは致しませぬ。中々死の致しませぬ。命のあらん限り。良人
 女房といふ事を貫徹したい妻の望み。全盛の時に何程のお遊興があつたとして夫を彼

是申しませぬが今の身にては遊興の代に何處から湧て出まするか……義理とやら情と
 やらの柵かけた思ひ川舟渡りを致すにいつれ渡船の金錢が……義理で立ひき情で拂
 ひ果つたつた其時に。水に浮名を……イエ、嫉妬すると思し召ての妾の心と大違
 ひちつとも嫉妬の致しませぬが御相談と申すの茲の事。お園が口説いていふ様にお氣に
 入らぬと知り乍ら未練な妾が輪廻ゆる添臥の叶はずともお傍に居たいと辛防して是迄
 居たのがお身の仇とは三勝へこそ義理を立つれ半七へ對して女房の役が何處ひとつ立
 ませう。死ぬ心がつかなんだと自分の死んだら三勝が定めて女房になつて居やう左
 様致せば事が済むと。夫ては人の女房になつた甲斐がありません。妾の思案の爾て
 は有ません。天災受た難義なら世をも人も恨みん様なし。唯強勉して回復しが……
 夫も資本が……投奇師に失策たら再び投奇に手を出さず自道な商法して下さるな
 ら……妾が何と……假令少しも……夫も一ツの望みがあります。自道な商法する人
 の藝者の雁狎がついてツヒ勉強も掛けるゆゑ。是まで世間へ賣弘めた金田屋藤三郎の
 名前を捨て小商ひから取續く勉強がしてお賞ひ申したい。斯申したら嫉妬から雁狎の

藤坂を切らせんとて良人へ勸める相談と思し召かひ知らねども貴郎の身体に厄介のない様貴郎が商買なさる間の外へ御心の散らぬ様アノ妾も少しの間……お暇を……お貰ひ申しまして……コ、心の限り精限り働らき出して元の様に。金藤の暖簾が……掛けたる御座りまする……妾ハ東京なり京都なり。親や親類の世話にならずキツト働らき出しまして。相應な資本を得ぬ内は。御目にかゝらぬ様にします。トいふて後暗い勤め奉公めかけ權妻。貴郎を置いて此身体を汚す様な猥りな事は。神様かけて……イヤ〜今いふたどて當よもならぬ此後お逢ひ申す時。成程爾であつたかと御得心がいつたなら再回元の夫よ妻と呼かはす様して下さりませ……是程切ない思ひをしてお分離申す心を察し何卒アノ藝者どの一且縁をお切なされて元の金藤におなりの時落籍して二人の妻……。男女何權とやら。一人の良人一人の妻と左様な事ハ申しませぬ未樂しみに御勉強を……。夫も願はし暫時でもお暇を頂たく願ひの事を……聞受けて下さりませか……ハイ〜……澤山と申すでも御座ませぬが東京へ初めて下る時親や親類が此後の何様の事出来るとも決して合力致さぬとて呉ましたは此十圓札で五十枚……此内



藤坂

の三十枚は貴郎へさしあげ二十枚は妾が御貸ひ申しあげ……ハイ隠して今迄置ましたは洵に濟ぬ事でありすが途方に暮た其時でなければ出すなど親共から堅ふ殿しふ吩附ましたて川身放さず今迄も……ハイ……ハイ……爾ならアノ聞わけてアノ小民とも離縁と……妾と互ひに淨了競べを……眞實耐したお心におなりなされて下さりましたか。エ、忝じけない。有難ふ御座りますとはいへ……長年連添ひしを待心とはいへ暫時の別離が……ハイモウ泣はいたしませぬ……ハイ……ハイ……

十五筋

風又靡ける柳橋をにしを繋ぐ水瀬棹逢ぬ其夜は執拗て泣く追風の船の追ちから逢ば合する面楫に機嫌どり楫涙まくら義理の入船なさけの出船と日々に幅渡る船宿の軒を列ぬる其中にみよしのといふ看板かけ繁昌暇なき二階さしきに掲げわたした伊豫藤の蔭より洩る人影を誰ぞと思へば年のころは四十前後洗ひ髪油の油ら氣味なく水照の弁は小形にて十何圓といふ代呂物と覺しく極こまやかある堅綿の數寄屋縮に黒編子の丸帯をしだらなく結び淺黄縮緬の極薄色を折々きらめかすのはいづれ十何年以前までは此土

地にても何屋の誰さんと呼れ至盛を究めたるもの、果と覺しく喋喃る度に下唇のつき出て唾をも更に吞込まぬは多辨の相恰としられたるが其名は攝津國屋お高と呼どなん(高)若旦那モシ金藤の若旦那さまへ。妾のいふ事を一通りも二々通りも聴て貰はにやなりませんやへ。あれさ爾又隅ッこへよりちや困りませアね。なまも妾か取殺すとも言ひはしまひし。サア。此處へお出よ。小民もこつちへ來な。エ、此娘はどうしたんだよ。妾さへ物を言や。メソソ。シクシク泣いてよけりや此方で泣よ。子へ若旦那様へ。此娘の妾の腹を痛めぬ事疾から御存じて在ませう。藝者の親の繼母魂性。何處でも同じことだと冷嘲なさるか知らないが。よく聞分て貰はなけりやなりません。一体此娘を養女に貰たは三歳の歳の乳離れて二本の鼻涕を垂した時分。寢像が悪くて寢小便を垂て……ヨヨ小民。お前は幼少の時だから覺知まいが其時からの丹賊で育てあげたお姉さんイヤお繼母さんだヨ。夫から十一二になると三味線の稽古よは藝研堀の小千代さん踊よは藤間のお勝さん清元は村松町のお歳さんへ頼んで習はしたが聲が寒走つてどうも清元には向兼ねるが併し柳橋藝者が清元を碌でねへと下れては

習ふお前より習はず妾の耻になるから大吉さんや園八さんにも月々いくらといふ月謝をして毆き込んで貰ふと心配する常盤津は元柳橋の春太夫さん……夫でもどうも聲の調子が直らぬから堪う寒走るなら新内はどうだらうと隣家の龜八さんが親切に勧めるから鶴賀の操太夫さんお弟子は取ぬと言なさるを無理に願つて敬へて貰ふといふも柳橋での一人と呼ばせたい一心から……夫にお前の悪い癖は稽古やお温習が嫌ひで……マア宜よ。妾の口で妾が喋喃るに……夫程嫌ならなせ妾の言葉も聴ぬノタイ……ろりやお前の勝手といふものサ。好た處なら行く……好た處なら行かぬ……無理は彼我にあるエ……夫も是もお前の行末を案じるからサ。アイサ母と子だもの。他人ぢやないよ。我子の爲なら行末よかれと……エ、今こそ其様な口が利ける様になつても誰が庇陰だと思つて居るエ……エ、利た風な黙止してお出よ……ネエ若旦那此娘を半玉に出す時から全玉に仕上るまで其心配は並や大抵……夫といふは此娘に樂もさせたり又妾も樂を……縁でがな有ましてか貴郎に出からガラ〜と氣が變つて是迄随分妾を大切に呉たも一向構付ず唯貴郎と穴ッ道入の工夫計りお座敷は勤め迄……爾した

ならば料理屋舟宿衆の受が悪くなるといへば頭痛がするとか腹が痛じどか……ふて寝をして三日も四日も起を結構なお客が付ても妾や私窩子ぢや有ません切賣は仕ませんどか訝な口答をする様もあつたも。ハイ。貴郎といふいゝ入のわる計り……ハイ京都も同じ事でありませよ藝が一人前あるならお座敷も切て廻されるが先にもいふた稽古嫌ひ……祇園新地や先斗町の様に切賣でなけりやア。ハイうだつが上りや仕ませんヨ。いくら言ても聞ぬ小民でほつと妾も持餘したか幸はひ落籍しやうと……定めて御聽ても有たてせう。昔時風に賣打擲して御客を澤山取せ様たつて取らぬといつたら是非がない。いつ迄もむしやくしやと此子に懸つて氣を揉むより寧ろの事に早く埒明け三百圓で株券でも買ひ嫌な小言はいはぬ積り……金高が究つて見りや何處へやるも同じ事です。貴郎も金藤の旦那なら斯迫つて來た落籍の相談。男らしふ落籍せておやりなさいよ……ヨ……出来ませぬ。どうして今ちや出来様ッ。出来なきや小民は外へやりませア。後で彼是いつても聞ませんヨ……指でも差ては……エ。エ、ナニエ。小民ぞうしたと……ナニ藤三郎さんが落籍すとアノ落籍すと……うして金

懐籠の湖きに迂闊く長く逗留ならじハヤさす方へ到らんと停車場より瀛車に乗り早くも梅田に着ければ藤三郎が大坂の堂島に知己あれど渾妻と友を捨て来て異なる婦人を同伴せんハチト影護き廉あれば左右先へ一足行き様子によりて迎ひてんと梅田停車場前の馬茶屋に小民を休ませ一人先立ち去ければ跡には小民が西見ても東を見てもしらぬひの筑紫の人やみちのく人の行かふ中に頼めるは唯一人なる男の身。堂嶋とやらはいづこなるか道は遠きや心元なし早う歸つて来よかしと戸外の方に目をつけて人の顔のみ見て在けり。同じ神戸の上りと見え床机へだて、休憩兩人(矢)時に甲田君此比の失敗は……どうも爾う君の様に何でも彼でもうんだくと身体の腫物ぢやあるまいと濟し込れちや困るぢやねへか。悪銭身につか老人の財産をサ、ヲはうさに仕てやつた跡だから碌な結果は奏さないど……そりや知れた事だが斯の如き連敗斯の如き不振といへるは實に以て意外の奇……ナニエ……ナニチ……ム……アレカ……ハテ美だな。斯ッど……何だらう。人間にや違ひない。目と耳どがふたつ鼻と口が一ツづ、在から……しかし造物主が御念をいれて造りあげたと見えて一日二夜の汝風に揉れた

る風も見えずサ。ナニサ。そりやア一眼監視する時は東か西かは眼中の照魔鏡に反射されて来る。婦人の鑿定にや恐らく……ノース唯の鼠ぢやねへ。何でも昨日今日迄ハイアリーをきめて居たに相違ねへッ。見りやア従僕附従の人はなしと。ハテ何だらう氣になるな。まアづ見た處が數寄屋の單衣はよいが黒縞子の丸と來さうな處なんだ。ありや上州織の兩皮一圓五十錢夫も既に午後二時に垂んとするとどうだらう。譯らねへノ……天窓は汽船の中で崩れかゝつたガツクリ島田も見ツともねへといふ處から御自身にお手をあろされて日本固有の束髪といふグルグル巻の當座凌ぎに銀簪と思はれても周邊既に黄色を呈せる眞鍮のカルハニ鍍金。ちらく出るは瓶覗の湯巻で脱走とも見へぬ縮緬だから先よしとして下駄は本柱に南部表。天鵝絨の細緒から足袋なして白魚を弁たといふ寸法は憎い方だが一切身体上に權衡を失なつて居るからうれが不思議だ。其上容貌の美。細腰の妍。ヲット涎の用意なら先刻承知でハンカチーフを……何處だらうナア……新橋ならチト温質い風だ、日本橋芳町と數寄屋町ならこんな首のあらはる、善なし矢張是ハ柳橋だな。夫にしても唯一人ぢや氣になる話した

確かに今の浪車で神戸から来たものらしい。此處に待つて居るが何分氣が、り千萬だ
ア。大坂へ来たなら往く處へサッサと往つて罷了たがい、京都へ行なら浪車から下車
ずどのことだ……ア、一向にわからねへが……ハ、ア譯つた〜かけ……ち……ち……
……アイマ……この床机めか……甲田君ろれ〜ア、助けぶね〜……

十七筋

(甲) どうも不体裁究まるナ矢野君〜サ君が夢中になつて喋喃り出す時のいづれも前
後を忘却するからあんな不体裁を……うれもヨ下等劣品の前ぢやア何ともないがあれ
……あれが様に沈魚落尸……なに陳腐だど……それぢやア斯つど。狎がハクシヤンで
も不可だしど。沈着美顔細尻小脷……ア、どうも不可ん〜。然がサ形容詞のどもか
くもよ。御前上等防海費飲金黄綬褒章といふ物しろの前ぢや何分此厚顔鐵面皮も火が
出る様で……なんば見惚るといつて床机の一方忽まち天に朝し火入のね茶碗舞上ると
いふお茶番の甚はだし。如何にキヤンの飛上りが二枚揃つたといつて膝栗の二の
舞の。どうも實に慚汗脊を潤はす不体裁ゆる君が袖をひつばつて突然飛出したが……

サア早く歸ふ馬鹿〜しいちと美婦人を見せると腰が抜て〜サア〜チーイ堂島ま
や二挺だ早く〜。ナニ圖だ。氣樂を云て居るせ早く〜……チット来た早く乗う……
……オヤ〜矢野君。君の草提は違つて居るぢやねへか……フーム困るぜ……ナニ違つ
て居ると。中に……ウン〜。夫ぢや婦人の結髪道具だ。馬茶屋ぢや外に客はなか
つたせ客といふナア彼の美人計りダ……夫ぢや彼美人のどスリ替たのだア……サア
〜大變〜早くいつて取替て來ねへ。ナニ頼むと……夫や嫌だぜ……なんだと君が
いつて……僕が同伴の甲田氏が取替たといふと……ろんな亂暴があるものな。夫ぢ
やいつて呉れと……チヨツ仕様がねへ華族様だな。以來は婦人にかよつて岡のろけは
禁止だぜ。ドレ〜いつてやらふ。車夫ちよつと待て〜くんナニサ時間だけはやる
ワナ。サア來たゾ……來た事は來たが此白晝に……小供や年老ぢやなし。へイ取替ま
して大きに粗勿ツ。どうも言ないナアあの顔へ對ては。こんな事ならモチット悪い婦
人と取替れば……チヨツやれ〜……へイモシ貴婦人イヤサお姉上さん……かお内室
さんか存じやせぬが誠にどうも。途方もない粗忽失敬意外の事件を致しましてそれも

サ同伴の男といふは一体全体馬鹿げた頓間で……其上少々明言といふ眼力でどかく粗
匆があり勝て……ヘイフォーム。ナニくどうもお耻しい此方の事ナニ大事なものな
ら書類ばかり。夫もサ證書類や御座りやせんホンノ手扣へ計り……ッ、夫て……夫
でありやす。ヘイく。實に能く似た草提で……ナ、ナール左様なら僕の方から申し
ますから改ためて見て下さいまし。エ、と斯ッど……この位に丸めた手紙やら端書や
らが一丸めど。夫に西洋綴の手帳が二冊で一冊は大きく一冊は小さい方で……其外に
巻煙草入が一ツ名札入が一ツと……うれ……限です。ヘイく儲かにいや外に紛失た
ものは。ナニ金銭などは少しもゲイせん。そりや懐中致して……ヘイく儲かに受取
ました。ヘイ貴姐の方の……なるほど改ためる……御道理……其處で髪が一ツ。ヘイ
三ツ組の櫛。フォーム。ヘイ淺黄縮緬の髪かけが新聞紙の古きに包んであると……ヘイ
帯どめ代りの打紐が一本。跡は手拭がはりの反故が一丸め。羊羹皮の煙草入と短かッ
い煙管が一本。夫だけで御座りやすか。やれく安心く。お言ひ通りの品物はよく
御覽した通り儲かに揃つて有ます……へ、へ、へ。ギヤ夫て……何分粗忽な處は眞平御

容赦。どうも貴姐の方から御叮咛に仰しやッちや實にどうも穴へも這入たい心地にな
りやす。ヘイくイヤそれこそは願ふ處どうか以來……。ギヤ何です大坂へ来て。フ
ムーン。旦那は堂島へ用向にそれまで茲に待合の……ヘイ……爾ですか。貴姐は東京
から初めて此地へ……ヘイ僕も元は東京ですが三界無庵樹下石上と坊主めかす譯もな
いが到る處が僕等の住家て……矢張り堂嶋て……ハ……左様ならいづれ……同じ町な
らあ逢でせう。いづれお目にかゝる事もありやせう。ろんなら旦那へよろしく。眞平
御めん……ア、ひどい目にあつた矢野めが。つまらない事をしでかして大汗をかッし
やがつた。キヤッどうしても道行で来よつたに相違はねへア、人馴れた言葉つきでは
矢野が鑑定通りどうしても唯者ぢやねへ。ア、をかしたものに出遣つて氣が悪くなつ
た裏町へても出掛やうッ……ナイく矢野君サア取替て來たぜ。ナニ言葉の禮位ぢや
嫌ぢや新地の裏町で一晩の振舞はきつとあるぜ……さア行ふく車夫急いで下せへ……
……ガラくグワラくストングワラくキニー(甲)ナイく藤三郎君く金膝君
くこれはしたり一別以來まアく

十八筋

大坂の北之新地と名に響き娼樓妓閣朱門白壁をならべ棟を列ね絃歌の日夜演が如く往來恰かも織るに似て繁昌人の知るところなるが中にも家號さへ禍徳と呼ぶ實入よき青樓の二階に對向ひ(甲)君。々。どうも君も無理ぢやねへか。そりやモウ相縁奇縁といふものだが北新地でもマアツ二三と屈指の歌妓を自由にしながらサ……エ、サ實によろれに僅かに一見して戀着するとは。どうも奇だぜ。ダガ矢野君。君は實に氣がわるのか……ナニ東京の風が懐かしいと悪く洒落て居せ。ナニどうか頼む一生のお願ひだこれさへ適へてくれりやどんな用向も聞くと。面白く。チャ周旋料を差づめ三百圓サ。出來めへがナニ一投機來たら三百が四百でもかまはねへ呉ると……恐ろしい逆上やうだの。キヤツも幸福ものだう君に夫はと思はれてサ。然が此戀路の媒介は古今獨歩珍無類むつかしいを通り抜けて困險危難恰かも木曾街道を行が如く蜀の棧道を踏むに似たりサ。ナせといつて見な先が人の渾妻だらう。其良人といふ妓は京都のお平の長幸と悪口をいへばいふ様なものゝ人形喰の女なら誰でもイヤとはいはぬ顔色

。其上口數少なく温たうて底になさけのあるらしいといふから大抵の女は喰ひつく。其証據にや東京から彼が如き別嬪の上等物が……一文なしも承知づくお前どならは何處迄も息かちいばらの中までも此方や構ヤアせぬと。漁船の下等に搭載で……草提の中には櫛かもし。髪結道具の一式で姿かほるも何のその。未は夫婦が俱かせぎと東京の繁華をどりすて。しらア……ぬ他國で苦々勞……して胎兒をまうけてはアる……ばアると故郷へかへる旅の空とやらかしたい彼等の目的。處でこちらの戀する人は口數きいて放蕩で底にかさけのあるらしいといふ。全て雲泥萬里霄壤月露だから下駄と焼味噌程の相違で……ウ……ブ……ナゼ人の口を押へるんだナ。呼吸がつまらアよしねへく。ナニつまつても宜いと……ろりや宣のサ。跡で泣く山の神もあけりや。無心をなましく狎妓もないから。マア安心だが己が死んだら此戀草の培養法は誰があつて其任に當るか……サ夫だから暫らくは甲田の一命も保存して置ざアなるまいッ……ナニ先の良人と左程の違ひもあるまいこれでも婦人に一二度は惚られて見た事がある……ウ……ッ。御道理……。ろりや今の世界だ。萬國中も交通自在で阿非利加の中央

でも印度の隅ッこでも自由自在に交通るから利休ごのみの茶人が出来て其顔面の名所
 舊蹟たくさんある中只ひと處 隆凌 豊鼻といふ目的にて惚れた服れたとかいふべき婦
 人が。アッ……なにを人を扶るんだらう。よしねへ〜。爾なに口を塞いだり股を抓
 つたりして嫌がるものなら。己等も頼みばきかねへせ……なにエ……何といはれても
 苦しくない何分周旋を頼むと……爾う本心になつて貰や己等も骨折甲斐があるといふ
 もの……どの言ちがらッ……どうも斯見た處が朋友よしみに宜い處を見出して褒てや
 りたいが……何分鼻が……獅子ッ鼻の胡座をかいて地震が揺ても大丈夫。眼が猿眼で
 口が鰐口。耳がいもむしのコロ〜然として。肩には毛虫が二匹居る。身体は豚の如
 くドク〜肥太つて居る。手足の象の太ッチヨで動物博覽會の出品を一身に背負ふ
 て有功賞牌を授からうといふ……オヤ〜是でも君は腹も立ずどうでも彼を執心し
 たのか……アサテ是ワイサテ實に以て感服恐縮といふ至りだが堂々たる男子が夫は
 ど迄に思ひ込だといふはよく〜深い中であらうよし〜呑込んだいかに十二分の
 盡力して朋友の義務を盡すと致さう。ウム……よし〜夫々。やつらが来たらずアア

ア一杯息つぎをやらかざう。あまりつゞけ王に喋喃るから舌の根がひり〜すうらア……
 ……こう……的等酌をせぬかへ……チット有るな〜なんだ〜藤三郎といふお客が
 出だ。よし〜下の離亭へお通し申して置け。只今甲田がら目にか〜りやすと……こ
 れ酒はまアよしにして王露でも入れて出せ。ナニ。知れた事よ菓子もサ。ム、ム、直き
 に行くはサ

十九 筋

四疊半の離亭に藤摩鼓の簾を掛わたし床の間窓前等夏を旨とする飾具に簾越しきつら
 ねて揉草の座布團に紫檀の煙艸盆を扣へ近傍の樓上へ彈たつる三味線の音に聞惚れ、
 ぼんどせるは彼の金田屋藤三郎にて仲居が汲出す玉露の味に久し振の咽喉を潤はす處
 へ出来る甲田俊雄(甲)や是は〜金幸の若旦那。先日は途中で腕車での駈違ひッヒ失
 敬を致しました。なに〜依然若旦那に相違御座いませんから。イエサ以前は御恩よ
 もなつたもの。どうして〜お見捨申す杯……然しまア今日〜漸々送つて行く身分
 で御世話といふも出過た事ですが。マ及老ながら可成盡力は致しませうに底で先日は



お訪問下されまして。殊に御妻若も御同伴。處が何か客來て……又見苦い宅で……今日
 日は是迄御足勞を願ひましたも久し振て一杯を献上したし又お語をも承はりたいと存
 じて。ツヒ失敬乍ら……ナ……成程いかさま。左様ならば御酒の跡として先お話を……
 ……フ、ソ。ハ、ア……ナイルほどね。ヘイ……如何さま……左様ですか夫は……。ヤ
 夫は誠に……御艱難で……お友様の御愁傷しかし活潑に……方今の御婦人ですな。誰
 もサ良人と離れたくない。こりや人情です。夫を思ひ切て。よくまア暫時の間でも……
 ……小民さんは幸福だ。アモなくお友様が落籍なすつた様なもの。フム……。ろりや京
 都の御本宅へ御取次も致しませう。むかしの御恩を報ずるは此時。何でも幸太郎様を
 説つけて一箱位の資本を……ろりや胸にありませう。モシ又御舎兄幸太郎様が御承知な
 けりやア……僕も大坂こそ近比参りましたれ七條の濱ぢや随分顔も售つて置やす身を
 入て頼んだら五百や千は……なに造作もない事て……然し歴然とした御舎兄の入りし
 やるのに他の者が手を出すといふ場合にも……先々御舎兄なり御本家へ突當ると致し
 ゃ……ハ、ア、ナ……斯つとまで……計早みにオイソレとは……。エ。ハ。チヤ貴公はまだ

次の御舎兄の庄次郎様のお身の上は御存じないのですね。イヤ夫は……ハ、ア、どうも困
 つたね。マ、斯ですて……貴公と御一所に御分家になりましたがなにか太つ腹の庄二郎
 様ではあり是迄御舎兄幸太郎様や御親父様が濫い顔で……こりや放蕩はなりませんぞ
 どお叱りなされた天窓の押へ人がないといふのですから。庄二郎様は網を通れた魚同
 然にウツボく泳ぎ出しなすつたと想ひなさいまし。サア祇園から先斗町藝者や舞妓
 に期間が毎日御身邊を取りまいて居る。果はツカツカ御宅へも出かけるといふ乱暴狼
 籍のてんでこ騒ぎ御本家から度々ご諭言もあつたさうだが一向にお用ひなく。驕るも
 のは久しからずで僅かの内にわれ程の御身代が……さア爾なるとやけて。平日には用
 もないと寄附もせぬ僕を招きてチヨット七條でこれくをど。ねへ。ろれ例の一件へ
 かゝらうとなさるから僕は止ました。よろしくないと。厳しく意見を述べたけれど殿様御
 用ひなしといふので馬の耳に風……一日の立まへは出すから斯しろ彼しろ。賣て來い
 買ってこい。ろれ甲田やれ甲田と小使同様追廻されて。擧句がどうだといつて見りや。
 本家親類を借盡し祇園の舞妓のろれ貴公も御存じの君子を連れてばいと梵天國。京都

の地は跡足で砂をふっかけ道行といふ横着千萬自分喜び人泣せといふ寸法にてかいく
れ行方は知れぬ申す僕などは初めから遣はれ損の草臥まうけて周旋料や少々お取替
の金子も何號へ請求する所なく泣寝入のお陀佛といふ一件。僕などはどうでもですが
御本家と親類方ちや大變の立腹だらうです。夫も何故なら藝妓や舞妓が悪いからだど
恐ろしく恨んでお出でそりや僕も御本家にやお目にかよりましたのが容易ならぬ立腹で
……處へまた其次の御舎弟も東京横濱でスツて了つて女房からは金を貰つて離縁する
其金子で馴染の藝妓を落籍してヌク／＼京都へ歸つて來たり。本家へ泣つて資本金
の借出しど。どうも兩はうまくは……。チイ若旦那。イヤ藤三郎さまこりやどうもむ
つかしいてチ。それ／＼尊公も親類や知己を詐欺同様に。チット我ながら音高しアハ
ハ。トいふ次第柄で見る時はこりや一分別致さなけりやなりませぬ。フン／＼
……ハア……ハツハアナ、なるほど。夫程までも僕を見込んで御相談といふ事なら。
なにも骨折は厭ひませんから充分やつて見ませう唯氣になるものは今の一件で……。ど
うも……。ハアハア。イヤ別に思案をいつて有ませんが。御同伴の婦人が……。サ驚ろ

きなさるも道理だが今の小民さんと御離別にならなきや……。どうも今度の一件は……
其結果を得ませぬ。……これもサ僕が人情しらすになるかしらんが貴公の御爲を思
つての事モシお氣にかけられちや困ります。ハア分別は離縁ばなし。夫より外にや
在ませぬ……

二十筋

甲田の藤三郎が風体をつらく／＼見るに歎かんとして歎きも得ず言んど欲して言こと能
はざるもの、如く意中に無量の感想を惹起し傍への茶碗に手をかけながら敢て其茶を
飲むにもわらず煙管に煙艸を詰ながら吸口の方を火にさし燻べたる狂するが如くに太
息を吐き迷ふが如くに首を揮りて決着する處さらになきを熱々詠りて同じく太息し
甲)ア、僕ハ無情漢だ情けしらすといふものダナ……。モシ藤三郎さん出過た事を申し
まして定めてお腹も立ませたらう御心中を推察致せば實に以て……。イヤサ貴郎も能々
思ひつめた婦人なればころれ内室さんが血の涙で差上なすつた三百圓を惜氣もなく呉
れてやつて落籍をなすつた藝妓の事……。夫を離縁になされといふハ無理です。僕が無

理です……だから右の事は必ずしめ申します……エ、。ナント世話をしている呉ね
積りかど……サツ子。どうも困るサ。嘘をいつちや後日にさき尻尾が出て甲田俊雄が
と睨まれるの實につらし……トいつて御舎兄にも目おかしくや目下は如何なる体裁で
親族にも便らず他人を以て申し込むの如何なる子細とか何とかキメラれる其場に及べ
ば是ッ非ありのまゝに上申といふより仕方なく……左様な身持なら謝絶致すハイ左様
なら突つたもの……どうも此お使者の逆も僕で……さて子夫ほど迄に僕を……外に
や相談する人がない……夫ぢや僕のいふ所も一通り聞て貰ひなくちやなりませぬ
貴公の御一身。貴公の將來を追想すればこそ。無情の事も申します。僕だといつても
東京での角屋敷の二三ヶ所も踏潰たものです。藝妓の胸中ぐらゐらなくて成ませう
かサ……うりや外面から見えた時は京坂藝妓の卑屈である。金さへとれば誰様でもよろ
しい。性質は賤しいものだ。こりや東京人の品評ですが。表面から見えた時の東京藝
妓の活潑である。金よや心の迷はさぬ。好た人なら身上がりもする。達引もする。高尙
なものだ。洒落たものだ……うりや間違ひもなからう。しかし當今ではむづかしい

ね。為永が流行る時分の深川藝妓なら有たかどうだか知らぬが。まーづ鉦太鼓で敵き
探しても眞情藝妓の……併し御同伴の御婦人の事ぢやげへせんありや眞實のある御婦
人でげへせう……去ながらサチ。貴公も方今の時節は御洞察ある事ぢやうが明治以來
の藝社會といふものが顯はれて花柳社會の情態をがらり一變させたチかの藝社會は明
治維新の際の軍人が其後は情態などを少しも知らぬ書生あがりで時に乗込運に任せて
金のあるまゝ時散し花街の興味人情の到る處などは少しも知らず只管面がよく惚た
ふりさへすれば。うれて十分御得心がゆく。いはる、儘に札びらを切る。只慾情を喜
こぶ計りて人情など少しも喜ばぬから。藝妓社會も損徳はしつて居る。お隣に惚た
振をすれば骨折らずに所得があるといふので透ひには一同がお機をめがける。取るだ
け取ばハイ左様なら跡足で砂といふ退散となる。此習風が漸次に浸込んで東京藝妓
一班の風俗となつたなら何人でも客は腰かざりにとる。夫がたらぬて情人もこしら
娼妓も三舍を避け私窩子も百歩を退ぞくといふ体裁に墮ちいつて罷了たのでどうし、
眞實が有りませう。然から町人や百姓などの足下に見下して悟と取柄はせぬといふ

世の中……サ斯だから悪くいつての貴公の前では濟ませんが……親御が鑑定で貰つて呉れた嫁様ど。街の柳堤の花といふ人の手折に任せた身体の藝妓風情を叱べたら。どちらがよいと……こりや言はずとも……假令何程の眞情を貴公に盡したかしりませぬが。藝妓社會を本妻に備へては……今時本妻に備はる藝妓もないで有ませんが。しかし御覽なせへ高等の官員でも藝妓などを本妻にあはすものは例の新聞屋が筆先を携へてなんぞ起れと待かけて居やす。なんと怖ぢやありませんか。町人だといつてな別に異りは有やせん……もし藤三郎さん茲は一番分別どころ。斷然方向を決するが男子の策ぢや御座りませんか……底で貴公も三百圓といふ纏めた金で落籍した婦人を無代にお捨なされとも言ませぬ……僕が知己で……無妻の人がありやす僕が兼て煤灼しやうと受合つて置やしたが……彼の婦人を……サアねへ元金と……元金は何ともねへ百圓口錢をつけませう……四百圓といふ纏めた金がちよつと貴公の懐裡へ遣入る……御舎兄を僕が辨舌で二千はきつと引出して來やせう……彼の婦人一人で此未口でもいはれぬ程の御苦勞をなさりたいか……又二千四百といふ金子を掴みて末樹に指る元木

の友さまと睡まじふなさるか……とふたつ一つの境界ですが藤三郎さんこりや餘ッぽど分別なさらにや成すまいサ……ナニサ今直ぐでなくてもサチ……ちやいづれ兩三日中と致しませうヨ

二十一筋

浪華津にひいき渡りし三大橋の其第一にかぞへらるゝ天神橋の好景色眼を放つて東南を望めば本是れ日本無双の金城湯地石壁の巍々たる城樓の層々たる中に突出して天に朝するものは五層樓閣の痕跡ふして今、鎮臺の營地となり國家の干城之に居る是に薨を運ぬるの砲兵工廠の營房にて煉化高く積み煙筒高く聳だつ信貴生駒の山脈遙かに煙塵の間に没す目を下せば天滿の長橋河水一帶の彩虹と架して我が渡るべき長きを忘れ轉じて西北を見てあれば浪花の二橋は瀬田橋の大なるよ似て遠尾崎の岬は尖角の阜頭状をなす中の嶋の光景一睥ふ盡きて四區の窟煙天日を掠む絡繹たる車馬機の如くにて梭を投するの横断もなし難く蟬聯たる人行は蟻群蝟集肩と肩を接し踵と踵を踏む繁華の紙筆に及ぶべからず「アイタ……眞平ノ、サウカ御勘辨を願ひます」なに勘辨をし

ろども、勘辨もしてやらうがろの時辰機をかへせ「エ、左様なもの」これ人を盲目
と思つて居るか返却なきやだウヌ「アイタ……サウ腕を捻ぢあげられちや物いふとも
なりやせんチット弛めて下さいやし」フ、ン時辰機さへ返すことなら警察の手數も煩
らはさずその方も苦役を受ぬて済ではないか。さア弛めてやる。返せ〜「ちよつ苛
い力だ。いて〜」。馬鹿〜しい目に逢ふものだ。チイ手前は何だい。突然人の腕
を捻ぢあげやがつて時辰機を返せもすまじい。チヨツ莖棒づらな「こりやまて〜」。
其方は最初僕に突當りて其時時辰機を拘摸どつたは此黒い目で見てゐるぞ。今更拘抵
ども糞事だ。大方相ずりの手へ渡したものであらう。幸はひ巡查も見えざる故無事に
済さんと思へばつわけわがりて強情張るなら餘議もなし警察署まで引立るぞ「面しれい
引立なせ〜。なんだな見りや洋服で高帽子。官員さんかしらぬへが。お出立おや恐れ
やせん。素面キチャメンのお町人を拘摸だといはれちや其方が料見するとも此方が料
見するものか〜。さア警察へ行かふサ。お出なせ〜」はてさて強情なる悪人もあるも
のだ。今日は亡父の忌日ゆゑ墓參をなしたる返りがけ罪囚を呈出するは好ましからず

と思ふ故穩便なる一片の慈惠を授くるに強情はれば是非に及びなまア行け〜「さか
なくつてさ。先へ行なせ〜」逃走致すも相しれぬ。先へ行け「ヘンい、面の皮だ。オ
イ茲は派出所だぜ。茲等てよからう」いや〜僕の行く處の東區の警察署だぐ〜
いはすと早く行け「警察なら人立がせんで外聞がい、さア行やせうと川の傍りを西の
方へ葎屋橋より北濱へかゝりしが西洋料理と看板打たる天娛樓の前へ來ると「サア這
入れ「エ、一イ、サ這入れと申す事を「ヘン可訝な茲の警察じやね〜天娛樓と云西洋
料理だ「何でもよいから這入れと申すのだ「面白へな這入るへい。料理を喰つても己
等ア唐ッけつた「こま事をいはすと宜いサ。二階へ行け〜。ア、又一段風景が變つ
て面白い……コン〜ポ〜イ〜。コウツと六皿か七皿。何かとり合して二人前をそ
して麥酒と日本酒を……よし〜幸はひ相客は一人もなしと。適度よいオイ〜モサ
ヒキ(撈盜)先生君は下手だぜ。ア、レヒヤ親爺(探偵吏)にチキ様見附られラア「エ、一君
やどんと突當りさま己がヒラ(衣服)の隠しから時辰機を抜とるつもりであらうが爾は
うま〜は「エ、一「ヤサ未だ新世界でサ(剃刀にて往來人の提物を剪る業)を働らくと

は大膽だぜ、エ、二其上アカシ二八共謀」でもなくガイ(懐中物を盗ふ)をやるとは危険
 く君が拘摸うとした時辰機ハ此方のポケットに在る。君が目を付たポケットは
 これ此通りの鎖り計りじや。どうです。藤が……今の通行人の中々用心ぶかいから容
 易な術じやア……エ、ハ、中々暑い事であるチ……左様サ大坂は實に繁華だ。聞た
 よりハ。オイオイ。サア麥酒でも日本酒でも……隨意にわがつて……先スツアかよじ
 ぶ。コン、ポ、イ、オ、ちよつと用談があるから跡は徐かにして下せ……僕ハ此比東京
 から。ア、左様先便の山城丸で……オイモサ先生實は僕もア同じ學科を練習するも
 のサ。所で此方で一問題が起つたがどうも。また同僚が少ないので少々困つた所で毎
 日ふらふ市街をふら付て入撰をして居る最中ちよう度君が天神橋の上でどうんと來
 たから先一人の同僚を得たりと是さて同伴致した譯さ。どうでせ一肩入れては……
 く、やつて呉れるとそりや至極満足な至りサチ。萬事ア道頓堀の旅舎で話説をする
 と致しやせう。然し君計りでもいけぬへ今二三人もはしいがナニあると。ろりや重疊
 だ。そんなら此處ハ早く切揚げ南地ハ巢をかへると致しやせう……して君ハナニ都庄

と……ふんみやこといひやす。豪氣に意氣な紳士ですなア

二十二筋

堂嶋の裏の町おて字を衣笠長屋とかいひ裏屋住居の其日送りが軒端ならぶる其中に一
 軒の家は二階もあり少し他家より廣しとて書生又は出商なひするもの、寄宿處といふ
 招牌かけあり此家の二階に四五日前より逗留したる男女の二人年若ければ痴話が凝じ
 て口舌となるか知らねども男は深く思案に沈み女の顔を詠めては時々太き溜息つくは
 思ひに迫る事ありて自由にならぬ風情と見ゆめり女は始終目をすりあかめて笑ふ笑濁
 の見る事なく深く愁ひに沈めるさまを試ろみに之を評さん乎渾身雅態あり怨むらくハ
 絞羅錦織の粧飾なし遍體嬌香あり焉んぞ燕脂白粉の化粧を用ひん両灣の眉は遠山の青
 きを蓄くといへども愁雲蔽ひ來りて將さに雨ふらんとし一對の眼は秋水の潤ふより明
 らかなれども痴鳥飛び來りて且つ濁さんどす臉は蓮萼の如く分明にして卓氏の文君に
 面影かよへど開ちて開くに物うしどなし唇は櫻桃み似て自家の琴素が媚態に滅せざ
 れども言はんとして言はざるに似たり惘れむべし一片昆山の玉碎けて塵埃の中に落る

事をうもく。此男女の誰人か餘人にあらず藤三郎と小民が粹なる果なりけり(民)モウ
く仰しやつて下さりますな。聞へ聞ほど腕が痛ふなつて……以前も以前とて貴郎が
少しお出がないとキヤ。差込む癪となつて繼母に叱られました。其癪の種も漸々
わすれられしや是から二人ずみと思ふに甲斐ない貴郎のお言葉……又其癪氣を覺えま
した。おなじ苦しい癪氣でも以前の癪らぬ顔さへ見たら癪も治まり一倍も二倍も嬉
しい事であつたものが今度の癪は是限り……エ、恨めしい尊郎の心中聞けば聞ほど
腹が……ア、イヤ。愚痴もいふまい未練も出すまい。とはいへ藤さん妾のいふ事も
一通りの聞ておくんはないヨ……御新造さんが夫程まで苦しい思ひ切ない思ひで。
身を切り裂く程な金子の五百圓……其三百圓の尊郎の爲に百萬圓にも増た資本で有ま
せう其金子を惜し氣もなふ繼母にお渡しあると……ナゼ其時に斯いふ金だど一口聽
しては下さりませんか。何程繼母が苛酷目に逢せ外人へ落籍をさすといふても。逃亡
しても逃おはせる駄夫がならねば大川へ身を投ても死んで罷了ひ尊郎へ一片の情を立
ますに……御新造さんが身を切る金で安々妾が身をひかされ妾の身こそ樂てはわれ。

二百圓の金子を以て是から稼ぎ出さうとある御新造さんのお心がお痛はしいやらお氣
の毒やら思ひやられて……藤さんナゼ今迄も其事を隠して居ては下さりました。時
聞たら……ア、それもこれも跡の祭り……近いとこなら逢ひまうをしてお禮も言た
い身の明りを立るやうにも致したいが船路をいつても一日二夜もかゝるところで思ふ
に任せ。エ、まアどうすりや宜のか腹の中がむせかへる様で湧かへる様で……エ、
藤さんあんまりで御座りますぞへ。假令勤めはして居たどて義理や人情位は少しは
知つて居るものを。愚痴だとも馬鹿だとも笑ふ人の笑はして置き妾の世人に顔むけが
……エ、なんぞね……其時いふたら必ら止る。止たら手前がお袋に折檻されるが可
愛さうだど……其思し召は満車にも満船にも載きれぬほど嬉しふあります。有難い……
……忝じけないと禮をしても金の出處を聞て見れば返事がどうして出来ませう。あゝ
お氣の毒な御新造さん。今頃の定めて尊郎が稼いでお出たらうと案じく商賈に精
を出してお出であらう。さういふ始末を聞く時片時一日尊郎のお傍に樂々として居
られませぬ。こんな女でも望む人があつて金を出さうといふ人があつたら假令盲目で

も慰でも男の美醜いふて居ませぬ何處へなどやつて下さりませ。切ては夫が御新造さんへの申しわけ……妾は售れて行ますすへ……義理と義理とにからまれて大事の男と生別れするもみんな尊郎がお心から……三百圓の元金に百圓利附をするといふはよくの茶人もあるもの……其お茶人の慰さみになり四百圓だけ勤め上たら妾は死して罷ります……唯此上のお願ひは四百圓の金を手もつけずどうか御新造さんにお渡しなされて妾が心の苦さを仰じやつて下さりませ唯夫のみが心が……尊郎の様な移り氣ては妾に勝つた人があつたら又其人に入れあげなさらう。どうか是から浮氣をやめ眞面目に挿丁で下さいますしア。もう何事も申しませせん。覺悟した上はいふだけ未練。何處へなりとも参ります……取替せする其場所はアノ大川の納涼舟で……エ、恨めしいは納涼舟初めて逢ふたは隅田川今縁切るは此大川いかに流れの身とはいへ川で出逢ふて川で別れる……是も前生の約束と思へばどうせ此身の行末は水に任して水に死ぬ究つた因果で御座りませうヨ。ア、何だかガツクリ氣落がして……エ、足もとまでよろけまする

二十とみすぢ

秋來ぬも目にいとやかに見えねども風の音にて河なみも涼しき増せば昨日まで艦をならべ船を接し廣き河瀬も狭きまで漕ぎ列ねしも一艘へり二艘やすみて天神橋下の中洲に出づる時物賣も追々店をとり罷了ひ平常の河瀬となりぬれと尙も櫻の宮に虫を賞し造幣局に月光を望まんとする屋根舟の楫の音を絶つ事なく通ひ舟の行往ひ腕車代りに漕つ浮びつ南に北と通ひ行あり此日や殊に風涼しく漕出る船もいと寡なく上流に登るの洋江あたりにも網もて漁る遊びならん下流へ下るは北之新地の馴染の茶屋へ急ぐならん秋日の太陽紀念碑の尖頭をすべり落ちて將さに西山に影を没さんとし清秋の明月やうやく東山の峰に登りて且つ河心を照さんとする彼誰時の河の面多景四季の河岸より漕出す屋根は男二人の差向ひ浪華橋の下より漕來るの男女二人に船頭一人雙方に夫と見知りけん船頭の櫂をどいめて船と船とを寄合たり此時近傍に來合したるの屋根船五六艘と通ひ船の僅かに漕めぐる計りにて絃鼓の騒ぎもまだ發せず河中いといふ徐やかなり男二人の船にて舟子に命して酒暖ためさせ献つあさへつ歡ばしげも何やらひ

そく私語つゝあり男女の相乗の酒もなければ茶さへなく唯酌むもの四ツの目よ
 り流るゝ二人の涙のみ是此人は何人なるや藤三郎小民にて異船なるや甲田俊雄と矢野
 政太郎と知られたり(民)チイ藤三郎さんモウ此處まで来て見れば決して泣きの致しま
 せんヨあの船が其人ならば早ふいつてチイろれ大切なるものを間違ひなく取て入ッしや
 い其内妾の髪のはつれ……と泣目を拂ひてと促がされ藤三郎の意を決して先方の船に
 乗うつれば兼て待たるものと見え歡こび迎へて酒をすゝめつ約束の如く四百圓の金貨
 を渡せば受取つ此方の舟に移り来れば小民は徐かに撫あぐる髪千筋にわかれても只
 一筋とすき櫛の好男に分るゝ苦しさに消も入たき髪のみづ結ぶ元結のかみくゝの細工
 と聞くも仇たのめ懐ころしたる白粉のしろきに移らぬ汚れた身体をふたゝび汚す無形
 なさと出る涙を呑込みて(民)藤さん爾なら参りますよ貴郎は随分身を大切に其金もつ
 て商法おこし御新造さんにめぐり逢ひ妾の胸のありたけをヨーク傳へて下さりませサ
 アまゐります御機嫌よふと力もいどいなよ竹の雪になやめば岸の柳の風にもまるゝ風
 情にて船頭近く立出るを(藤)コレ小民。この草提の前のもの髪結道具の入れてある

先へいつては入るものゆゑ(民)ハイ夫のよふ氣がつきましたね爾なら此方へ(藤)チイ
 ヲン危険い沈没まいゾ。甲田君く左様ならばお約束の……(甲)ヲット来たくサア
 姉さん危険ぜ。それしつかりと手をとりねへ。爾だくうまいくヤレヤレ玉を取捕
 へたゾ。旦那定めてお喜びてせう。サアく姉さん小民さん。マアく此方へお出な
 せへ。イヨ今日日は又別段うつくしくなつた(民)ハイ是はお初に……不束のもの爾
 来はお目かけられて……(甲)イヨウ大和屋ア……實に様子のいゝ事といつたら柳橋に
 かざるくサア先お知己のしるしだ旦那の盃をいたゞいたらどうだ子。斯うく金
 藤君くマア待なせへ斯なつた上で同船したら可訝なもんだが船と船とちや知らぬ他
 人切て一杯献じたい子。船の其まゝくサ。オイ小民さんさかづき……(民)ハイ斯
 なりやいたゞきますヨ。然しちよつと今ひと言を申した上で……(甲)ぢや花染色で残
 るな(民)イ、エ覺悟も致しお互ひに得心づくで別れたからは未練もみしやくも残
 りませぬが。アノ人も妾の爲に片財産を潰した人斯なつたどてまんざらにわか他人
 と思はれませぬ。將來の事て唯ひと口。ト申したく大恩ある旦那のお目を掠めて不義

どやら密通とやらを致す心は御座りませんとふうしばらく願ひ申升と云つゝ船の舳
先から心に思ひのあり氣にてかようなわけでありますから尊公方もあいやであります
か一ト通りをちよつと聞てくださりませ……(甲)なる程立派に手は切ても爲になつた
旦那ゆゑあかの他人と思はぬと……成程ううだ。こりや爾もあるべき筈だ。お前が以
前の義理を忘れねば今の旦那の義理も忘れぬといふ譯だ。あもしろい氣象の娘だノ。
夫ぢや勝手にとつくりと話すがい、(民)夫は有難ふ存じま。爾ならちよつと以前
の草提を手に持ち船先に出ければ此問答を洩聞たりけん近處に居たる屋根船はコハ面
白き身賣があるぞと言合さねど潜寄来りさすがに近くいあらねども耳をすまして聞居
たれば河心ますますすみ渡りて日既に没し月いで、金龍浪に躍りたり

二十とよまぢ

船先にツ、立悄然たる小民は聲も麗はしげに(民)藤さん、能くお聞きよ……わちま
が子尊郎と末ハ夫婦にも思つたから繼母が愚圖、いふのを。きぬけ、身あがりし
て逢通した事……今更にはさどもの事ですが。身受の金ば御新造のお友さんがと聞

いた時からすつかり愛想がつきたんだが。其前方ぢや火事やら何かで食乏しぬいた其
癖にどうして三百圓の金が有たらうア、ぢや中々頼母しい須藤といふ時間にあふ人一
生添送げるにや此人だと思つた故に東京を發足時。漁船の乗式もないどの事ゆゑ妾キ
の髪のを質入して漸々京坂へ渡航て來たも尊郎の懐裏は目途にしませんヨ大切な
時の用心にと半玉の比から貯蓄て置た金子ハ千圓もあまつたんです。然しネ金銭ぢ
や人が目をつけるから金無垢のものや金剛石を指輪にしたり簪もしたるまたは髪か
けにしてこれ御覽よ今にでももつて居るよ。といふたら何處にとお言であらうが尊郎
にまでも隠して置たが。今は手品をお目にかけるヨ。外てもね、矢張此髪結道具を入
て置た草提だかね。四方の底を革で仕かけて誰アれにも氣のつかぬ様して置たはず。
尊郎がいよ、困つた時に出して賣うと思つたのですヨ。疑がはしくばこれ御覽ナ。
此指輪よはめたのは其處で見てもキラ、光らうが子。コリヤ三百圓も出した金剛石
ですヨ。此髪かけを御覽なコリヤ白金といふ鑛物ダツスサ。どんな火でも鏝ぬから可
訝しいよ、鑑かこりや五百圓もしたものを横濱の異人さんから譲つて貰つたんだよ跡は

指輪がまだ三ツ四ツもあるしネ。帯締の金物や腕守りの金物で二十品もあるがみんな金無垢だヨ夫にアノ西洋の寶石細工が交つて居るがね捨賣にしたつて千や千二三百の金は大丈夫手にあるよ。正可の時の尊郎の資本と是まで貯はへ置た苦しき夜の目も中々寝られなかつた其苦しみを毫とも思はずして人の口にフハと乗りまた妾の身を外へ售るとは尊郎は實は人情知らず。妾の是まで苦勞したのは此品々と競べても妾の一片の真心の方が遙かに勝つて居ると思ふよ。妾の草提に王があつても尊郎の目には眞實といふ王がないからうつらぬのだ子。人間の行末の稲妻とか浮萍とか尊郎に甫めて脱離され行たび棄捐らるゝといふはよく果敢ない妾の身の上妾の尊郎に負きはせねど尊郎が妾に負きなさりや天から結ばる縁ではあるまい。そぐはぬ縁とあるならば是まで貯蓄た此品々も尊郎へ上る譯でもなし。トいふて日本中に是をやるべき人もないから。人間とおなじ様に元の水へ歸して罷了ますよといふより手早く品々草提の中へ押込てエイと一聲河中目がけて放り込だる絆の体に二艘の船中揺ぐ斗りアツト斗りに言葉なく近傍の船の聲を發してア、惜しい事をといふ聲の静まらぬ内小民は再



小民の聲

たび(民)子へ藤さん是て妾の思ひはさつぱり必らず恨んで下さるな(男)心といふ事は今さら思ひ當りましたよ……といひつゝはら／＼両眼より溢す涙の銅の汁をこぼすに異ならず空を仰ぎつ河をのみ狂氣の如く見ろたるの道理せめておはれなり(甲)こりや魂消た實に恐れいつたが夫程の品ものを捨るといふは惜い事だオイ／＼船頭早ふ通ひ船を呼んでくれまア／＼小民さん腹も立たうが夫程にせせとも……(民)いや／＼尊郎方ふも恨みがある……藤さんといひ千辛萬苦の苦勞を凌いで漸々と夫婦の睦みを結ばうとする大事な間際に臨んで金で男の心を濁かし人の女房を奪らんとし人の恩愛情けを斷つのは鬼畜生にも劣つた人達。小民は東京の水で育つてまけぬ氣象で押通したのに。大坂くだりへはる／＼来てこんな耻辱に逢ふとは夢さらしらぬ口惜しさ身の貯蓄を捨て見れば此身も更に惜しみはせぬ。藏さんさらば。あの世から緩々お禮を申します。悪人ども後の愛目に必らず思ひ知つたがよいといふかと思へば身をひるがへし怒まぢ河へ飛込の水のしら玉バット立ち船へもサット飛ちれば一同あつげに取られ乍らもソ／＼船頭助けよあげよ 俄かよ狼狽へ騒ぎ廻れど夜の河なり思ひに任せ

近傍の船にてもろれ助けよと言ながら二艘の船の人々が無情を怒るも人情にて「ヤイ情しらせ義理しらせ」色戀しらすの不人情もの「人の女房を金で買ふ明治の罪罪打ころせ」自分の女房を人に售る慾張草主も叩き倒せ「馬鹿ヤアイ」「呆痴ヤアイ」「ワア

二十五 せぢ

月あきらかに風清く白露の江に横たはるを貸せずんば有べからずと東坡然たる人物の雜沓を厭ひて秋涼を待ち舟を大川に泛べて瓢酒に興する又淀辰奈良茂が蹟をまねぶの利た風流妓を載せる俗ぼるとチツな處に見識立て碁盤を持ち込み白黒の生死を争ふ仙人乎たると又俳諧の天狗連と一風變つた人物のみにて河心いと／＼徐かなるが今しも投身の騒ぎにて船の四方へ散亂すれば又も一處も集まりて面しろ半分水を探るあり。水上警察の早くも聞どりパツテラを漕ぎ来りて其邊を搜索すれども小民の姿は影もなし。餘處の事よ他の船の再び舊の處に復り棹をどしめて涼風とりつゝ酒を飲むあり諷ふわり稍賑はしくなりたる中「もしどうもサ君の寵愛と秋日の熱さど

いふものは長持は出来ないものです。エ、左様サ。今の投身一件はどうも實にサ憫然なものです。あれが實に情に迫つての投身といふのでせう。どうも男は罪です。左様……人の情といふものゝ動くを以て本情と致しやす。こりや道理な事だの。孔明だの楠だのといふ英雄豪傑でも孔子だの曾子だのといふ賢聖至孝でも情の動かぬといふはない筈で。其情が動かぬ時は木や竹と同然。植物界の人物といふ者孔明だとして後主の愚鈍なるに呆れて腹も立たらう正成だとして我秘策の用ひられぬ時は思々しい公家めらだ足利方なら斯でも有まいと思つた事も有たらうが其私情の動く處をこつと辛防し遂るが良臣賢相と後世に呼べる處でせう孔子曾子だとして聖賢孝義一點たり外に心は動ぬとは云れませぬ旨い物は喰たからう。したいものは仕たかつたらうサお互ひの商人同士でも店頭でヘイ御辭義をして居るに。コラ食らんか。食らざアいは。ナニ原價が切れる。嘘だらうトサ言はれた時には眞實原價の切れる品物で見なせ。チヨツ思ひしお客だな買ざア買ぬでうしやアがれと腹の立のも人の情だが其處をソレこつと辛防してお客の氣を和らげ直段を直させて售つてやるが商買上手と

いふのでせう……へ……ハ……ろりや娼妓だつて藝妓だつて何の變りがあるものか却つて其情の動くに手苛い方だが堪へ情の男より女の方が増すでせう。このへげたれめが。ト思つても嫌な顔せず痴也呆也と機嫌をとるが其腹の中はどうかであらう。一々之を分折したなら妙々不思議な情態が顯はれませう。今此舟に乗てる人々でも其情の動くのは此舟の動くより甚はだしいでせう。まアざアつとしても桃雅さんの食好みか子。此贈の酢が利過ぎちや居まいか喰つて見様か見まいかいやく此方の煮物に仕様か己は麥酒の好まぬが人が味いといふから一杯やつて見様かラムチどのうだしらん孰にも様なこんな時にや鮑の酢貝か麥酒を呑にや梨子か桃か日本酒はどうだしらん。子へもし爾でせう其情がいくらにも動くが人の本性で麥酒をぐつとやらかしわい。旨いといふ時に初めて本情が情まつたのでありやせう。梅好さんの舞妓好みも其通り初めてわの子に定める迄にや。わの若草か。此早梅か。これなら一番。しかしどうか。初めは決して定まらぬアノ一人と究つて來ると可愛さがますますだらうヨ。唯情の動いた時に之を制する力によつて善悪良否が出来るのであらう動くのは假想で定まる處

が眞想だど……アハ……途方もねへ哲學士だノ。エ、モシ爾はいふもの、今の投身の……サア其處だね。一方の可愛い男で錢がなくなつて不實になつた。一方は金満家らしいが行ともないといふですから投身する迄の心の内あもかかつかと魂しひは筋斗をして騒いだ事でせうが。いよ／＼是はといふ時に本情がちやんと掘つてスポンと身を深サ。可憫さうぢや御座りやせんか。彼と是と比較すると好男子はいよ／＼罪なるものイヤ憎いネ。われほど實情のある女としらず金に目がくれて人に售るとは言語道斷の茶ツ茶無茶若茶犬に喰せて殺してやるより河へドボンと俱成佛とやらせたいものだね。あんな奴が明治の今日にうろつくから女流社會の改良を實地に行なふ事が出来ぬサ……恐ろしく婦人の肩を持つねエ……なにサ別段提灯を持ってやるでもねへが。近來の婦人がサ。生意氣も随分あるが中への彼が如き實情のものが其實情を貫ぬく事能はずして空しく河中の藻屑となるは實に以て憫然の至り以來斯の如き婦人にして非命に死せざる様其良人を探むには尤とも貴重なるといふ事を。ナニエ。アハ……僕が唾液が舟中を舞あらくと……船中にて左様の事は申さぬものにて候ツ。アハ……ナニ

／＼なんだと……アレを見ろ。オヤ／＼今の不實野郎が誰かに押へられてギウ／＼いつて居るぜ。ハ……ハ、氣味／＼ド／＼／＼傍へいつて聞てやらふ。オイ船州。みよしをあらへノウ。承知か

二十と六すぢ

此方の方に二艘の屋根舟繋ぎ合せる如くによせ合ひ一艘の方よりは鹿爪らしき人物が銀の煙管に丹波の湖葉薫らし乍ら儼然に構へ(幸)コン藤三郎。お前此兄幸太郎の面ハ豈夫忘れはせまいの。まづ健康でも互ひに舟遊びでもして居るのは結構な譯であるてサ。どうだい其後は一向互ひに御無沙汰で東京の様子はチットも聞ぬが相變らず商法に勉強であらうね。マア何より結構な次第柄といふものサ。自己も一度はいつて見たいと思つて居るが何やら忙しいので。イヤ會社の創設だの何の議會彼の宴會と諸方へ引出されるのでツヒ暇がないで未だ天皇陛下の麓下を見ぬといふ國民として濟ぬ譯サ。お前は兄弟三人の中でも幸福ものだ。自己の常分楚同様で庄二郎ハ大失敗の後に行方しれず彼が妻のお玉も實家へは歸らず夫婦で逐電したのか今以て行方がしれ

ぬ。お前だけは東京どか横濱どかてドン／＼商法を營なんて居る様子は越した結構な事はない。なにかノ今日は同伴なして獨り大川の月を賞するといふ風雅な譯カノ。此大坂まで来る位なら十三里といふても瀛車の道。一時四十分間で到着するちよつと訪ねてもよいでないか。といつたらお前はよいかしらぬが。よふ訪ねて来られまい。人間社會にも不實といふ一點が精神に固着する時は容易に脱却せぬてお前も今の投身騒ぎを聞たであらう世の中に無情不實といふのは恐らくあの男に超た者ゝあるまい投身人の物語りて察して見ると御新造があつて。其御新造が身にも替り金を商法の資本として預けたを其金もつてアノ女を落籍せ大坂へ来て又人に教唆され其女を售たといふのだから……お前ぢやないサ。お前がどうしてあんな不實を働らかうサあの不實男は女房に見放された代りに跡の女を見放すといふのだから悉皆野蠻未開の話して明治の空氣を呼吸したものは思はれぬ。爾いふ不實な男は自己の弟にない筈だから訪ねて来られぬも道理サ。お前は自己の弟だ。兄の顔まで潰す事はせまいて、定めて京都へ訪ねて来るなら立派な風でなくとも親類や知己へ大手をふつて行かれる

様になつて来るには相違ねへ。處が悪く尋ねて来ると詐偽取財の廉を以て裁判所へ訴たへ出すと腕をさすつて居るものがあるとの事だ……。こりやお前の事ではない餘處の斷しサ。お前も来るならマア其心得て来るがいといふ話しサ。今日の同伴もあり自儘の納涼でもないから此儘に別れませう。いづれ兄弟の事だから一生別れて居られぬ。親父の存命中には三人が顔を並べて親爺の顔を見たいものだ。其氣てまづ……ヤ是ハ大きに失敬を致しました。サア／＼船頭。櫻の宮までやつて貰ひませう別れて登る屋根船に取はなされし藤三郎ホツと太息に見送り乍らも(藤)オイ舟頭さん大きに御苦勞だつた。堂島川まで下げて下さい。ア、楮と今日の種をな目と逢ふ日であつたワイ氣の短かいアノ小民。身投をせせども其先に一口斯だといつて呉りや何しに甲田へ渡すものか。自己も實も途方に暮れて不實とは知り乍ら甲田の口車に乗られたが。考がへて見りや不慮な事がある。甲田がいふにはアノ小民さへ手放したら兄へ取入れ少しても借り出してやらふといふ其兄が現在目の前途ふて見れば東京の様子はすつぱり知つた風だし親類知己が憤激して裁判所へ訴たへるといふ夫是承知て居る

どして見れば甲田がいつたどて受つける筈はない甲田は始終京坂間を往復して我兄の宅へも出入するといへば此様子をしらぬてはあまるまいに夫を包んで居たは不思議だ。もしや小民を引出す計策の口車ではなかつたかしらんア。ア、斯なつては迷ふて前後が一向譯らぬが小民の身投げどうしたものであらうかしらん一旦向ふへ譲つて見れば小民は甲田が方の人でもあれば甲田の方から警察へ届けて出るが至當であらう。自己が方から出ればよいか。どの道其まゝには捨て置すと……ハテ困つた事が出來たなア……「モン旦那わたりませ

二十と七すぢ

戀と情におほ川も詰つた金の翫さきから二つに分る、中之島右は土佐堀左りは堂島とがれたいよふ屋根舟の歸るもあれば行もある内屋根裏の提灯いと薄くして中のお客は何人なるか知によしなき一艘の土佐堀川をさつさど下り肥後橋の南詰へつけよとありしに船頭が思ひあやまちけん北詰の橋際へ結纜を繋ぎたり跡より漕ぐ一艘の通ひ船も船の行燈煤暗くしてお客はありやなきやも知れぬが同く北詰へ結纜をつくれればどや

くあがる四五人の荒くれ男、橋の袂の柳蔭によりこがりつゝ私を聲「エ、滅法冷てへ水だ「へん水に暖いものがあるか「ろりや究てるが眞夏の水は一時や二時水底よ居ても何ともねへが此秋口になるとひいやかミシシ冷たくならう「夫も其筈よ是から冬になると凍つて雪にもならうといふ下地だ。冷てへは當然まいよ「へん何をいつても受が悪い「知れた事ヨ夏寒いといふものがなけりや雪の降る日を暑いといふ馬鹿があるかエ「是さ「又喧嘩をする。よせく。つめたけりや冷たい程骨折代は充分出るほど卑賤の癖どて金錢づくには患難苦勞を事どもせずがやく「何か罵しり居たるを屋根船にて聞つけ「んニヨツと出来る一個の人物(み)コソ音高いしづかにしろ「ハ……みやこめが親方ぶつて芝居もどきをやりやがるは(み)これサ「大きな聲をするなど云んだ。人が聞ちや困らアナ。其處で紀州が一番冷てい目をしたからといつて別段に骨力賃を出す筈だどサ。旦那はいつて居るが同じ入陣イヤ長屋に住ものだ誰が骨折た彼が樂をした分け隔てをつけるでもあるまい。だから是だけ骨折料だから總わたまに割つけちやどうだい「夫だく「ナア紀州「ウンろりや爾よ己ア水が出来たから人

一倍骨を折たが別の仕事にかゝつちや意苦地がねへていつも愈の世話になつてラわた
ま割よ〜「爾きまりやいさくさばねへ」チイみやこお前も這入るんだナ(み)イヤ己
等は別といつて何も貴様等より餘計に貰うんぢやねへ。まだ外に頼みてへ事があるど
いふからそりやまア愈て分配てくれ」さうすりや尙以て有がてへぢや。爾なら己等モ
ウ行せ旦那にや逢ねへが残つた手前から宜しくいつてくりや(み)ウン承知だ〜人に
可訝く思れねへ内早く行け〜「ハッ……矢張り芝居じみてけつから。アハ……。サ
今夜は諸白の一本生が呑らアいかふ〜と打つれて「ハ……船頭めが南と北を間違せ
やがつて餘計な道を歩行やがらアとブツ〜小言つゝやきつゝ肥後橋を打わたり南の
方へと立さりけり岸の柳の蔭くらく月さへ薄き雲蔽ひ人の顔さへおぼろなる折ころよ
しと屋根船より又あらはるゝは洋服出立沓音かすめて岸にのぼれば跡よりつゝく女の
姿大模様の白地の浴衣にきりゝと結ぶ丸くけ帯茲らに見馴ぬ風躰にて俱に柳の蔭に
より(洋服)イヤみやこ。御苦勞で大勢の力でマア漸々(み)モシ見違つちやなるめへ
と餘程骨を折やした(洋服)爾であろ〜いづれ宿まで歸つた上でゆる〜禮も(み)ぢ

や此船のまゝていつちやどうです(洋)これサ〜紫痴をいばね〜ものさ。ろれ例の足
がつくなア斯いふ處から(み)ですな夫ぢや腕車で。淀屋橋まで幾會もありやす此邊ぢ
や御覽なせへ今比てさへ人影がありやせんからと話しの内に向ふの方から來る人影を
女はすかして何やら洋服にさゝやけば洋服は又みやこに私語比しく木蔭に身を隠す折
しも此處へ來かゝるは浪華橋より上陸せしかの金田屋の藤三郎(藤)公園地をフアリと
來たゆゑ大江橋を渡りかくれた是から波邊橋を渡らあきや堂島へ出られないナ。ア
、何やらボカンとして氣抜同様になつて罷了た。ハテ此末はどう仕様か此四百圓を賣
本にして大坂で一働らきやつて見様か。然し京都の貴兄が時々大坂へ下る様ぢや面目
ぬへ次第だしなア。ハテどうしたらと腕組しながら思案にあまる小首を傾け來掛る向
へばつさりと突當りしは洋服出立はつといふ間に懐中したる四百圓はいつしかに他の
手へ渡るも心つかず是は粗勿と行過る後ろにイサむ女の顔ハテなど顔くを袖屏風横よ
り來る頬かむりが藤三郎とすれ違ふ時いかになしけん冠りし手拭はづれて半面おらは
す時藤三郎はフット見てヤアと興くり立よれば頬かむりせし男も驚ろき逃んどせしが



小首をかたげて女が手に持つ包みのものサツと奪ひて一目さんアノと叫ぶ洋服出立はうろ／＼したる藤三郎を力に任せて其場へ投げつけ女の手をとり「さん」に南の方へ馳せ去りたり

二十と八すぢ

九重の都の中にも中京と音に響きし宝町通り商家は軒を並べつゝ算盤の音絶間なく入来るお客出る手代聞て極楽見て地獄とは大家といふ程勝手向儉約質素でつりしのお。大根と小便せう。胡蘿蔔と小便せうを朝夕の番菜となし番頭手代は縁なものはいはれぬものとの悪口にて樂なき謂ふとしられたり。あるが中にも間口の廣く手代小僧も多くつかひて金田の字の暖簾は主人は金田屋幸太郎今日の外出もなさず獨り居間に引こもりて帳簿を彼見合せ居たるは商法に取調べを要する事のあるならん(幸)ア、と此口が二百圓と是が八十圓。是を合して織屋へ渡せば此節季の踏切れるト。其處で丹後の方の地物の代が随分嵩んで居やう。どの位あるしらん……と都合十口で八百六十何圓と。こりや中々嵩んで來たな。半金と思ふが夫ては暖簾にも拘はるか。ア

此此の公債を買なけりや可つたにズンズン上り目と見たから買込だが又此節だれ口にて成て來たが今賣拂つては内兜を見透される。整理の方なら賣てもよいが是も長男の爲めに買て置のた何ぞと仲買に入らぬ法螺を吹て買せたが。無記名で幸はひだ別の手から賣出して兎も角も此節季の繰越しを付ると仕様。商船株は随分此比景氣を持た様子だからあれは少し辛防せざるまいかしらん。斯う又會社が流行出して。後の爲に宜かしらぬが當分大きに苦しみなものだ。ナニモ此方に望みはせぬのに御家柄だ五十株は動きますまいと押つける。彼方の會社に三十此方には二十と向ふから見積つて呉るか知れぬが内證の手元不相應に押付らるゝに閉口する。たま／＼夫はと謝絶ば。どうも貴公が持つて下されぬと世上の信用に關係するといふから餘義なく二三十の持てやるものゝ内證の手元の大乱脈だ。萬一も拂込が一時にあらうものなら國庫疲弊で大藏大臣大狼狽。株を捨て遁亡……トサいかないから困る。然しこりや正金が潰れる計りで左右株券といふ形代が残るからいゝが。形も影もなくなる散財筋にや當惑する……儼が藝妓とか藝妓とか管中の錚々鉄中の鏗々といふものを所有物とす

る自分一人すましても居られず約束が五十に花が八十どの高いものを承知でアノた……
…エ、危険く誰も聞いて居ぬかしらん……ム、よし〜誰も居ぬナ。其處で萬亭の
拂たが前の節季には大坂下りて喘着したが其後も五六度いつたから高い上へ盛土で大
分積つたであらう中村屋の分は仲間の方で拂出しになつたといふから大嘉の方の自己
持とせざアなるまいといつても頭痛の一ツだが今更やめやうとするにも止られずきやつ
も破約にするに又幾等かの離縁金を出さアならずカ孰の道にしても損計りだが今
の紳士と呼ばれる中に己程の苦しがりも在まいイヤ〜爾でないか知らん内證へ這入
て見たら同感同体といふものもあるだらうア……ろりや此節期の祇園拂ひはどう辻襪
を合すればよいか……アサテ煩慮な……ダ、誰だい……ム、お花か何の用で……ナニ
幸助の洋服と……そりや最う一通り拵らへずバなるまい。ナニ今度は綾羅紗にする。
ム、夫も爾だ。先のスコッチの間に合せだからどうせ跡でよいのを拵らへてやらう
どは思つて居たのサ。ろりや千葉龜でも澤田でもよいワナ然し熊谷でも新店が出たか
ら注文して見るもよからう可れば自己も合着を一整へて誂らへやう……お前……も洋

服ぢやね〜靴の方をど。ナニ小方で痛ふてならん。ろりや足も合せね〜からだ三條の
古川でも四條の玉水でもい。然し玉水は一錢もひかぬといふから面白いあれ拵ら
はすが能らう……爾さノウ……華靴にして舞踏の間にも合せ様といつたらまア五圓
以上はとるだらうよ仕方がね〜買がよいのサ……エ、エ、ナニ。夏帯が……お前洋
服を拵へる時日本ものはモウ入らぬといつたが……ナニ店のものを下せば當分金は出
ぬ……サ夫も爾だが。さう雜費がかゝつて店のもの、前もいかいだ……なに今日は
何處へも出ぬもう彼は夕飯だらう一膳たべて見様かの。チヨット酒を五勺計りつけて
貰ふかなんぞ御馳走があるかノ。ナニあるぞ。ソレは結構だどうも用が多くて始終出つ
けるもんだからッヒ樂々宅で夕飯も喫ぬが出て喰ふのは實に身にならぬテ……お竹か
……御膳か……よし〜夫へ置て行け……ハ、ア御馳走が出来ましたナ
二十と九きぢ

(幸)ム……ムニヤ〜……此乾菜の何志て焚たのだらうナ。ハ。ハア……鱧の皮を切
ませて……成ほどこりや洒落て居るの。粹な庖丁だ。うまい〜……なんだかますの

一盥か。ハ、ア……かますの乾物も斯うカラ／＼になるほど炙たをむしり切て薄い醬油をかける……ど中々むまいものだ。こりや何處の酒だの。ナニ貰つたのだ。道理で少し氣がぬけた様だが別に悪くもあるまい。これこれ高野豆腐を斯う焚ていいかんテ。噛しめる。中から辛い汁が出る。ドモあらんテ。こりや湯葉を先に焚て。ろの跡汁で淡泊にあつさりと焚なけりや甘くねへ。こりや一の両品に甘美を生ぜしめ一の醬油の徳になる則ち一擧兩得の經濟法だテ……仙太郎何ぢや。お客様だど。何誰様ぢや。田上君か内藤君か……ム、フーム……ハテナ東京から……ハテナ左右八疊へ通して置け。こりや八疊の奇麗になつて居るか絨氈の汚れて居ぬか……ム、洋服だどハ……其筈よ。此節柄自己を尋ねて來るに滅多に和服があるものかこれ／＼。何もの様に其を……うして火奴を……よし／＼今に行く……喃れ花。斯また洋服連中が尋ねて來てハ是非卓机や椅子もサ……オウ今いくが……これお花又後に喫ると仕様と漸々立つて襟づくらひなし應接の間に充たりける八疊の間へ入來り見れば年齢まだ壯ければ敢爲不抜の相貌あらぬれゲンカン羅紗の上仕立袖と襟との釦に寶石をや箱みけん光彩燦

爛として時計の鏡と色を争そふ何様餘程の資格財産を有するものと推せられ雙方に初對面の口誼より寒暖の挨拶終りて(幸)ハ、ア夫でハ京都へ初めて。ヤ夫の／＼。ハ……僕に何か御依頼……フ、ン澁澤……大倉……ハイ……左様で御座りますか。ナニ仙太郎何だど……何某が……お客様が麥酒を一ダース……ムウ……ヤ是ハ又どうも恐れ入ります……ハイ……イヤ……ストツクと限ります……ハイ京都にも追々出來ます。ハイ扇ビール井筒ビール九重ビール……未種類が出來ませうイヤ盛りと申す程の事でもありませんがアハ……。ハイ……ハイ／＼イヤ何も有ませんがチヨットお持せの麥酒でも……ハイハア……ハイれ供を……コレ／＼仙太郎。帳場へいつて二挺。一人乗を……ハ……ナル左様ならばまだ時刻も早し歩行致すも運動の爲めて……イヤ左様ならばお供を。しかし失敬ながらチヨット着替まして……コレ／＼仙太郎。珈琲を今一盞……イヤ／＼紅茶の方をわけろ……左様ならばチヨットと一禮しながら居間で早速洋服をつけながら手袋洋杖残らずお早う御歸り遊ばせといふ聲跡一聞なして容間に至り以前の容と二人連にて家を立出て途上頻りに物語るハ京都の様子を問ふに隨がひ答ふ

るよど知られたり(幸)エ、是が三條通りの東洞院でマア京都での主眼をいふでせう。
 左様郵便局です。是が中外電報社で……ハ……左様で……以前の墨華院といふ宮家の
 跡地で……是は日出新聞社で……エ、一体分身とハ。アハ……でも有りますが。マア
 此所等の商人なら……左様一体まづ沈着と申せば能く聞えますが其實の不活潑で。是
 も自然と山河の形勢によつて……御承知の通り以前でもマア諸宗の本山あるを以て諸
 國の諸人を第一の得意と見なしその餘の工業を以て諸方へ輸出する所諸西陣ものが最
 優等を占めるといふのでいづれも土地を動かす渡世が出来たもんですから總体見聞が
 狭く今にても汽車の便はわれど京都に用がなければ大津なり大坂なりいつて罷了と
 いふ通り扱といふ場處で……そりやまア大坂だといつて同じ通り扱も出来すが……
 京と大坂でハ大變に人氣が違ひますテ……ハ……是が大和大路で伏見まで直線です……
 ……アツ……オウお柔だのどちららへ参つたのぢや……ハ、又左様かお早くお歸りなさい
 ……よろしく申しあげての……ム……アハ……アハ……イヤ是ハお足をどめて甚
 だ失敬……。エ、ありや隠宅に置ます妹で……なアに一向不別嬪な……京都中を帯

て掃はども在ませうハ……ナニ京都の美人の淵藪だと仰しやるかマア東國から来る人
 いらづれ爾いはるハが……成程貴顯方も故意く美婦人を見立に京都まで……要路に
 あり劇職かと思へハ爾でもないいづれ閑散の處があると思えて東京でも新橋柳橋其外
 美人の巢窟もたくさんあるのに京都まで故意く……イヤ中々御骨の折れ職掌で……
 アハ……ナニ見馴れると左程美人と思ふのも見かけませんで……オウもう中村屋か。
 サ、先々……イヤサ先お先へ……ハ……然らば御同道致しませうか。オイく洋杖も
 一處にして置て下さい……どうも洋食を喰せる處で靴を脱せるとハ……チモツアハ……

三十夜ぢ

粹も不粹も物がたい。二本としてはやらかな。祇園豆腐の二軒茶屋と京都の四季の
 唱歌の内玉をつらぬく豆腐の名物。藤屋中村屋の軒向ひ。向方にかいやく茶釜の光り
 も藤屋はいつしか枯はて、獨り中村屋の名も高く高樓聳へて東山西山の名區を左右に
 し連廊彩虹の如く軒梁雨脚より茂り室内の粧飾俗中に雅を交へて内外國人争ふて此

樓に登る招聘に應ずる舞妓歌妓は花の如く榮として華麗やかに柳の如く嬌として手弱
 やかなり金田屋幸太郎を誘なひ來たりし東京人岡本通俊は主坐にありて一椀の茶に咽
 喉を潤はし一本の巻煙草を鼻のほとりに薫らしながらなかば吞畢らばポンジューと灰
 吹へ身投させ徐かに説出す言語の抑揚(通)どうも御足勞を願つて甚はだ恐縮致します
 が幸はひにして捨られず實に欣喜の至りです……どうか自今御懇親を結ばん爲め甚だ
 粗末ながら一酌と晚餐とを呈したく。どうかゆるく御談話を願たふあります……へ
 イなにも用談はまづ跡として……いかさま貴命も御道理……然らばまづさつと致した
 趣意だけを申しのべて跡は後會にゆるゆると……左様……詳細なる事を申すと致しま
 せう……此度小生が京都へ派出致したは餘の儀でもありません實は同盟者の依頼を受
 けて……へイ其同盟といふは濫澤……大倉……益田……伊藤安田といふ顔ですが。な
 りと會社といふ様なパツとした事ぢやどうも株券發行といふ煩はしい事がついて廻る
 ので實業も起さぬ先から株券の賣買。どうもサ東京なともそろく流行かゝつて來た
 が此地ほど甚はだしくはありません。あれぢや實業といふ商法には成やせんので今度

同盟者になるべく密かにといふ點にて一商會を組織し度と云希望ですが……尤も同
 盟の内にも頭の堅い大倉か益田が全体來る積りであつたんですが。どうもサ御存じの
 大倉や益田ですから……御當地などには左程目にもつくまいが大坂などに逗留して商
 法家と往復でも致すとキヤツ何の爲に登つたかしらんと直に手を入れて嗅出ます。何
 程秘密に致した處が根が商法と云手廣い事ですから直に嗅出して來てくれぢや此點は
 僕が周旋するとか。此一方は負擔して成功を期すとか……其代り又は純益の何分方……
 ……どうも蒼蠅くつてならぬと……ですから此度のごときは成べく秘密を要する事ゆゑあ
 まり京坂地方に顔の賣れぬものがよからうと集議上からッヒも僕が撰抜になつた次第
 で……左様……未だ御當地へは……ですから名勝舊跡を見物かたぐし視察の爲め且は
 有志諸君に一面して圖る處あらんとするといふ一件で派出致した譯であります……
 へイ左様……イヤ未だ當地の商法家には面會も致しませぬが豫て東京を發足の砌りに
 京都あらばこれく人物があるから其内に問合せ面會致すがよいが。迂闊には洩さ
 ぬがよからうとの事で名簿だけは……オット此方のポケットであつた……ア、所持

して参つた次第ですがちよつと御聞下され。マア西陣の織物類では西村。矢代。中村。熊谷。小西。清水。樫本と又帯地や何やかやで矢代庄五郎さん。吉田。田中。平井。結城。又西村源助さん。山田が二軒と又天鵝絨なんぞちや吉田善助さん。宮川金三郎さん。友仙の方で西村の總左衛門さん。杉山松宮内田とあります。頼頼の方では明田。河村。市原。今井。安田。龜田。勝田。寺村。中川。一井。嶋田。巽さんとマア斯う部分なんぞをしてもないですが……こりやはほんの僕の備忘まで記した事で……ナニサ是だけの人をといふ譯ぢや御座りません。其所が視察の要用なる處で……今此内の方々へ五六名も相談をかけたら忽ちちばつと致しやせう。うしたら同盟になる人はともかく。其跡の人々でもし例の競争を試みられちや實にをかしくない譯で……左様サまづ取敢ず百五十萬圓と假定致したか第一の目的とする處は西陣織の直輸……にあるんです……トいつて他の商家の邪魔をするてもないが何でも其……繻子とか織屋とかを籠絡してしまつて……いづれ金力で……イヤ詳細の事追つてと致しませうから。マア……一杯めしわがつて……貴君にはじめて面會致すも去る處から聞込だ譯があつて……ハイ……ナニ僕なん

ずの一向資産などは……ハ……實は上總房州の方で漁場に少しく……ナニ僅です。網時の所得どいつた處か五千か六千。實にお耻かしい話して……ハイ少々の甲州の方で……銅山です……コウ……ポイ。シヤンパンを……跡はよろしい。直に出すがよい。サツどうか……左様なら……初めて面謁を得たる金田幸太郎君の名譽と健康を祝す。サツどうかめしわがつて……ナニ……皆が揃つて居る。舞妓が三人藝妓が二人ど。よし〜みな呼んで下せ〜早く〜

三十一すぢ

世の中の活業おはき其なかよ心ある人之を見なば如何なる感じや起すらん加茂の川原により集ふはいかなる体ものなるぞ丸太町橋より下の方二條に至る東川端カチリ〜と鉄槌の音に交はる鉦の音ハ二條新地の青樓にて娼妓が佛願ひ事か但し小兒を失なひて供養の爲かしらねども日暮見かけに打唱ふる聲も哀れな地藏和讃
毎無や能化の地藏尊。拔苦與樂の御誓願。是ハ此世の事なら老。死出の山路の禰野なる。賽の河原の物語り。聞に附ても憐なり。つらく花を眺むれば。開きし花の

散りて。苔の花のちるを見て。花も幼稚き小兒等も無常の風に誘れて。死出の山路の裾野なる。

コツ／＼コツリ「やい／＼何をすらい。コラア己の割つたのだ」「ナニ己んだ」「ヤアかア隣源が己が石を盗むよ。泥坊ヤイ」「なんだ我ヤ泥坊ダ」「コンヤイ又喧嘩をしをる。喧嘩をすると晩に歸つても飯を喰さんゾ……サあかアが分配てやる。中よふして源も熊も働らかうゾ。コン／＼初よ遠くい行な危ないゾ

未だ歩行まぬ嬰兒が。賽の河原の初旅路。一ツや二ツ三ツやよつ。五ツや六ツや七ツ八ツ。十ふも足らぬ幼な子が。廣き河原に集まりて。夜の拂曉から花をどり。地藏菩薩に奉まつる

道路修繕の入用なりとて河原の石を鉄槌にて打碎かせ一坪に付何程と割賃を與ふる故貧民の大きに喜び河原や河岸に群をなし各自其業はげむを見ればいづれも女小兒にて身のむさくろしと噓へん方なく日に焦け風に曝されても今日を過しの悲しさに鉄槌の借賃を差引れて一日僅か七八錢の働らきあるを上となし腕の弱き三四錢おて身節

を痛める者もありと。群を離れて一人の女何ゆゑなるか手拭にて顔押つゝみ古びたる編笠とりて頭に蓋ひ三ツ計りなる幼な子を傍へに遊ばせ同じやうに河原の石を割つゝも心に勵む様なれど馴ぬ仕業か腕たゆみて時々肩を揉みほぐし我子の方に心をかねて打揚げおろす鉄槌の重げに見ゆるも憐れなり

嗚と、様よか、様よ。何國に何してましますぞ。斯る野原に捨置て。切て片親在まさば此苦しみの有まいに。嗚は、様よ助けてと。両手を合しふし拜み。砂にまみれて泣計り。

呂調になる聲の地藏和讃が耳に入りしか彼女は鐵槌前に投出し思はずワツと泣出せし其身にヒ／＼／＼答へたる和讃の文句としられつゝ涙はらひて漸々ど(女)ア、思ひ出すまい泣まいと思ふて居るに又してもアノ地藏和讃小兒に罪のなきものを此子を腹に捨置きて三歳以來音づれなく實家に掛つて泣ついても今ハ繼父繼母ゆゑ唯一厘の合力もせられぬを死ふと思へども此子が枷にて死にも死なれず手業知らぬの悲しさに土方に頼んで此石割石の割ても時々指先たゞく悲しき痛さ息ある内に遭ひて此子

を渡して死たいものぢやがア、今頃のどうしてかナせ京都へ歸つて來ぬか不義理をし
たといふてもなし來られぬ事はあるまいに……

顯はれ出たる獄卒の。ヤア汝等何をする。なぜに塔婆は積ぬや。サア積々ど貫ら
れて。幼な子涕の隙よりも。紅葉の様な手を延て。河原の石を取集め。夫にて回向の
塔をつみ

「コウおめへの何をして居るのだ。愚頭くして居るから今日はまだ半坪にもならねへ
ぜ。サツサト割なせへ。銭が欲くないのかノ……」(女)ハイ、精出して割ます

一重積ての父の爲。二重積ての母の爲。三重積てのふる里の。兄弟我身の爲よとて

(女)折も折とてアノ和讃母子諸とも死ぬとの事か但しの亭主は世を去りて此世に居ぬ
といふ知らせか。心にかゝる辻占の能ふ似た河原の石なぶり賽の河原の石つじより此
世で石わる苦しみが何程増るか知れのせぬ。エ、モウ果敢ない活業じやなア。ア、これ
く危険ないぞくわかアの傍に……

川端に續く柳の鼻端かさどくらへ腰なる柳腰みどりの髪肩すきて當世風俗の束縛に

紫色袴車の靴年も似合の二人の少嬢話しものして歩行來しが二條新地を通り過ぎ歩行
む跡より山崎行きか男女の合乗腕車二人の少嬢を駆け抜け抜けんど棍棒廻す其はづみに河
岸にわけ置く小石の上に這ずり遊び幼な子が頭を出さんとす車を曳んとすアハレ微
塵に引殺されんど。危ふき機會を一人の小嬢があれといひさ身惜まらずに腕車の前
にスツと寄り幼な子ズイと抱き取りつゝ(娘)エ、危ない事の……

南無や能化の地藏尊。たすけたまへや小兒等を。なむあみだぶつ……

三十二巻

二條新地の河傍にて幼な子抱き助けし過刻兄の幸太郎と繩手に出逢ひし妹のお衆に
て同伴なるもの近傍なる朋輩娘としられたり(衆)コレ腕車夫。氣をつけぬとよろし
くないヨ既の事に此兒の天窓を更切る處であつた此後もよく氣をつけてお更なさいヨ
と徐か又諭す言葉の綾は師範學校の女子部にても餘程の級をふみしと見えたり(車夫)
是は洵も濟ません眞平くヤアくお袴に泥が……(衆)ナニく是は厭ひさせん粗忽
なれば仕方がない客人が心せきだらう急ぎなさいと物敷いはす底に情の籠る言葉にハ

イ〜有難ふ〜といひつゝ、棍棒どり直し北の方へと馳せ去りたり(衆)サア此兒は…
オミヤマア身装に似合ぬよい子だ子。おかアはどこにど見廻され先程よりして此跡詠
め我子に負傷のなかりし嫁しと鐵槌なげすて立上り(母)どなた様か有難ふ御座ります
手許の忙しさにツイ忘れてと言つゝお衆の傍に立より編笠越にお衆の顔を見るより
驚く素振にて俯向ながら両手にて我子を受取り乳房を含めつ片手に抱き片手を突き
(女)母の粗忽にて危ふい處をお助け下され難有ふ存じますと編笠どらま顔あけを唯只
管に禮をするさまお衆のつく〜打詠めフームと心に何やら點頭き(衆)ホンニ危ない
事であつた子。御大事になさいましよと物數いはず同伴の娘を促がしつづしつ立去る
を跡ふ志をがみ〜て再回ワツと涙にくれしは様子あり氣に見えたりける
金田屋幸太郎が別宅に隠居の父の幸右衛門我子三人へ財産を分配てやりたる其後は
世上の事に拘はらず本妻お霜權妻のお仙を左右に置きて酒を嗜み茶を好みとも奢る事
なく折ふしは洛中洛外の巨利名前に歩み運び風月を以て樂しみとし未女お衆が機敏
を愛して小學校の卒業より師範學校の女子部に移し其成長を待て後相應の聲がね迎へ

なば夫にて我世の勤めり畢ると行末たのしみ日を送りぬ(父)ばアどんお仙も居たか
こりやお仙よ。此比からお衆が何か願ひがあるとか…何だらう又洋服の御注文かノ
どうも仕方がね〜調のへてやらつしやい。ナニサ。なんだとエ。洋服ではないと。ろん
なら何の願ひだか。大きに堅く出るの。お仙。お前は聞たか。ナニエ。お前へも話さん。
自己に直きに願ふと…なんだのウ。ともかくお衆を呼つしやれ…オウお衆か。讀
書であつたか。大きに妨害するのナニサ。呼だのは外でない。此比から何か願ひがある
とか。聞て貰ひたい事があるとかいふて居るさうだが…ばアでもお仙でも話した
ら。宜さうなのに。自己に逢て話しが仕度と…マア一体何ぢや話して見やれ。フー
ム。ハ、ア。エ、エ。何といふかノ…コンお衆。うちの何か不足でもあつて左様な
事をお願い立。乃公やばアどのやお仙をも困らすのか。コン其方は腹が變つて居る故
三人の兄弟へは。就れへ任すといふ事も出来ず親の手許へ引取て育てるのも。どうか
年老育ちの役に立ずといはれぬ様に立派のものに養育せねばならぬと三人がよつて相
談する。ばアどのも我子繼子の隔てなく。可憐がつてくれるお仙も亦自分の子だと

てあまやかさず。殿しふしつけをする様子。其方も惻怛で學文から裁縫の事からマア
年比の娘にしては卜心で自己も自慢して居る。然し方今の世の中では。いくら學問し
ても足らぬといふ事だ。此上にも學問を精出さねばならぬソ。さま／＼の事をいふが
成たいといふにも程のある事だに……河原へ出て石が割て見たいと……いかに若い跡
先みずても何といふ考がへから左様な事を願ふのか一切其方の心が合點が往かぬ。ノ
ウばアどの。ノウお仙。不思議な子もあつたものでないか。アノ石割の風を見なさい
汚ないともく。アレハ下の森や大佛邊の極貧乏な人が出るのだ。一日コツ／＼敲き割
ても幾等になると思ふて居るぞや。眞似するに事かへて。貧民の眞似までして見すと
能さうなものだが。何を目的に爾な事をいふか。自己には少しもわからぬワ。ナニエ。
ナントだエ。長くはせぬとも五六日させてくれ。フーム。夫りや今の世の中ぢや學問す
るには。實地經驗とやら試験とやら自分がやつて見ねば譯らん事も澤山あるとの事ゆ
ゑ何の眞似もするがよいが。自己も中京では金田屋幸太郎が隠居と呼ばれて人にも知ら
れた顔で見れば。どうも娘を……喃ばアとん。お仙はどう思ふて居るか。なんだエ

お仙ウ……フーム。ナール程。あんまりな事をいふて親を困らす。腹が立ゆえ勝手にさせ
ますと。夫も爾だノ。正可よ乞食同様の所業を好んでするでもあるまい。させてやらふ
か……喃ばアとん。お身達二人がよいといふなら。てんばの皮ぢや。許してやれサ。コ
ンお衆。そちの願ひは聞てやる。いつてもよい河原へ出て見やれ。自己は承知したが。
本家でいしらぬ事だ。成たけ人の目にかゝつてくれなよ。そして着物は夫ではなるま
い。ナニ。ナニ。疾から準備してある。フーム。ハテナ。夫ではよく／＼思ひ込込事がある
と見るナ。コンお衆。滅多な事を仕出かして父母初め兄弟どもに耻をかゝしたり。心配
させたりしてくれなよ。ム。ム。ム。承知して居る……ハテ何事を思ひ立のであらうし
らんノウ……

三十三すぢ

其人種を問は、銅色人種といふべく其衣服を見れば海草を纏りたるに比しく言語も亦
一種の詭言ありて上等人物には不明瞭の語氣多く平常に蛇蛙柳のむし又は蛙などを
を採りて薬舗に鬻ぎ少さかの銭を得て其日の口を過し行けども尙しなき時は空腹を抱

きて事どもなす空腹きはまりて堪がたき時は他人の耕耘せる田圃を問はず他人の有なせる野菜菓實雜穀を撰まず之を無銭に買とり之を無斷無届に採り來りて飢饉を凌ぎ敢て耻とする處なく家の四尺四方に父子兄弟夫婦姉妹が雜居なせども敢て伏しどする事なく肉休を以て寒を防ぐの夜具となし大鋸屑を以て蚊を拂ふの用具となす戸籍外に一個の呼稱ありて本名を呼ても答ふるを知らせ掉號を呼れて應と答ふ其人種の接處を問へば大佛前より寺裏に至り又の北野の下の森など其群尤ども多くして人の物と我ものとの差別はなきも巡査の炯眼の恐怖きゆえ壯なるものは腕車を牽き雇夫に廻れど一戸内の口を糊し兼るまゝ妻子は分業に従事して家を離れて加茂河原に築ゆる其河原に至りて何事をなすか彼の道路修繕用の砂石を拾ふものにて鉄を以て篩に移すものあれば大小の篩を以て砂石の大小を分つあり此の少しく筋骨の立はたらける者の業にて力弱きものは鐵槌をとりて手頃の石を拾ひあつめコツコツ碎きて幾個に分つ炎熱寒風いとひなく河原に群がる体を見れば酸鼻に堪へぬ形状なれど彼等の社會にとるときは之を以て無上の職と心得たるか敢て餘業に移るをしらず或人此人種の徒らに砂礫中

に人となるを嘆き其父母に人間並の職業を學ばん事をすゝむるに喜びて之を肯ない其子の保護を頼みけるゆゑ一商店の丁廝となしたりき後四五日経つと其親の忽ち我子を取かへし舊の河原の石割となしたり或人之を憤懣みて何ゆる好意に背き何故我子の後來を思はざるやと責むるにその親自若としていふに我子のゆきたる先を見るも三度のめしには膝を折らせて窮屈さうに喫させ居たり宅に居て飯を喰ふに胡坐をかきも横になるも寝て居てもかれが自在にて膝を折つてきつと坐らねば飯をくはれぬといふ窮屈なところにて我子をやつておきがたし可憐さうに何科あつて飯くふ行儀を習はせらるゝか飛だれ世話をする人だと反つてろの人をうらめるさまに或人は一句も出で釋迦や孔子の再來でも此人種をば度しがたからんと拂子を投げて逃たりといふ無智無能一種特別の河原業なり然れども人の軒に立ち人の袖を引き手の内貫ふ乞食にハ一着まざりし業体にて少さか許せる處もあらんか有斯る業体とて男女を撰せず見るべき顔ばせなき中に昨日比より河原へ入たる一人の處女あり姿はうづら衣のつぎはぎなれども顔ばせの美しくし手足の鼻娜かさ顔手足とも深く包みて人に見せじとつくる



へども洩れ来る色香はつゝみもならず泥の中の玉ならねば砂にまじる金の如く石割人種の不思議と思ひアレは何者だどこから出たのだ頃も聞て見よ親分に問合せよどガヤく罵しる其中を處女はいとくうるさく覺えて逃げ避る様よものしつ然りとて河原の人種の内にて尋ぬる人のある事にや笠の内や又の頬かむりの内を覗きて罵しられハット驚ろき立退きて人の居ぬ方に走り行き石をとりてコツくすれども心より石を碎くにもあらで右にも左にも面をつゝめる婦人の顔を覗きたがりて河原を那首此首徘徊し居るがテモマア不氣味の奴が来たぞ自分の顔を包み置きて人に覗かるゝを嫌がりながら人の面の包みあるを無暗に覗きて何とするか昔時ならば親の仇讐を尋ぬるなどの爲にもならうが今時左様の事はなしなんでも稀有な代ものゆゑ一同よつて侮弄つてやらふかイヤく年の若さうだし何か仔細があるらしい癖はずホツテ置がよいと譏るもあれば宥めるあり河原はいとく喋々たる中をくぐりて彼處女は頻りに人を求め居たるが測らぬ見認めし其ものは幼子抱きし一人の婦人這も顔ふかく押しつゝみ成たけ人を避る様に群がる人には離るゝ様おし鐵槌とりて一生懸命石を碎きて居る様を處女

はつくく見取て儲かに夫と思ひしゆゑにや近よりて言葉をかけんとすれば彼婦人は厭ふさまにて避るを跡より附幕ひ袂をシツカと採りながら「モシお玉さま此体は……マどうした事……」

三十四すぢ

娘に袂をひかれたる婦人は我子を抱きあげ逃んどなせるを少しも放さず(衆)ア、これ申し此お糸を豈夫か見忘れは有ますまい。モシお玉さま貴姐はマアどうして如此なに零落れて……先日東山から遊歩の歸路にアノ河傍て人力車が夫なる幼兒を曳んとしたのて驚ろき驅より助けあげた其時貴姐は嬉しうに驅よつてお出であつたが妾の顔をチヨット見て俄かに顔をおかくしおされた其風俗の訝かしさ我兒を助けられたら顔のつゝみも脱棄て、禮をいふのが世間の通禮それをさうともせぬ人はなにか様子があゝらしい妾を知つた人であつて妾と顔を合されぬ人であらうが誰であらうといろく心をつくばつて見たが熱々うしろ姿を見まきて思ひあつたお玉さま……中兄御の庄治郎様と御分家の後身上を罷了ひ何處へか御引こしになつたとは大兄さまからの談話で

聞ども何處にお出でいふこと知れずおと、様はなに事も仰しやらねど二人のお母様は始終心配して庄治郎お玉といへ藤三郎お友までどうして居るかど折ふし言出し涙を溢してお出で有ます……傍で聞てる妾の身にも腹ころ異はれ實の兄さまお行方お案じ申した中で思ひ當つた貴姐のお姿……これ程までに落魄てお出ゆえ恥て名乗つてお出のないのど心づくゆる言葉もかけず故意其日は行過ましたが宅に歸りても氣にかゝり母様達にお話し仕様と……思ふては見たけれどあんなになつても尋ねてお出ないは深い様子のある事だらう表向からお尋ね申すより妾一人が姿を換へ河原で引どめれた話し仕様とおと、様や母様達へ無理に願ふて二條の近所へ出て見ましたは三日先人の心のつかぬ様にと上から下と探しましたが此松原の近所とは今迄心がつきませなんだ。サアお玉さまお姉上さまさうお引どめ申したからは一伍一什のお話しを承たまはらねば放しませぬ庄二郎様はどう遊ばした……何故是ほど落魄なされた……何故尋ねてお出なされぬ……さう其譯……を幸はひ四邊に人もなし。仰しやつて下さりませ……サ、是が坊つちやんで……サア〜可愛さうに眞黒に……と信切溢るゝお衆が言辭に先より

河原へ身を投ふし泣倒れたる庄二郎の渾妻のお玉はしやくりわけたる泣根を嘆息にまぎらしてお衆に向ひ分家せし以來庄二郎が放蕩は投奇の爲に崩れとなり手紙を發して通じしたりし其後一向行方の知れず實家へたよるも繼々しき父母にて壹錢の合力もせずと始め終りを委しく語り(玉)一文もない其中で此子は生れる食うには困る實家の嘸す爲体で外に過さん手術はなし御隠居様も兄幸太郎様も追々繁昌と聞て居れと落魄れて心もひがみコンナさまして尋ねていつたら耻をおかす申すも同じと……殊に又分家の時に財産三分した上は兄弟三人五分〜交際。落魄ましたと耻面さげ行かれもせまいと庄二郎が家に居る間言つづけたれば逆も兄弟や御隠居にお廻り申す事は出来ぬ是みな妾の不幸薄命から起る事死ぬる命も惜まぬが庄二郎が家出の後に出来た此子が氣にかゝり切て呼吸ある其中に此子を庄二郎へ手渡しなす其後どうもなりたい心……肉親も及ばぬれ前の信切死んでも忘れは致さぬが夫ほど妾を荷負ふて下さる優しい心でお出ならばどうか一ツの願ひがある……妾はどうもして過して行が此子がいかにも憫然でならぬお前の方でどうもして……イヤ〜何ほど勧められても今まで徹

して来て乞食と同じ渡世となり迎も兄御や御隠居よ此まゝ顔をば合されぬ。庄二郎が置手紙に記したハ他國へ走つて一働らきしドツサリお金をためて歸ると申した筈に偽はりなくば時運が來たら昔時の身に立歸る時もありませう其時父子兄弟がむかしの様に逢ませう……。エ。エ。……好んで河原の石をわらねど餘儀ない糊口の種として……
 ……エ……コンナ賤しい仕事をやめて……毛糸細工……を教へてやる故覺ゑよど……毛糸も何も買てやる……チエ……信切なお前の心これ何にもいはぬエ、これで……爾いふ糊口の種があれば此子を頼む迄もなし夜の目も寝ずに押丁ませうエ、有がたい……然し妾等親子の事をならう事なら誰にても聞せぬ様に……サ夫といふも庄二郎に成だけ耻辱をかけぬ様ど……立歸つたなら夫婦して晴れて對面致したさゆゑ。夫迄は此さまをどうか誰にも見せたくない。お糸どの頼みますると最しめやかに語らひつゝお玉はお糸を伴ひて河原を出るは我住居の大佛前に歸るにや雙方に點頭立去るを先の程より後而の方にて耳を款だて聞居たる商人らしき立派な壯士是も思える處や在けん立去る二女の其跡したひ見え隠れにして従がひ行けり

三十五きぢ

金田屋幸太郎の諸方を奔走して來りしと見え少し疲勞したりといふ容体にて居間へ入りて上衣を脱つ、開着下衣の儘にて胡座をかきながら先一二本の巻煙草をくゆらし鼻の穴へ煙りの侵襲せしと見ゆクフンノ〜と二つ三つ嚏をしながら小うるさいといふ風にて半ば燃たる巻煙草を煙草盆の灰にて叮嚀に消し吸口より抜去りて舊の如く煙草入へ保存するは跡半分をも時に臨みて用立んどの經濟なるべし傍へにあり合す煙草箱の桑にて張たる冠せ蓋にて金泥に四君子の文人畫を描きしは舊堂上家の持物なりしを維新後の改革に拂ひ下げとなり骨董店に番頭役をつとめたりしを茶の宗匠の目にどまりて二十錢以上で落籍なし日比出入の幸太郎方へ持來り細工は無類だとか品物が古雅だとか御宅柄にては是ッ非お備へにならねば成ますまいちよつとお出のお客がホイ煙草囊を失念いたした一ぶく頂戴と仰しやるときはハイ左様ならで織物の煙草入も青樓めく差つきの煙草入ではお手代衆の持ものめきちつとも似合ず。巻煙草の紙箱を添へて此桑箱に薩摩か關の上葉をつめ銀煙管を押ならべて。さやうならばお好みどお客の

前へ出さなくては御座敷もしりませぬコリヤ是非お買あげを。ナニサち直段は一
向捨うりどうやう。一圓のうち五銭はねて買つて来ましたか御家がらで五銭などい
釣銭の沙汰も煩らはしい五銭は宗匠が買ひ次償として一圓で御手許へナニノ金子は
飾りがけにお店から頂戴しますと有無をいはず賣つけて公然の五銭の口銭も秘密手
段で七八十銭の口銭をフンダクラしたる侍座不赦の愛器を引よき真鍮の小性張が平常
琢磨されると見え金色燦爛ほとんど黄金と見紛ふ計りに照りかがやく吸口銀の煙管に
づぎ込み一ふくブーッと吸こめば國分や薄葉の上等をちがひ中野あたりの買目賣脂が
つよくて咽がピリツクおまけは煙りが眼へしみてコホン／＼ハックシヨ……飾りシヤ
ツの二の腕で両眼を摩りながら(幸)チウ背の煙草だ。からい／＼。コリヤ宅に居る時
の平常吞て此客箱へ入れて置のでない筈だに。誰が所爲だか。ウツカリお客へ
出さうものなら能い耻かきをする處だ……紳士とか貴顯とかに交際を結ぶものゝ萬事
萬端注意をせねば相ならぬに……家内のものがどかく其心得にならぬから困却いたす
て……時に一件の如何致せばよいか知らんて。アノ岡本通俊といふ人は實に東京の

財産家かしらん。ア、近比のまアづ投機師らしいものは絶えた世の中ゆゑ投機師の
在もせまいが然しいふ處が餘り大きなのでチト心配もする譯だがコウツト五十萬圓の
資本で西陣物を悉皆一手に外に向の物品を製して之を直輸すれば一方は東京に名の高
い澁澤。大倉。益田。伊藤。安田といふ顔であり孰の國へいつても公使や領事は心やすし
商法向の事に力と盡すは當然の事なり利益をはかる段に至つてハ尋常の倍にハキツト
向ふといふものだけ唯愛ふる處ハ此地に於て一手に是を引受けねばうまくなし一手に
引受るとするには織掛職工等を悉皆自身に世話せねばならずこいつ中々大仕事だがア
ハ／＼うま／＼二三年間も此商法に従事して居たならアノ穴も……この穴も……マ塞がる
は親面だがこいつ餘りうま過るので……然し向ふからは孰れ証據金として四五萬圓は
入るといふ是は確乎な事はないが向ふから四五萬も入れれば此方からいづれ一二萬の
出金せねばならぬが……ソノ一二萬が……ハテナどう致したものだ知らんて。よく
東京のものがいふ處だが京都紳士はどかく疑念が深いのでうまい商法も直ぐ見放すア
ハは必竟顯職方に懸念が薄いから疑念も生ずるのだと……成程いはれて見れば夫

る様にわたりませんがアリヤよろしくない人物だど……マア人の口は右もあれお出入致
す日那方ではアノ其嵐堂とは交際するナ。卑しくなる。人品がさがる。風流の害になる。
江湖の名をれになる……とサ御忠告で御座りましたが渠も天下の宗匠株瘦ても枯れて
も連俳の風流に遊べるもの爾いふ筈はない筈だど段々探索を遂ましたがサテハヤ人と
いふものは見かけや名義によらぬもので。渠は其嵐堂ではない狂亂堂であらうと考が
へましたて……古池へシヤボン身投の蛙かななどは先彼等の事で御座りませうりや一
家言一派流を立るも宜し御座りませうが發句なら發句らしく俳諧なら俳諧らしくやつ
て呉りや芭蕉も地下で泣きすまいが發句は十七字俳諧の三十六句歌仙位が關の山で手
運遠波はどうしたものの假名遣ひはどんなものオとチの區別イエエサの沙汰も一向滅茶
苦茶丸て川柳同様の風もなく体もなく口調句拍子も頓着なし權でもよい入てもよい何
てもよいから社中を殖して月毎の會に句數が澤山よつて朱料の澤山とれる様何ても
會さへ澤山あつて撰者にさへなれば朱料の取ると無暗滅法人にすゝめて發句の會を催
ふさす是が渠等の財産で中よも豪家の弟子を持つと會毎に其人の句を抜く様よし上手

だどか宗匠の腹をぐりだどか唱て我腹へ抱込だ上て一家の經濟を任するといふ巧み卑
劣調陋との渠等の事で御座りませう渠等が俳諧で最一層甚しく金持弟子に結構
くして苦もなく附句を承諾すれど質のない弟子の附句を見時へ是でも附句今一考アモ
面白くない尙一考と金錢づくで歌仙を仕立ます故一卷の体裁が支離滅裂チリ／＼パ
／＼何處に匂ひがあるやら何處に面影が有やら古事を引にも通俗本の説を是と心得古
語を遣にも字句の轉倒を屁とも思はず實に無學文言なるものは近世の俳諧師であらうと
學士達が歎息しますが道理の事で御座りませうイヤ是は飛だ講釋を初めましてお炭もツ
イに……ナニ／＼結構て夫でよろし御座りませう……近來は實に近來の非常に御
進歩で……其も調子なら眞の臺子も時の間で御座りませう。其杓はこう……左様／＼
夫て宜し御座ります。實は爾いふ所が所謂秘事だどか口傳だどか他の宗匠輩が申し
まするが是もいは其嵐堂同臭の輩で御座りませう實にわの其嵐堂杯は御家柄へ御出
入を御許しになつての將來如何の御名義に關する事件が出来いたすやも測り難しと存
じまして不用の忠告でも有りますが是も必竟お家柄を思ひましての事……然し即時に御

放逐ては……先漸々に……オヤ何某か御客來が……フム……ヤ……其嵐堂が参りまし
たど……ハ……ヤ是はく

三十と七すぢ

侍女お竹が通ひ口より客來のよし申し込みて未だ主人の返辭もなきにツカ〜入來る
其嵐堂宗匠不遠慮の俳家の禁物自他の區別は句作にわれども貴賤上下の隔てなきが我
俳道の真趣真味敬して遠ざく風雅の真面目にあらざ狎て近づく先哲の遺言なりと
我一人が呑込み顔にて通ひ口にツイと入り(其)ヤいお竹嬢毎度も執次を煩らはして。
唯今勝手に承たまはれば御一客にて御手前が初まる事の事。御一客ての定めて御退屈
と存じ御席末を汚し一服頂戴とは甚はだ以て不敬千萬併し不佞の不遠慮の御主人にて
も兼てより御許可を蒙むる所ゆゑ強つけて狼藉に及びますか……ハ、ハッ……成程わ
まり御退屈して御日ぐらしの茶の湯。夫の結構實によい處へ参り合せましたの不佞の幸
福……ヤ然らば御意に隨がひまして御席末を汚します……ヤ御免……これの初めて……
……ア、ハッ眞平お邪魔をいたします……ハ……不佞の御當家へ始終お出入をいたしま

す。なよさ名前などもなきものホンの職人同様のものですから向後は御懇親に。ハッ
ハッ。ハ……イヤ不佞などは一向茶事はぞんじませぬ唯ガブ〜とやらかすろの茶の
味が好といふので……ハ……イヤハヤ茶人の爲めの罪人といふものです不然し不佞が
いつも御主人へ忠告致して居る事が御座りますア貴君も茶事に御執心と見受けま
るが尙し御氣に障る事が有ましたら眞平御容赦お聞流しを願ひます……そこで不佞
がつらく世を觀察致すと或ひの改良といひ或ひは發明といつて諸藝道が大きき進
歩いたしますが其處へいつては頑固といふの茶の道より外には有ますまい……モ御
氣に障らばお聞流しを願ひます。何故なら近世の内地雜居も近き有りといへば外國
人と相借家となるも亦近ヒ中で御座りませう。五年かゝるか十年かゝるか知りません
が軌道末に赤髯連と膝を並べねばならぬ世の中さア夫れでなうてさ〜京都わたりへ
來る異人の重に見物ばかりといふもんですから少しは平常よりひねて居ませう日本流
の茶の湯はどんなものかと覗きに來るは。よしか子。夫をとつ掴みてアノにじり上り
どかいふ犬の潜る様な處からニユーと……イヤ夫て可笑話がある上京邊のお名は措ら

くとして或宗匠家へ御馳走に異人を伴つていゝた處が此碧眼先生は西洋でも稀なりとする脊高で七尺も有うといふ何が狭い穴からユニーと出掛たが蛇の様お蜿蜒も出来ぬ四分の三も身体を入れて両手をついて身体を保持するとき柱にかゝつた掛花生を天窓でゴツツリ押からがすと柱を外でグワタリ。陶器だからミシリと毀れて花の散乱水の漫々茶室中が大洪水異人の苦笑ひして茶も碌々のまずにツヒと退散。なんと馬鹿らしい話しては有ませんか其處で不佞が改良と發明を合併して文人流胡座手前といふ一個の茶道を起したいと心がけて御當家の御主人に舊來の千家とかせんきとか藪とか林とかの窮屈きはまる手前をやめテモ宗匠共に冗贅に吸とらるゝ傳授料をおやめなさるがよろしいと……御氣に障らばお聞流しを願います。實に是さて茶道に疑る人の時にとるど財産を潰して目を覺す事もあるが潰させるテモ宗匠の多いには實に……歎惜痛歎いたす事でありませう。貴君も茶事に御執心ならば茶器も定めて澤山御所持て御座りませうが。世の中に茶器ほど馬鹿げた高價のものはあるまいと考へられませう。飲もの喰ものは清潔の上にも清潔にせねば成ませぬがサ夫も天下の絶品とか實に得がたき口

ならば財産相應買調のへて……玩いたすもよろしからうが掃溜から拾ひ來りて犬猫の小便糞もかゝつたと思ふ様な汚穢い品で一ツか何十圓何百圓實に馬鹿げた話して……サア是が眞に其位の價格があるかと思へば決してない。其價格の宗匠に在る一宗匠がつかまらぬ器物を大事さうにヒチクリ廻すとかの徒行者の道具屋が出て来る。是の面白い何處其處へ向く品だ。直段はいくら。アノ家なら何程と。原價が三錢か五錢のものが何十圓といふ高がつく。是から道具屋がヒチクリ出してアノ手へ渡り此手へ渡りてツヒに思ふ坪の家へ納まると此器の原價が三五錢で末に二三圓四五圓の代物となる。本元の宗匠へ二分一餘は道具屋の分頭配となる。なんと此處まで探つて見れば茶の宗匠の商人の本元と同じ事。どうです賤いものではありません歎之て數寄者もないもんです其處で不佞の考がへてハ釜一ツあれば茶の湯はすむものをと利休が詠歌を土臺にして發明いたした文人流胡座手前の其仕様の茶席でも椅子でも所をきらは……ム……チイ〜お竹どん。何だど〜。ハ、ア又お容のお出だど。何某〜……ハ、ア御主人。岡本君が見えたと申します

つたに是を思へば我道の數奇人粟田口の善輔が。手取釜のれは口がさし出たぞ雑炊
 たくど人にかたるな「實にさし出口の譏謗は失策であつたわいと心中の後悔を鷄鷄が
 へした。ア、やり損なつたぞ此また主人めが一口茶道の宗匠だぞぬかしたら目前前
 に茶道の腐骨はいひもせまいに。是を思へばかの崔氏が座右の銘をとり。物いへばく
 ちびる寒し秋の風と。祖翁も誠しめ置たるを失念せしことを遺憾なれ實に口は禍の門。
 舌の災の根であつたなと千悔萬恨胸裡につゝかけ來り面目なげ首言句も出さず睨み合
 たる可笑しさに(幸)どうです其嵐堂の先生。茶といふ奴は實にいけぬものですな……
 (其)へい……(幸)お説の如く町人百姓で道具好や座敷の普請で財産を抛うつものが何
 程も在たが近來ハ馬鹿げたものだと氣が注たか隠居や坊さんを除けるの外はあまり疑
 るものもなくなつたノニ……憚などの商法一派のものが之を玩弄するどいろもくの
 過まりでした。以來は宗匠の忠告に隨がひ文人流の胡座手前と改宗いたす事にしませ
 う(其)ウ……ハ……イヤ夫ハ至極エ、結構な……まづともかくも……(幸)いかです
 休閑齋の宗匠。俳諧とか發句とかいふ奴はいけるもんぢや御座りやせん子(休)へい

くム、まづどうもエ、アノも和歌の流れ連歌の一流でエ、風雅とエ、エ……オホ
 ン(幸)イヤサあれも疑つてやらねば面白からず疑れば職業も手につかぬ其又尊重
 しておく處の宗匠家が爾いふ心事ならば實に芭蕉の罪人といふも不可なき所ゆゑ今日
 より斷然休俳と致しませうサ(休)ウ……夫はハヤ何とも恐れ入つて……(幸)イヤ御兩
 人のお説によつて僕は大きに徳を得ました今までは丸で欺されて居た様なもの……大
 きに忝むけなふ御座りやした……時に唯今御膳でも差上ませう……緩々どめし上つて
 ……唯今申す如く商法の爲め來客ゆゑ失敬します……然し御歸宅にある事なら御勝手
 に……アーツ(鷗)ヘーン(其)フーン(鷗)ハアーン(其)ムフン

三十と九すぢ

金田屋幸太郎の從來京都豪商の風に染みて俳諧だの茶之湯だのと冗贅な事に時日を費
 やし金銭を費やして來りしが固より好んでなすにもあらず目下の紳士社會といふは假
 令内證はどまれ角まれ綽々として餘裕あるの意氣込をわらはさねばならず然れば今日
 くの交際には祇園遊興を第一主眼となす人。歌妓を抱く我。舞妓を抱かざるを得ず

ビールと來ればシャンパンと呼び諸會社の創立といへば暖廉イナ紳士の名稱に對して
も何十株と持ねばならず有志の義捐にのみ見てもなき出金高も書れず府會區會の議員
にも一度の撰擧されねば一家の經濟は知れぬも一府の經濟に通ぜざる迂遠者と笑はれ
るも口惜く内々撰擧者を勸めて見ても親の遺産があるといふ計りて學識の聞えなけれ
ば投票するものなく殊に近世の各府縣に議員屋といふ一種の新商賈が起りし傾向あ
れば中々正々堂々たる議員とはなる事ならず是幸太郎が一の遺憾にて之が爲に若干の
金員を費やしたるが未だ時の至らぬと觀念し何分内外の事情を知るもの新聞紙に若く
ものなしと京都の勿論東京大坂の新聞雜誌を購ひ之を閱するにも官吏の往來を最貴
として二三の雜報を讀みて宴席に至りて大臣次官の舉動の明らかなるものと言はれん
とし社説や寄書は讀むに違なしとして政治の方向などは一向頓着せず一令出れば恭し
く奉戴し一運來れば謹しみて遵奉するものとし假も政体を議する書生壯士などの蛇
蝎視すれども斷斷する時は彼是悪くいはるゝを厭ひて敬して遠ざけんとなし特り上流
社會紳士結團と免許狀を自製なし唯名譽を求むるに汲々たるが高等官吏の來往には必

ら其宴會に列なれど悲しい事への識見に乏しきゆゑ座上に進みて自身の意見を演る
事もならざ合割高い會費を出して揚々ど得意氣にバッククのみ去とて舊弊の同業連を
離るゝ事もならざれば俳諧や茶之湯を學びて之が交際もなさねばならざ目は二ツあれ
ども見る處忙しく造物主が頭後にお代りを付ざるを恨み耳も二ツあれども借しむらく
は籠といへる通りぬけにて備忘録を記すに違なく期く八方十方へ手を廣げたる交際に
の自分一人の交際散り計りては濟す妻のお花を婦人慈善會へ加入させねばならず舞踏
會とわれは是へも出場させて貴婦人の情態を學ばせねばならざ又細君の請願によりて
の觀劇にもやらねばならず長男の幸助は洋服の請求靴帽子の懇願時々奏上せられて
是すら瑣細の費用にわらず内外多事交渉頻繁となりての家庫漸次に空耗を來たし得る
處の店頭にて番頭手代が商法の利益にて出る所は際限をしらずこりやとてまたまらぬ
わいと氣がついた所が他事と違ひ今更引込むこともならず四方八方へ融通して會計を
立ゆけども到底出納相つくなふの場合にいたらず寧ろその事に病氣と披露し少時社會の
繁劇を遁れて身を閑散の位置に置き節儉もつて貯蓄の論例に倣はんかと思へども夫て

江湖上が眞暗になりて將來世に出べき機會も有がたからん然らば隠遁の窮策もなりがたしと悲し苦して紳士交際なし居る間に圖らば俳諧師と茶の宗匠が内幕計きの腐骨ばなしに好き機會ころ出て來りたれど夫とはなしに家の出入をどゞめ彼等二人を退ろくれハ年分にとりても何程の節儉に相なると腹勘定の其折から彼の岡本通俊が訪ね來れば對面して其來意を尋ねるに例の織物商會に關する一件にて二人は額上をわつめたゞ種々協議をなしたるにまづ大体に付てハ雙方のいふ所恰かも符節を合せる如く餘ハ細目となりければ岡本通俊座を改ため(岡)サア是まで御談示申すも僕に於ては飽まで君を信用致す。僕が信用いたせば澁澤其他四名のものも同心合体いたす事御座るが君には僕と未だ一面識の事ゆゑ定めて狐疑を……とサ申すも失敬だが夫ハ當然の事。斯る大事業を未だ孔鼻なる僕等が陳述いたす事ゆゑ信用は薄いて有ませうソリヤ御道理デスが君は定めて澁澤以下發起人の内に御面會になつた方があるでせう……ナニまだだど……ソリヤ京都紳士にも不權衡の事スナ……アハ……是ハ失敬……時に一昨夜電信ありて澁澤が本日大坂まで來る筈。ナニサ商會の用と他用を兼てデスが

未だお逢ないどわらば僕と同行にて大坂まで出張して下さる都合には運びますまいかな……ドウデせう……ナニ同行する……イヤソリヤ何より結構デスナ萬事ハ澁澤に對面の上……左様今日の午後四時四十六分よ下坂致すと……ちよつと服を……ハイ僕屋へ宿替を致しました

四十をぢ

瀧笛一聲七條の停車場を發し向日町。山崎。高槻の各停車場を越えて茨木の停車場に達する時大坂のぼりの客車一列軌道を疾驅し來りしが瀧笛と共に疾驅を止むる此時のぼり下りの瀧車は彼窓此窓相接し乘客と乘客は顔を見合す折からのぼりの下等室より顔を出して下る瀧車の中等室を覗き込れたる一人の男は金田屋の二男にて八陣長屋に侍虜となりたる庄二郎中等室の二名の客がさも睦まじげに談話するを見るよりアアヤと驚ろく様にて身を退けしが尙再び覗かひ見んと首をのばせば中等室にハアサア運き發車であると眩やぎ乍ら二客とも顔つき出して端なくも庄二郎と顔見合せ二客はどもに驚ろきしが其儘かうべを引込まするを合圖に軌る下り瀧車は吹田をさして走り行

く(庄)ハアナ妙だワイ。アノ中等客の一人の貴兄の幸太郎に相違ねへが今一人が怪有
だワイ。どうして貴兄と一處だしらん。但しは圖らず乗合せしか。普通の乗合にしては
懸意すぎた話しの様に聞えたるが。どうした中であらう知らん。モシもアノ男と懸意
にてもなつては大變な事件を起すであらうが……コリヤ寧ろその事大坂へ馳せ歸りて兄
幸太郎に對面し様子を委しく聞て見様か。ハテどうしたら……オウ瀛車ハ早いもんだ
モ一これ高槻だか山崎向日町を經れば直ぐ京都だ。ともかく京都へ立歸り女房お玉は
どうしたか心當りを一過尋ねて知れねば大坂へ下ると仕様と獨り言する其中に七條へ
到着の海笛と俱に立あがり久し振にて歸り來れる都の空へ着たものハ錦にあらで木綿
あり飛白の單衣に三尺帶ゴロツキ風の悪人体を人よ見せるも耻かしと顔を包むが如く
にして大佛前の舊すみし家の軒端を窺がへば固より荒たるわばらやの尙われささりて
軒かたむき見るもいふせき有様なれば逆も此家に住ては居らじと思ひ乍らも我すみし
家と思へば懐かしく戸の隙間より差のぞく。宅にはお玉が我子を傍へに遊ばせ乍ら一
心不乱に三本の針を手に操どりもの打組むハ近比流行れる毛糸の編物と思はれて向ふ

に座せる立派な娘絹布ぐるめに束髪袴此わばらやには不思議なりと蜘蛛の圍はらひてよ
くく透せば見紛ふ方なき我異腹の妹あくめでありけれハこりや又早い成人だモウア
ノ程あなつたのか變らぬものハ女房の艱難とお糸が標致變つたものハ我風俗ハ我魂し
いとひとり懐舊の涙よくれしが傍への小兒は我出奔後に出來た小兒かなつかしやどろ
いろ戀しく馳せ入らんとはなしたるが流石お糸の手前もあればお糸が歸つた後にせめ
ど身を打ひろめ居るもとも神ならぬ身のいかでか知るべき編物しあけて(糸)喃姉さま
今日の學校で試験日ゆる思の外遅ふ來ました故仕事も充分出來ませぬシ。激へ申すこ
どもならせ明日の幸はひ日曜ゆるりと参りて御はなし致しませう一重鎖二重鎖は
モウ易々と出來ませう明日は寄せ鎖と敵入をお話し致ませう。チ、ぼんち。サ、ちよ
つと出。ア、いと兒だねへ大人しふて……そしてどうも中兄様に其まうといふ顔付
だから此兒を見ると庄二郎さまにお身の上が思ひやられて……今頃はとうしてお出な
さるであらう。コンナ兒の出來たとも知らず他の國に氣樂に遊んで居なされるのか。但
しは勞力廻つても思ふまうにはまわらぬので難義を致して居なされるか右左心にかより

ますが……ア、ホンニ又いひ出しては泣せませするモウ、何も申しません。歸らぬ人
の是非もなし死んで御罷了なつたなら本籍の方へ通知も有ませう未だ一度の便りない
は何處で勉強して御座りませう。死なぬ人ならツイに一度の逢れる事も御座りま
せう。かならずおきなく思はせに。ぼんちを大事に煩らはぬ様……今日も又遅ふなつ
てア、日暮になりまします明日は又早ふ参つて御手傳を致しませうと暇をつけて立
出るさま庄三郎の見咎められじと向ふの長屋の物かげに走りかくれる後影をチラッ
と見認めて眉に皺(衆)ハテ似た様な人もあるモシ其人では……(玉)お衆さん何だどね
(衆)イエ、こちらの事でありますよ。チ、ぼんちハイ左様なら……又明日も……

四十一筋

庄三郎はお衆が去たる跡打ながめ舌打なしモシ見認めはせざりしかと思へど見認めら
れたりとて耻は耻なれ逃かくる、程此地で悪事を働らかねば差支へなる事はなしと跡
見送りつゝ、扱あしなし家の門口へ身をよせて(庄)お玉……お玉……と呼ぶ聲も四隣に
はどかる忍び音をフット聞とる女房お玉(玉)今のはどうやら聞なれた聲だが何者であ



玉山筆

るやらと言つゝ門へ立出る此明既に彼誰時の湖くらがり透し詠めて(玉)何某て御座りまする御用が御座りましたら御這入り下されませ(庄)面目なくて其敷居が高く宅へは……(玉)エ、何やら仰しやるが細い声で聞えませぬ玉は妾で御座ります。何某是へ……エ、貴公は……ヤ……あなたは……ウ……(庄)ア、コンコンチヨツたま〜逢に來たのに目を眩されては大變ダ。コンお玉〜しつかりしてくれ小兒が泣がなコンサコンサと言ながらお玉を抱へて宅内へ入り土瓶の水を口へうつしオ、イ〜と碎蘇生れバ我に還りて細目を開き良人が両手へシツカと鏡り(玉)ヨ〜もどつて下さりました宜き戻つて下さりました。サ此子が貴夫の置土産是程迄に成人さした女の業の手一つを想像やつて下さりませと長い間の恨の程いはぬはいふに升の米終に買得ぬ疲世帯母の子玉の緒今日が日々で繋ぎどめしも不思議な事と我子を抱き庄二郎が膝の邊へ押やれば涙にくらむ目を押拭ひ抱あげれば我顔も生寫したる兒の顔。父よと思へば莞爾〜と笑ふて綻る愛らしさにはらわた湯け魂しい碎け茫然として詠ひる中にも我子の笑ひに心づきオウよい兒と褒ながら撫つ摩りつ餘念なく(庄)お玉お

やまつた。堪忍してくれ……いかに苦勞をさせてのふ……(玉)イエ〜苦勞も厭ひませぬがお歸りある迄此兒には風邪でもひとつ感せてならぬ健康に育て、手渡なし出かしたお玉と褒られたさ。夫ばつかりが張り合で人の仕事の滌ぎや洗濯夫さへ隙になり行て河原へ出て石割の哀しい苦勞を……其石割が縁となり本家のお糸さん見認められ今では毛糸の編物で易々母子が口を過せば氣を落付けて是からは何處へもいつて下さるな(庄)エ、(玉)仮令ば鯛ゑて死ればとて夫婦ともなら厭ひはしませぬ。夫につけては今日の今迄何處に何してお出であつたか(庄)エ、(玉)狎鷹の婦人が出來たどて夫を彼是申しませぬ(庄)エ、(玉)安堵する爲め別れて後のなり行き聞して下さりませと求むる言葉は皆もつとも疾にも返答出來ざるは庄二郎の胸の内わかしていはれぬ身のなりはい然しモ一度愛わかれをせぬばならざる此お玉慰むひ隠して後に到り願われたらば還つて歎かん若し心を打わけて縁を切るとも繋ぎ置ともお玉が心にまかせんと思案を定めはさだめ乍らもし身の上を言出して縁を切たる其時に此子のごちらが有り育てる歎男の子の男につく昔時の定めいともかくも戸籍面に庄二郎が長男なりと書

わけあるべし我手に育つも厭はねど小兒を連れて行れぬ所へ行ねばならぬ身体であるのに今引取つてり里親たづねて此子に不自由見せねばならず今まで包んだ身の上なれば寧ろ何もかも皆かくし玉を欺ひき出かけ様かア、ユンナ思ひをする事なら逢に來ねばよかつたものをと義理と情と恩愛と悔みに歎きを取交せて腹中さながら盪ける如く茫然として玉と小兒の顔をながめて言葉なければ玉の何か氣にかゝり(玉)一度師つて下さつたら再回も出かけあるまいと思ふて居れども是までの成行から將來の事をお話しなければどうした事と案じて斗り居まする氣の休まる様お話しをど又もや請るゝ出先の始末に胸を定めて庄二郎(庄)これお玉何もお前に包む事もないが今あらためて云ふて聞すが決して驚ろく事はならぬ又此庄二郎が身の上になん事か起らうと決して歎いたり騒ひたりしてはならぬがそれ承知なら今迄の身の形行を話して聞かせお前の丁見も定めて貰はねばならぬがよいかい(玉)エ、何事でも仰やることなら背きの決して致ませぬ父子夫婦が陸まじう暮してさへ行るゝ事なら(庄)いやさ父子夫婦が陸まじう暮さるゝなら結構だが今日逢ひに來て今日直ぐに……(玉)エ、(庄)わかれば

ねばならぬ事あつて……(玉)エ、何の事で御座ります(庄)サとばかり又もや別離ねば……(玉)エ、……

四十と二とぢ

(庄)サお玉。心をしづめて篤くりと聞てくれろよ。己が今の風俗……三尺帯の姿を見ても眞面目な町人でない事は察して呉れろ。好んで斯いふ姿になつたではないが。餘義ない誠によんどころない切迫つまつた命の際から斯した身には成果たが。トいふた斗りで分るまいが。京都にあつてはアノ始末で迎も身代をもち起す譯にはゆかず切めて場所でも替たならど不實ながらお前の身の上懐妊であらうと思ふを振すて、大坂までいつて見たが押了どうても資本はなしブラ〜する内一文なしとなり首を縊つて死なふかど……情けない身の上になつた處を大勢の人お助けられ二三日も喰ぬ腹を肥したが此大勢といふものゝ恐ろしい人間斗りて……(玉)エ、マア何人で御座ります(庄)大坂でも名の高い名護町の八陣裏とて撈盗や拘摸のより會サ(玉)エ、モウ心ならぬ夫から尊夫はどう遊ばして……(庄)ろの撈盗や拘摸が隊長の人がないどて給馬の齋に天

窓を描く人をまつて居たどやらで己が死出の土産にしゃうと悪戯に描たが種となり是非とも隊長になつてくれと大勢にすゝめられる助けられた恩もあれど擄盜拘摸の隊長にいと辭退をすれば一も二もなく殺して罷了と向ふの相談どうせ。首でも捻らうと覺悟した上からの命を惜む筈もないが。サア其場になつて見ると身體をつき出し殺して呉どのどうも言にくひ。言にくい内に大勢の中から酒を呑め肴をたべよと俯める。ツイ一口も呑んで見るといよゝ命が惜しくなる。何だの彼だのと道理をつけて勤められ。ツイく擄盜泥坊の……(玉)アノ隊長に……エ、マアどうせうくチエ、お情ないお身持に……(庄)命がはりとと思ふ内よ馴れば馴れば其業も日増に上手になつたのでツイには市街へ出て働らけと仲間のものにすゝめられたが是も仕なければならぬこの事て京都生れの庄二郎を都庄ともみやことも綽號をよばれて擄盜のはたらき(玉)エ、お情ない尊夫のマア……(庄)大坂市中をうろくくと拵了うちお天神橋にて洋服客を拘摸とこね取押へられ警察の厄介にならうとしたのを此洋服めの東京下りの拘摸の隊長で見かけた山の助手になれと勤められ仲間を誘ふて悪事の加勢に女を一人助けたが其

夜中の島の橋袂で洋服めが往來人から拘摸て奪つたの三百圓。連の女の手に渡つたを再び己が占領てやつたが其往來人をチラリと見しが弟藤三郎に其まゝゆゑ今に不思議で堪られねどもし藤三郎が所持金ならめぐり逢ふて手渡したいと先大坂を尋ね廻つたが何處に居るやらめぐり合す。金は其まゝ手つかずに肌身につけて置たるが返頭名護町を取拂ひの一件からなら老者の穿鑿きびしく追々かり上らるゝ様子どうて一度の廻つて来る警察の繩目を受けぬ内此方から自訴して出てやらうと覺悟きめたが京都に居るお王はどうかど案じ出し自首したとても重い罪長い苦役を受ける先に一目離別を告たいと瀧車で上つた茨木の行違ひで中等室を覗き込めば兄の幸太郎と洋服の拘摸が睦まじさうな物語り尋常の乗合でも彼拘摸などゝ同車したら如何なる騷擾を起すもしれず追かけて大坂へ行き兄に此事密告なし尙又弟を尋ね出し三百圓の金子を渡し直に自首する心になつたも今さら遅き後悔の仕方子まで出来たを來て見れば未練も残るがこれお玉。不正な所業と聞たなら定めて愛想も盡るであらう離縁しやうといはれても己のちつとも恨みと思はぬ其方の思ひの存分にいふて右左相談してくれ。苦役につけば

見は連れられぬ里子にやるとも其方が手で育てて呉るも勝手次第。三百圓の大金の懐中
しても弟がもの。一金も手は附られぬが其他に懐中したもののは人の腰から抜とつた品
を賣たる不正の金我子の乳代に置たいが少しなりとも汚れた金で育てて見たら此兒の
將來定めて祿な事あるまいと心を鬼にし一錢たりとも貢かだ此場へ立去るや。コレ
泣て居てはわけがわからぬ。シツカリ返辭を……コレお玉といふ初めより綾もなく泣
崩れしお玉が愁歎(玉)イエ〜嫌だ〜假令不正の事あるとも妾の知つた事てなし
良人は良人我兒は我兒夫婦の縁はきりませぬ……(庄)オ、夫聞けば已も満足。長いと
いふても知れた年限。己も苦役を勤めあげ身體を洗つて逢ひに来る。右左いふ内終列瀧
車に乗後れては寸善尺魔……ドレ一走り……(玉)ア、コレ申しソレでハ餘りにモウ
シク

四十と三すぢ

。今日までお玉が玉の緒を取つゝいたも何の爲め。此兒を……エ、此兒の爲めに惜し
からぬ命つなひで養育して是まで手足を延したものの假令不正な仔細があるともまだ發
露たといふでなと二三泊つてどうかうと將來の事相談なし妾の心のやすまる様に得
心させて下さりませ産み落したま、此兒に何と名付けてよい事やら切ては親の名一
字でも冠らせたいと思ふたゆゑ庄作と名號たも役場へ届ける手順ばかりほんの名前と
いふてはなし夫やみれやの相談に年月隔てた二人がなかに話したいこと聞たいこと海
ほど山ほど溜つてあるのよ顔みだ計りに直ぐ別れるとは心づよいも程がある。此庄作
の惘然でないか。このお玉がうれはと憎い。實家はありても繼両親ないも増さる
無慈悲の仕向けに辛苦苦勞を可愛さうだど(庄)サ、道理だ〜恨みつらみもみな道理
……道理のないはこの庄二郎だ……如何にその日に困つたどと拘摸仲間まで零落ぬと
も仕様模様もあつたであらうに悔しいもどに命ひとつを惜しんだ計りよ今の後悔
泊りたうても泊らぬは世上の罪を負たる身ゆゑ……今日尋ねたる始めには逢ぬ所存で
ありたるが我兒と見ては遣る瀬もなふ立よる心になつたのぢや。いはれずとて三日

も四日も逗留しても居たいは山々なりと穢れた身体をどめてい前まへの身体も穢れる…
 …其處を思ふて足をどめぬ。必らず恨んで呉れぬがよい。窃盗罪にて論ぜられてい
 二月以上に四年以下。度かさなりし擄盗の事もあやすくても一年以上苦役に就かねば
 罪は消えぬ。是まで犯した罪科は苦役を受けて消るであらうが人間天賦の規則に戻つ
 た形のない道徳罪ハ脩身消る期はない切めて其罪はろぼす爲め肉身の兄が災害を救ひ
 肉身の弟が禍はひを助けてやり苦役の後には身を殺しても世の爲め人の爲めになる働
 らきなして終身の道徳罪を贖なふつもり…妹のお糸も逢たるい前まへの愛苦を助んど
 天道さまのお引合せ心を合して職業を勵み尙此のちの不在を頼む…今や庄二郎が
 改心の入口。一日おくれては一日の罪を重ぬる事ゆゑ哀しい思ひを是で別れる…ば
 んちよ庄作よ。オ、口々がさめて居るな。願て歸つて親子三人目出たふ對面いたすで
 よ…達者に居てくれ煩ふてくれなよ…チ、こりや大津發の終列瀛車。是から時間
 の七分時ばかり。乗後れては明日になる。さらばソも玉無事居よと捕らへし袂をふ
 り放ち韋駄天走りの雲かすみノウカなしやと玉が叫びし聲に和せるい停車場にて唯

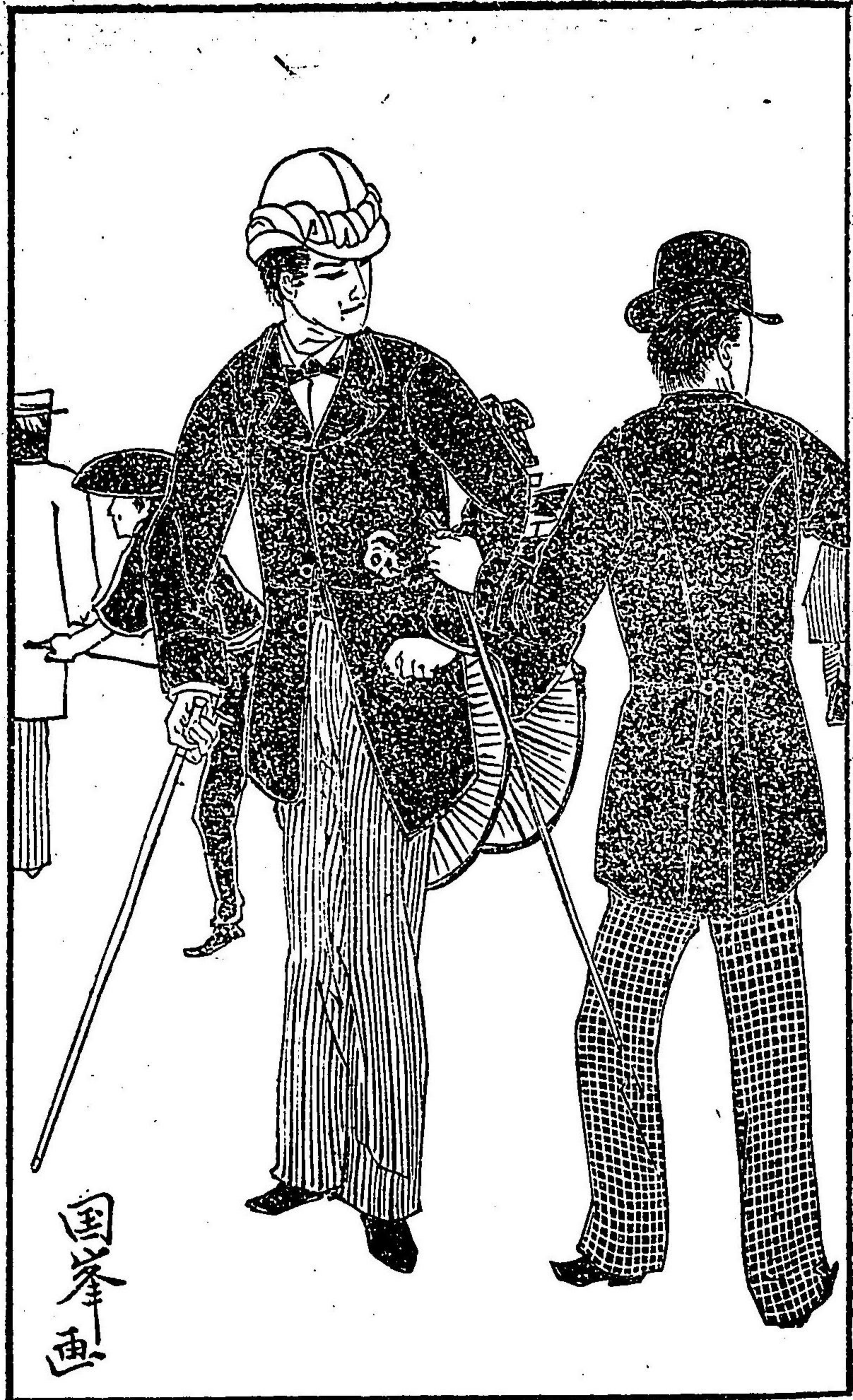
今着せし大津の瀛車が鳴せる笛の音雲にひりきてビユー
 大坂河竹の芝居茶屋むかしいろはと呼れしも今の暖簾にチヲホラ残りてわりしに増れ
 る繁昌の軒はいづこ道頓堀を濱に受たる二階建河から見れば三層樓の屋造りめきた
 る酒樓にて宜晴宜雨樓と扁額打しは南地に有名き掬水亭座敷の結構クダクしく記る
 すも幼なき業なれば省きてのせず此樓の樓側近く椅子引よせ鼻の先にて巻たばこをバ
 ク〜薫らす二人の紳士の金田屋幸太郎岡本道俊の兩人にて人待顔の難談も今は盡て
 や傍へなるヲモチを徐かに傾むけ乍ら(岡)どうしられた知らん今日はどうても到着の
 管てわつたがコウツト昨日と…一昨日と…ア、是でい一日延滞にあつたを見ゆる
 ワイ…イヤどうも金田君の手前。申し譯なき輕勿な次第ですが今まで待ても見えぬ
 からの今日大方延になつたのでせうどうも御用繁の處を…實にどうも…サ、爾
 仰せられては實に恐縮…イヤ斯う願いませうか是から他へ轉じて一酌をやるいか
 どな譯だか僕の知己が笠屋町にありやすから夫へいつてチヨツト一酌…ナニサ素人
 屋デスから其宅のものは喰れやせん孰れ大呉へても命ずる事と致しやせうイヤお供と

いひながら雙方に持も始末する折から漕ぎ来る一艘の通ひ船の船頭ども見えざる風体。舟の舳先につく立て水棹をやつり居たりしが圖らず二人と顔見合せ三人が驚ろく其中に二階の欄干に手とりつらまへ樓下を覗く一個の若者かれこれ四人が顔見合せて是はと斗りに驚ろきたり

四十と四せち

河を臨みて吃驚なしたる岡本通俊は胸に覺えの共謀者みやこの都庄が通ひ船に揖わやどりつゝキツト睨めばハナ悪い折出遭ひしと驚ろく色目を少しも見せず素知らぬ顔に上を見れば欄干にすがりて顔さし出すは中之島なる肥後橋の北詰にて其夜出遭ひし覺えの男是にもハツト驚ろきつゝ思はず落す象牙の吸口船へ落るを取あぐる此時金田屋幸太郎も思はず見合す庄二郎の姿ハ三尺帯のヨロツキ風情の身上すり切つて船子までに零落たかと思へば夢想も盡はて、物もいはずに睨みておれ、岡本は兄弟どいかでか茲に知るよしおらん長居せば締むつかしと(岡)サどうでス金田君チヨット笠屋町まで御同行を……(幸)エ、夫は有がたう参りませう、然が岡本君聞たまへサ俄かに思ひ

出した様でもあるが凡そ人間處世の最第一に苦難なるは商法といふやつて有ませう。こりや人が命を取られても離れまいと思つて居る貴重なる金銭を着服しやうと巧むのだから躊躇い最上と思はれます。夫も薄弱い資本で人の助力を籍らねばならぬ所謂牙保人とかいふものなら還つて氣樂であるが一千とか二三千とかマア日本でいふ中等の商人は蹺蹊い中にも尤も蹺蹊いに又五萬十萬といふ資本になると是は又思ひの外に喜樂な處も出来るものだが宙にフリの中等商人がひとつクンて來ると忽ち身代破滅……夫といふも心の用方一つで十人が十人爾だといふ譯ではないが中に不心得の者がありて二三千の資本でも持つと忽ち財産家同様の大商法をしたがつたり又は諸相場に手を出したり或ひは身上不相應の驕奢に耽る……商法の大小は右も左も總体流れ勝になるのまづ驕奢だ。遊澤や益田なんぞといふ人は日に五圓宛の洋食を喰つて居らるゝとも是は夫だけの收入があるから不思議でも有まへが僅か二三千の資本で商法するものが花街に浸り毎日毎日藝娼妓を對手にして居る様で、迎も財産は保てない忽ちちに零落して……と下らぬ話して弟庄二郎に聞よがしの意見ども知らぬは岡



本は唯フンなるほど左様くいかにも大きに御道理と受答へはするもの、其座に居るも氣が氣でなく話しの筋も耳へは入らざ分秒時も早く立出んとするに幸太郎は夫どもしらぞ(幸)子イ左様でいませんか自身が好んで驕奢に耽り夫が爲めに財産を傾むけながら其傾いたが悔しいから一時に取返さねばならぬと一六勝負の相場に引かよる。此相場がサチ。左様な人物が出来てあるゆへ出来たから利益を興へてやる大まうけをさせてやるといふ趣意で設立したのでありますまい機敏の才子が集會して分時秒時に勝敗を決する商法の戦場でありませう。其戦場へ疲れたる老武者同様の弱兵が飛込だどてナニ勝利が得られるものか乍まち兜を脱て降参するか陣死して首をとられる。餘義なく親兄の土地にも居られず脱走して親兄に耻辱を興へる。耻辱を興へて濟めばよいが親兄はじめ其身寄に繋がるものは始終心配して忘れ兼ねる。夫程の放蕩ものなら心配もせざ打捨つて置答だが。其處が不具の子ほど惘然とす。見れば惘然で……(岡)エ、(幸)イヤサ左様いふ人にならねへ様に商人は心がけたといふ話したが……此廣い大坂で。此繁華な道頓堀だから爾な人は澤山あるて御座いませう……サと夫どの

いはねと聞かして身を持たはせといはね斗り談話が變異になり行けども岡本いかでか心づくべき(岡)御話の道理サチ。下等なら下等の様に力作でもなんでも自由に立廻りどうやら斯やら糊口も附るものですが中位の中等商人が是から先は困難とせせう結局は豪商巨賈の奴隷とやらねばならぬ様になりませう。イヤお談話も面白いデスガ右左此處を切あげて……此處じやホンノ待合同様で秘密の集談を語るといふ場合にに行きせん……サ、お同行と致しやせう(幸)こりや大きに……ふつと浮んだ感慨から途方もなく長くなりましたさあ〜お供をど兩人のツイと立て其亭を立去る姿見うぐるより樓上をかり来る藤三郎舟よりあがる庄二郎言ひ合せしか兩人は道の前後に立ふさがり物をもいのち岡本が上衣の裾をかひつかめば(岡)ナニをすると言つゝも振もぎりて去んとするを又追すがつて押へんとする二人の顔を打詠め(幸)これ兩人とも何を致す滅多な事を致すと許さぬぞ……

四十と五とち

表の格子より入口の潜り戸沓脱より上り口の体裁の藝妓の本宅にしてハチト質素な方

にと遊藝の稽古處にては洒落すぎて居るつらく、案ざるに土地が大坂の南區笠屋町といへば道頓堀各劇場、出勤の俳優的が樓層多き場所柄ゆゑ舊の何の誰と網屋流の名札が貼てありしも、近比税金一件から京都へ戸籍を移し京都にても一軒の家を借受けて、両方に二軒の家となり家税萬端チト食するといふ經濟の一點から他へ轉宅したる其跡を建物家附小物を悉皆借り受け住込みたると見たの僻目か。金田屋幸太郎の先に立たる岡本通俊の前後を見廻し道に都庄等が尾跡來ぬに安堵して潜り戸ガラリ(岡)お民さんお宅ですカといふ聲聞より奥の方に唯今洗湯より上り來り湯氣の爲に鬚の位置がいらつたを鏡に向ふて直して居たが豫て聞き馴れたる聲により下婢の案内もまたずして出來たるものと見え(民)オウ岡本さんヨトこそ……サ、どううがわがり下さいまし……此比のズントおみ限りですチと莞爾笑ひし跡から附行く金田屋幸太郎情々と觀察すれば中肉にして少く肥たる方なり中脊よりのチト高き方なれど人の前に立て目眩ぼしからず面貌を見れば一目おして東京育ちと見へ一般の丸ボチャに對しての機分か京坂風の長方形を混濁し肌膚の鴨川生育の神經質青味を交ぜた白きにあらて血色皮膚

に顯はれ粘膜質の健康育ち去りとて黒しと評するの甚だ殘酷にして舊の雪肌水膚なりしも海路の汝風よいさゝか色づきたりと思われ物いふ度に笑筋の運動を起して頬邊に小淵を顯没す斯の如き姿を京都祇園新地に搜索しなば瀟車一連位のあるべしといへども唯一個の得がたきものあり所謂明眸より涙々として濺き出で男子の視神經を振盪する秋波にして俗にいふながしめなるもの之あり然とて敢て媚を求むる爲にあらで情を動かさんとするものもあらず天然此婦人に具備する處の一種微妙の愛嬌体にして此愛嬌体を販賣致さば年俸百圓以上其他の購客鼻下の長短に依べしるも、細君か小星か其出身の藝妓か娼妓か將良家の淑女なるかと幸太郎が心中の品評未だ畢ざる内岡本と婦人の二三回の應答有て(岡)サア金田君どうなれ杳をと云て氣が付小聲になり(幸)何デスガ此處は席貸と云風でもねへが……(岡)大に御道理デスガ……南地の青樓にも二三軒の遊で見たし知己がないでも御座りやせんが。ドウモ……マ近比の紳士諸君の右左妓樓に於て事故を談するゆゑ侍座の妓輩の口さがなく忽ち秘密が洩世する……デスカラ……此家を……サ、御遠慮なく……(幸)シヤ御免を蒙ふりませうかと靴ぬぎ

捨て岡本に従ひ行ば奥の方は八疊ばかりの客座敷にて床の間脇床違ひ棚掛物香爐花生
まで華麗過ぎず佻すぎず取合せの恰好はわるけれど夫等の体裁に凝るといふにあらす
唯有合せを置たといふ風にて却つて床しくも打見られ狭き乍らも前裁ありて詠むるに
足れば幸太郎は其處此處見廻す内黒塗時繪の乱れ箱に單衣着二枚羽織二枚に細帯まで
添へて下婢に持たせ以前の婦人がすらく立出て(民)岡本さん誠に召にくう御座り
ませうがチヨット御召替を……どうも間狭なもんデスから椅子や卓机を掘て置ます譯
にもいきませんから服で入らッしやる御客様には困るでありますヨ。サ、どうか御召
替なすつて……此品の貴公に。是は岡本さん……召なれぬ着物デスから。をかしぶ御
座りませうヨと勧められるに幸太郎のイエく是でナニ着替せどもよろしいなど、例
の京都風の謙退辭讓悪るがたく辭するを聞入れを岡本どもく主人の婦人が強ての勸
めに肯み難く漸々着替て座も定まれば(岡)時にお民さん今もチラリと申す如く今日は
例の濫的が来る筈で打合せかたく道頓堀の例の所で待て居たが時間も外れる今日で
は有まいと思つて外の青樓へいかうと思つたがドウモサ南地藝妓の優俳のろけを受る

のもつらしサチ又此金田君に談示かあり彼是するから自宅を拜借に出かけたんデスカ
ラといふのの實の虚談サチ。やつぱりお民さんの愛嬌を見ながらチヨイと一杯……
(民)アラいやデスヨ。岡本さんは此比申戲ものにななりデスヨ……ホ……ドレちよつ
としたもので一献差上ませうチヨット御免下さいまし

四十と六はち

(幸)ム、どうも鮮麗だね。僕ハ一体婦人への目をかけぬものですが。今の……此家の
主婦なるものには瞳孔も散大せる様ハツと来ましたアハ……時に此主婦ハ一体何者で
すチ(岡)アハ……金田君が眞面目に尋問するから可笑が。ナニサ何でもないものデス。
ちと慚愧の至りだが彼のお民といつて僕にや再従妹に當るさうで……(幸)ムフン……
従妹同士の鴨の何とやら甘さうな……(岡)こりや途方もない冤罪の禁むりやうだね。
アハ……決して猥褻な中ぢや御座りやせん。彼の父母と申すの横濱でも貿易商の屈指
てあつたが一朝の損失から横濱を去り處々を漂泊し此大坂に流れ來り終に娘を人の
權妻とし是を以て生涯を送り父母とも此地の鬼録にのぼりましたがあのお民といふも

の御覽の如き容貌なるに其心操も亦比ひなき貞順なるものにて父母の災星に罹らざれば東京横濱の間にありて貴婦人の稱をも受くべき婦人であるに人間の不幸の……
 (幸)フム……(岡)不幸の一にして止まらず當地本町の豪商よ身を任せ小星となりてあり此家屋も彼の豪商が購なひてお民に與へたるものなるが其豪商も不幸にして當春死没し……(幸)フム……ヘーン(岡)再度の不幸に世を果敢なみ剃髪せんなど致せしが測らざるも僕と面會する機會ありて僕に深く之を押し再醮の義をすゝむれども彼は容易に肯んぜず然りとて婦人一身を以て世を渉るは危険なるより強て再醮をすゝむるに彼は諾しは諾しながら今更に良家の婦となり難ければ住馴れたる此土地にて心易き人の妻ともなり一生を送りたしと情願も亦止むを得ざれば僕も俱々配慮して相當の人物を見立る時でありますのサ處で幸はひ尊公とも懇親を結びたるが尊公は京都紳士の錚々たる方も定めて知己の紳士も多くあるで御座りませう然るべき人物あらば一面識を懇意として御世話をなすつて……アハ……是ぢやまるで媒介口を利く様ですナ。然が彼も大坂の豪商何の某の外妾なりと既に人も知りたるに再び大坂人よ見ゆるは好もし

からずなるべく他所の人物を……是も亦無理でなし……ですから尊公の御耳へも事情を吐露する譯ササと委しき説話に幸太郎なるほど小星と見たりしが我觀察にも差わざりしと思へば思ひ廻すほど唯今席を去たるお民の花顔細腰眼界に入り來り交感神經の作用は追々に興奮し來りてア、ウ、斯してあゝしてあゝすれば斯なる彼穴を是を以て埋めアノ益を是より移すと是だけの餘裕を生ぞる其餘裕をもつて斯する時には婦人一人下婢一人尤ども容易に過すべし然る時は祇園街の舞妓を離縁とし月々の費用を之に轉從する時は若干の餘計を贏すこれ尤ども得策にして贏す處は家計に足すべし今や大事業を起すに臨みて彼より囑托さるゝ所を他に移さんい遺憾なり又僅かの婦女一人を養ふ事能はざるかど内幕を見られんも甚はだ遺憾なり道は少し困難なるやりくり算段ありとでも應ぜざれば紳士の面目にも關する譯なり然しながら月額は何ほど欲きといふものか聞て見ざれば心ならずと一見痴想を惹起せしより種々意中も狂ひ出して尙も事情を尋ねんとする所へお民は其席へ入り來れば忽ち話頭を他へ轉じ商法其他の世上語りを傍へ聞して揉手をしながら(民)岡本さん……どうも今日は濕氣だといつて一